山ノ下遺跡
稲荷山館跡 第2次
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

2008

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

山ノ下遺跡・稲荷山館跡第2次発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

山ノ下遺跡
稲荷山館跡 第２次

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

平成20年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

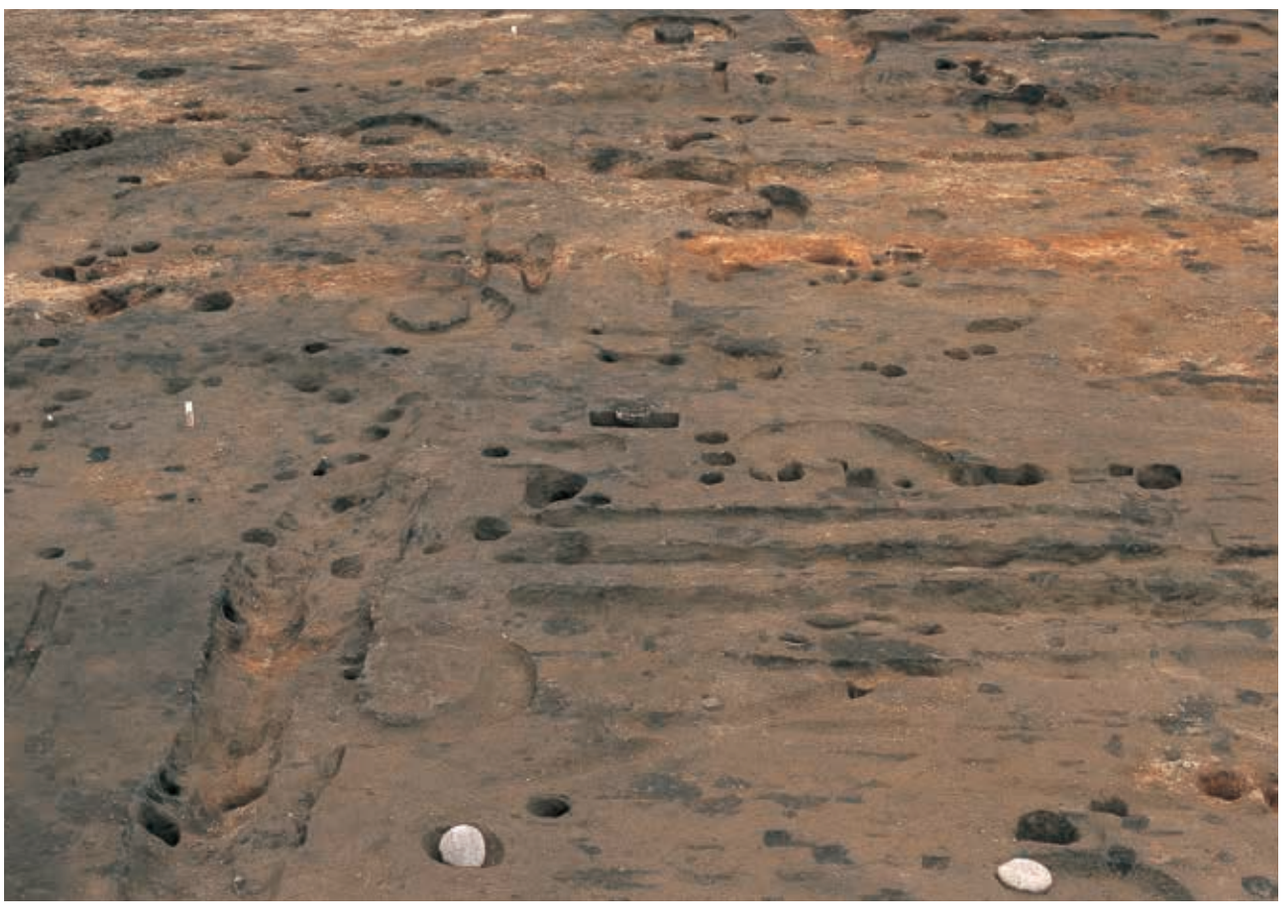
山ノ下遺跡近景（西上空から）

山ノ下遺跡調査区北半部（上空西から）

山ノ下遺跡ＥＵ238（南西から）

山ノ下遺跡ＥＵ249（西から）

山ノ下遺跡ＳＫ245（西から）



山ノ下遺跡調査区北西部（西から）

稲荷山館跡土塁土層断面（北西から）

稲荷山館跡堀跡土層断面（東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山ノ下遺跡・稲荷山館跡の調査成果をまとめたものです。

山ノ下遺跡・稲荷山館跡は、山形県東南部に位置する米沢市に所在します。米沢市では現在670箇所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録されており、縄文～平安の各時代の遺跡が数多く分布しています。中・近世期においては長井氏・伊達氏の領主時代を経て、上杉氏の城下町として栄えました。今でも市内各所には歴史的な地名や名所が見られ、多様な文化を育んできた地域です。現在では、山形新幹線や高速道路網の整備によって山形県の南の玄関口としての役割を果たしています。

この度、東北中央自動車道（福島県境～米沢）建設に伴い、工事に先立って山ノ下遺跡・稲荷山館跡の発掘調査を実施しました。

調査では、山ノ下遺跡において縄文時代の陥穴や埋設土器など400基余の遺構を検出し、当時の人々が遺した土器や石器が出土しました。また、稲荷山館跡では現存する築城当時の土塁と堀跡の一部を調査し、時期が判断可能な遺物を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた大きな責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援・御協力いただいた関係の皆様に心から感謝申し上げます。

平成20年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　山　口　常　夫

本書は、東北中央自動車道（福島県境～米沢）建設に係る「山ノ下遺跡・稲荷山館跡第２次」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物・調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調 査 要 項

遺　跡　名　①山ノ下（やまのした）遺跡
　　②稲荷山（いなりやまたて）館跡

遺 跡 番 号　①平成17年度登録
　　②米沢遺跡地図Ａ－396

所　在　地　①山形県米沢市万世町桑山字山ノ下
　　②山形県米沢市万世町梓（ずさやま）山字稲荷山

調査委託者　国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所

調査受託者　財団法人山形県埋蔵文化財センター
　　理　　事　　長　　山口　常夫

受 託 期 間　平成18年４月１日～平成20年３月31日

現 地 調 査　①平成18年５月９日～平成18年７月31日
　　②平成18年７月18日～平成18年８月４日

調査担当者　＜18年度発掘調査＞
　　調査第一課長　　野尻　　侃
　　調査研究主幹　　長橋　　至
　　主任調査研究員　　須賀井新人（調査主任）
　　調　　査　　員　　阪　　英子
　　＜19年度整理作業＞
　　調　査　課　長　　長橋　　至
　　主任調査研究員　　須賀井新人

調 査 指 導　山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室

調 査 協 力　東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所
　　山形県教育庁置賜教育事務所
　　米沢市教育委員会

凡　例

1　本書の作成は須賀井新人・阪英子が、執筆は須賀井新人が担当し、柏倉俊夫・小笠原正道・佐東秀行・野尻侃・長橋至・黒坂雅人・伊藤邦弘が全体の監修をした。

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。また、方位は座標北を示す。

3　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＫ……土坑・陥穴　　ＳＤ……溝跡・溝状遺構
ＳＰ……ピット・柱穴　　ＳＸ……性格不明遺構　　ＥＵ……土器埋設遺構
ＥＢ……建物跡構成柱穴　　Ｐ……土　器

4　遺構・遺物実測図の縮尺、網点の用法は各図に示した。

5　土層観察においては、基本層序をローマ数字で、遺構覆土を算用数字で表している。

6　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

7　委託業務は山ノ下遺跡において、下記の作業を実施した。

基準点測量業務　　大江設計株式会社
打製石器実測業務　　株式会社アルカ

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　　1　調査に至る経過……1
　　2　発掘調査の方法と経過……1
　　3　整理作業の経過……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　　1　地理的環境……5
　　2　歴史的環境……5
Ⅲ　山ノ下遺跡
　　1　遺跡の概要……8
　　2　検出遺構……10
　　3　出土遺物……28
Ⅳ　稲荷山館跡
　　1　遺跡の概要……35
　　2　検出遺構……35
　　3　出土遺物……38
Ⅴ　総　括
　　1　山ノ下遺跡……39
　　2　稲荷山館跡……41

報告書抄録……巻末
山ノ下遺跡遺構配置図……付図

表

表1　発掘調査工程表……4
表2　整理作業工程表……4
表3　打製石器属性表……34
表4　礫石器属性表……34

図　版

第１図　遺跡位置図……7
第２図　山ノ下遺跡調査概要図……9
第３図　ＳＢ81・83……11
第４図　ＳＤ１～５、ＳＫ37・43・44……13
第５図　ＳＤ６・157、ＳＫ90・94 ……14
第６図　北西部検出溝状遺構群……15
第７図　ＳＤ183・184、ＳＫ189・190、ＳＸ191 ……16
第８図　ＳＫ７・21・22・118 ……19
第９図　ＳＫ８・15・25・48・57・59・96・177、
　　ＳＰ26・156 ……21
第10図　ＳＫ152・162・197・218・239・245・251・260、
　　ＳＰ163・262……22
第11図　ＳＫ20・186・187・193・194・247 ……23
第12図　ＳＫ213～215・220・224、ＳＤ66 ……24
第13図　ＳＸ160、ＳＤ255、ＳＫ256 ……25
第14図　ＳＰ13・18・29・30～32・36・209・
　　210・241・243・252・263 ……26
第15図　ＥＵ237・238・249 ……27
第16図　遺構内出土遺物（１）……30
第17図　遺構内出土遺物（２）……31
第18図　遺構内・包含層出土土器……32
第19図　打製石器……33
第20図　礫石器……34
第21図　稲荷山館跡調査概要図……36
第22図　遺構配置図、ＳＦ１・ＳＤ２断面図、
　　ＳＰ３～５・７・13……37
第23図　出土土器……38
第24図　台ノ上遺跡遺構配置図（部分）、主要土器分類図 ……40

写真図版

巻頭写真１　山ノ下遺跡近景、調査区北半部
巻頭写真２　山ノ下遺跡ＥＵ238・249
巻頭写真３　山ノ下遺跡ＳＫ245、調査区北西部
巻頭写真４　稲荷山館跡土塁・堀跡土層断面
＜山ノ下遺跡＞
写真図版１　遺跡近景、遺構検出状況
写真図版２　ＳＤ６検出状況ほか
写真図版３　ＳＤ１～５完掘状況ほか
写真図版４　ＳＫ15土層断面ほか
写真図版５　ＳＤ165土層断面ほか
写真図版６　ＳＫ37完掘状況ほか
写真図版７　ＳＫ190完掘状況ほか
写真図版８　ＳＫ７完掘状況ほか
写真図版９　ＳＫ191掘り下げ状況ほか
写真図版10　ＥＵ237検出状況ほか
写真図版11　遺構完掘状況
写真図版12　調査風景
写真図版13　復元土器、土師器
写真図版14　土塊・近世陶磁器、須恵器
写真図版15　縄文土器（１）
写真図版16　縄文土器（２）
写真図版17　縄文土器（３）
写真図版18　縄文土器（４）
写真図版19　縄文土器（５）
写真図版20　縄文土器（６）
写真図版21　石器
＜稲荷山館跡＞
写真図版22　調査前状況ほか
写真図版23　調査区全景ほか
写真図版24　柱穴、出土土器

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

東北中央自動車道は福島県相馬市と秋田県横手市とを結ぶ高速道路網で、福島市からは国道13号と並行する縦貫道として計画されている。東日本高速道路㈱が施工担当する福島～米沢間は、国と福島・山形両県が事業費を負担する「新直轄方式」として建設中である。

稲荷山館跡は米沢市遺跡地図に記載された周知の遺跡であるが、その登録は国道13号改良工事の後であった。現在の館跡は国道によって南・北側に分断され、約５ｍの標高差を生じている。平成８年には国道沿いに整備される貯水槽の設置に伴い、米沢市教育委員会が約70㎡を対象に発掘調査を実施し、溝跡や柱穴等が検出された。東北中央自動車道建設に係る平成17年の第１次調査は、ボックスカルバートが付設される720㎡の範囲を対象に実施した。

山ノ下遺跡は高速道路の米沢インターチェンジ建設場所に位置し、以前から遺物が多く散布する畑地として知られていたが、平成15年度及び17年度の分布調査によって登録された遺跡である。

開発事業との調整に当たった県教育委員会では、これらの遺跡に係る土木工事等に際しては、遺跡保存のための協議及び文化財保護法に基づく手続きが必要と判断した。これを受けた国土交通省山形河川国道事務所及び東日本高速道路㈱山形工事事務所は、遺跡の取り扱いについての協議を行った。その結果、山ノ下遺跡は道路建設において最も先行するボックスカルバート付設部分について、また稲荷山館跡は、第１次調査時に未買収のため次年度以降に持ち越した工事用道路部分について、平成18年度に発掘調査を実施することで調整が図られた。

これらの経過を経て、発掘調査実施機関である県埋蔵文化財センターでは、調査に係る経費積算調書を平成18年２月に国土交通省山形河川国道事務所に提出し、同年４月１日付けで「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結した。続いて４月12日には、文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を県教育委員会へ提出、14日付けで受理され、「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取った。以上の諸手続きを経て、４月24日に東日本高速道路㈱山形工事事務所や米沢市教育委員会など関係機関との事前打ち合わせを行い、調査期間や方法等の実施計画と現状での問題点等について協議した。

2　発掘調査の方法と経過

現地調査は、山ノ下遺跡を先行して平成18年５月８日から７月31日まで（実働58日間）、稲荷山館跡は一部期間を重複させて７月14日から８月４日まで(実働15日間)の日程で実施した。

山ノ下遺跡では、17年度試掘調査を基に設定した範囲に未買収地が残り、この部分に当たる調査区南東隅を除外して調査を開始した。この周辺部では遺構・遺物ともに希薄な状況であったが、調査区北辺部で埋設土器（ＥＵ237）を検出したことにより、遺跡は事業用地内である北側に広がることが予測されたため、県教委や事業者側との協議を経て調査区の拡張を行った。拡張区域の西半にはこれまでにない遺構の密集が認められ、もう１基の埋設土器（ＥＵ238）も検出されたこと等を踏まえ、さらに用地範囲の境界まで北側を再度拡張した。なお、二度目の拡張域は買収に伴う用地の引渡しが未完であった区域を含んでいたことから、地権者に対し事前に工事に着手する起工承諾の許可を得た上で実施した。以上の結果、調査面積は当初の2,500㎡から実績3,000㎡へと増大し､これに要する期間も２週間の延長となることから、稲荷山館跡の調査と一部並行して対処した。

一方、稲荷山館跡の今次調査区は高速道建設に伴う工事用道路が対象で、将来的には高速道によって遮断された山林への通行を確保するための、国道13号と繋がるアンダーパスの横断路として整備される部分である。限定された事業用地内に調査区の掘削土を置くことが困難な状況であったため、重機によって除去した表土は山ノ下遺跡へ搬出した。調査区への重機の搬入や表土の運搬に際しては、国道からの直接的な出入りが不可能なことか

ら、土地所有者より隣接する山道の通行許可を得て実施した。また、手掘りによる排出土は調査区周辺に仮置きし、調査終了後に埋め戻しを行った。

発掘調査の手順は、事業用地の確認、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理・面精査と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの過程を踏んだ。山ノ下遺跡のグリッド設定は世界測地系に基づいた５×５ｍを単位とし、Ｘ＝－233425・Ｙ＝－59480を０－０グリッドとした。標記は東西軸で西から東へ、南北軸は北から南に昇順する算用数字にて行った。稲荷山館跡については、第１次調査を踏襲したグリッドを設定している。調査の各段階では写真撮影を実施し、一連の作業が記録として辿れるように配慮している。以下には、発掘調査の経過についてその概要を週単位で記述する。

５月９日～12日（第１週）：９日に山ノ下遺跡の調査開始。調査事務所への器材搬入と調査の成果・無事故を祈願しての鍬入れ式を行う。調査区設定後、一部箇所で遺構検出面まで掘り下げて層位を確認。11日から重機による表土除去を調査区南辺部より開始。並行して遺構検出作業を実施。

５月15日～19日（第２週）：16日に当初予定域の表土除去終了。山麓側の南半部は表土直下が削平を受けた地山となり、遺構・遺物ともに希薄。17日に調査区全景と遺構検出状況の写真撮影を実施。18日より東西方向の溝跡ＳＤ１～６の精査を開始。並行して遺構配置図作成及び遺構番号登録を行う。

５月22日～26日（第３週）：ＳＤ６溝跡の掘り下げ継続。併せて、土坑・ピット等の半截を行い、土層断面精査と実測の諸記録作業。25日で約150基検出した遺構の半截を終了する。同日、業務委託して公共座標に沿った基準点を設置、10m単位に地区割り杭の打設。グリッド番号を付した後に包含層出土遺物を取り上げた。

５月29日～６月２日（第４週）：記録が完了した遺構から順次完掘を実施。30日より完掘後の遺構平面図作成を開始。２日に完掘状況の全景写真撮影を行った。遺構の分布や遺物出土の状況から、北側への広がりが推測されるために調査区の拡張を検討する。

６月５日～９日（第５週）：継続して遺構平面実測を行う。遺構が存在しない区域にトレンチを設定し、地山以下の層位を見る目的から深掘りを実施。砂層と黒色粘土層が互層をなす自然堆積層であることを確認。８日に東日本高速道路㈱山形工事事務所の担当課長と、調査区拡張にかかる現地打ち合わせを行う。

６月12日～16日（第６週）：12・13日の両日、調査区拡張に伴い、これまで北側に集積していた残土を、ＳＤ１～５以南の調査終了区域に移動。14日より重機を使用した拡張範囲（１回目）の表土除去を実施。遺構検出のための面整理を行う。遺構密度は比較的高く、出土遺物数もこれまでに比して多い。

６月19日～23日（第７週）：拡張区の遺構検出作業を継続。19日に検出状況の写真撮影。検出した90基の遺構番号登録後に半截開始。諸記録作業を経て23日から完掘に着手。沢状の鞍部を呈するＳＸ160より、平安時代の須恵器・土師器が多く出土した。

６月26日～30日（第８週）：遺構完掘作業の継続。調査区北側の再拡張のため、28日に県教委担当者による現状確認。引渡し未了区域の取り扱いについて、事業者側との調整を依頼した。30日、事業者側より起工承諾を得られた旨の回答を受け、再度、調査工程の見直しと重機械の手配を行う。

７月３日～７日（第９週）：４日に拡張範囲の遺構完掘に伴う写真撮影後、再拡張区の設定と草刈り等の環境整備を実施。５日、重機による表土除去。面整理を経て遺構を検出し、７日に検出状況の写真撮影後、半截等の掘り下げに着手。

７月10日～14日（第10週）：遺構半截を継続するが、10・12・13日は雨天により現場作業を休止、事務所内にて出土遺物や図面類の整理を行う。14日、稲荷山館跡にて表土運搬にかかる搬出路の整地を実施する。

７月18日～21日（第11週）：山ノ下遺跡では調査区の排水作業を経て、遺構完掘を実施。完掘区域から順次平面実測を行う。20日に完掘状況の空中写真撮影（委託業務）を実施。稲荷山館跡では、18日より重機を導入しての表土除去開始。地目が杉林であるため、手作業による切株処理。降雨で地盤がぬかるんだことから、残土の搬出は20日に行った。

７月24日～28日（第12週）：山ノ下遺跡では継続して遺構平面図の作成。稲荷山館跡では主郭内の遺構検出に努めるとともに、土塁の断ち割りに着手した。

７月31日～８月４日（第13週）：31日で山ノ下遺跡調査終了。稲荷山館跡では、第１次調査時の基準点からグリッド杭の打設。土塁の精査に続き、堀跡の断ち割りを実施。並行して、主郭内で検出された柱穴の掘り下げを行う。土層断面図作成等の諸記録を経て、４日に調査を終了する。この間、２日には事業者等の関係者を対象とした調査説明会を、現地引き渡しを兼ねて両遺跡で開催した。

なお、稲荷山館跡においては危険防止の観点から、８月８日に調査区の一部埋め戻しと整地を行った。

３　整理作業の経過

両遺跡とも平成19年度の報告書刊行と計画されたことから、整理作業は２ヵ年にわたって実施した。出土遺物の整理過程は、洗浄→注記→接合・復元→抽出→実測・拓本→トレース→写真撮影→収納の順に行った。

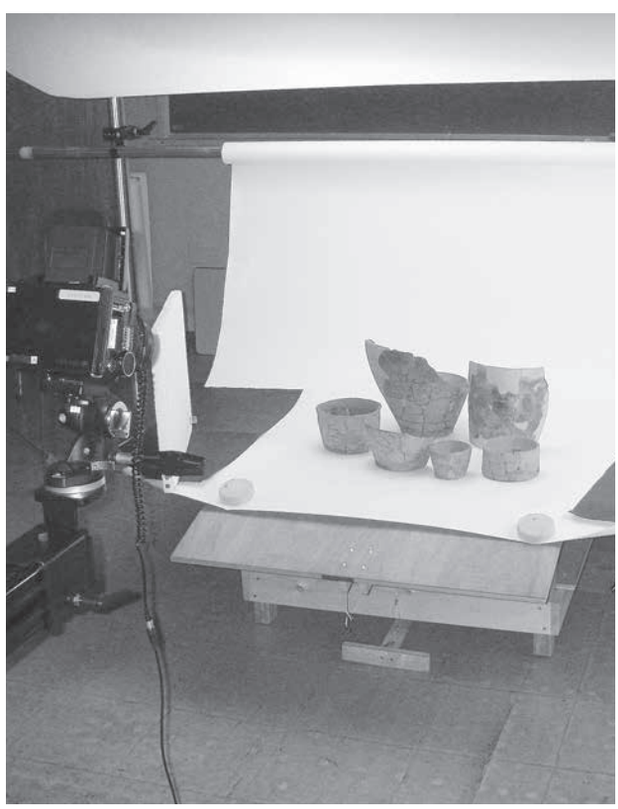
18年度は11月より遺物洗浄を開始し、乾燥後の注記を経て接合・復元までを行った。出土遺物の箱数は山ノ下遺跡７箱、稲荷山館跡１箱であったが、埋設土器を含めて土器のほとんどが小破片の状態で出土したことから、接合・復元には多くの時間を要した。一方、写真・図面等記録類の整理は２月～３月にかけて実施した。図面は番号を付加した上で図面台帳を作成し、遺構ごとに平面図と土層断面図の補整を行った。また、遺構内出土遺物によりおおよその時期を決定し、調査区における概略を検討した。

19年度は８月後半から整理作業を再開し、報告書に掲載する個別遺構の抽出から手掛け、遺構図版の版下を作成した。９月より版下のトレースを実施し、並行して掲載する遺構写真のプリントを発注した。これらを順次版組みして、報告書の頁単位で割付を行った。抽出した報告書掲載遺物の実測及び縄文土器等の拓本は10月から実施し、実測図トレースを経て版組みを行った。実測に際しては、破片資料であっても図上復元可能なものについて、反転実測を行っている。打製石器の成品６点については実測作業を外部に委託し、検査校正を行った上で実測素図とトレース原図、及びデジタルデータの成果品を得た。並行して本文執筆に取り掛かり、11月には掲載遺物の写真を撮影した。これらの原稿を編集して報告書の版組見本を作成し、20年１月の入稿までに至った。

その後、写真・図面等の諸記録類を、出土遺物は報告書掲載と未掲載に区分して収納した。なお、報告書掲載遺物については後の検索・活用を考慮し、図版番号を追加して注記している。

遺物実測

図版版組



遺物写真撮影

表１　発掘調査工程表

山ノ下遺跡　稲荷山館跡

月 / 作業内容	平成18年　５月				６月				７月				８月
	第１週	第２週	第３週	第４週	第５週	第６週	第７週	第８週	第９週	第10週	第11週	第12週	第13週
表土除去													
グリッド設定													
面整理・遺構検出													
粗掘り													
遺構精査													
記録（作図・写真）													
その他（環境整備等）													
調査説明会													

表２　整理作業工程表

平成18年度

月 / 作業内容	平成18年　11月	12月	平成19年　１月	２月	３月
写真・図面等整理					
遺物洗浄・注記					
遺物接合・復元					

平成19年度

月 / 作業内容	平成19年　８月	９月	10月	11月
遺構図版原図作成				
遺物実測・拓本				
トレース				
版組み				
遺物写真撮影				
原稿執筆				

月 / 作業内容	12月	平成20年　１月	２月	３月
版組み				
編集・組見本作成				
原稿執筆				
入稿・校正				
記録・遺物収納				

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

山ノ下遺跡・稲荷山館跡が所在する米沢市は山形県の東南端に位置し、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の嶺々に東を限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画しており、東南に聳え立つ山々が福島県との境界ともなっている。米沢市はこれらの山々と、西部に広がる低平な玉庭丘陵に囲まれた典型的な盆地である。したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型であり、年間降水量はやや少ないが冬期には降雪量が多い。市街地でも積雪量が１ｍを超える豪雪地帯であるものの、日照時間は比較的長い。また、内陸盆地の中では平均風速が最も強い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの水流は、鬼面川・松川（最上川）・羽黒川・天王川（梓川）などの河川となって氾濫原を形成しつつ北流している。これら諸河川は、やがて合流し最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。米沢盆地の南端から中央部にかけては、各々の河川により形成された緩やかな扇状地となっており、低地の占める割合が高くなっている。比較的平坦地が多いために農地が多く、森林の割合が少ないのが特徴である。また､扇状地であることから、排水状況が良好な地盤に恵まれている。

本遺跡群が所在する万世町周辺には、縄文時代の遺跡群や牛森古墳など数多くの遺跡が確認されている。周囲は八幡原や牛森原と呼ばれる原野であったが、江戸時代後期に藩政改革の一環として開拓が行われた。低地や緩傾斜の扇状地面のほとんどは農地化が進められ、自然堤防や傾斜の急な丘陵地においても、桑畑や畑地として土地利用がなされた。現在では八幡原中核工業団地への企業進出や、それに伴う宅地の造成などで都市化が進み、一部では切土や盛土による人工的な土地の改変が行われている。

山ノ下遺跡・稲荷山館跡は、市街地から東南方へ約６㎞離れた万世地区に位置する。南側には標高502ｍの早坂山が聳え立ち､東部を天王川（梓川）が北流している。したがって一帯の地形は、早坂山の山麓および山腹の傾斜地と、天王川により形成された緩やかな扇状地上位面からなる。表層の地質は第四紀に形成された未固結の洪積・扇状地堆積物であり、細粒で軟質の砂・礫である。耕作土壌は腐植物を多く含有した粘質の褐色森林土壌であり、半固結堆積岩を母材としている。傾斜地に分布するため土壌浸食を受けやすく、養分含有量も低い。普通畑や果樹園として利用されているが、一般的に生産力は低い。

2　歴史的環境

米沢市では670箇所を超える遺跡の存在が知られている。なかでも当遺跡群が位置する万世町地内は密集地帯となっており、縄文時代早期から中世まで各時代の遺跡が分布している。八幡原周辺の遺跡群は、昭和50年代の道路建設や大規模な工業団地の造成に伴い発掘調査された遺跡群である。広域に及ぶ調査によって、遺跡相互の立地関係や時期的変遷を窺えたことは評価できよう。

調査された遺跡の大半は縄文時代に属するものであり、なかでも水神前遺跡（15）、大清水遺跡（16）、柿の木遺跡（17）、二夕俣ａ遺跡（18）は、住居跡の検出や出土遺物により縄文時代早期前半から早期後半までの５期の変遷が辿れる集落跡である。梓山地区周辺では、縄文時代後期末葉から弥生時代中期初頭の土器が出土した杢代遺跡（13）をはじめ、法将寺遺跡（10）や梓山ａ遺跡（11）などが連なっている。

弥生時代の遺跡は極めて少なく、縄文時代との複合遺跡として登録されるものに限られる。清水北Ｃ遺跡(24)からは、弥生時代の墓制の一つである再葬墓が大小25基確認されており、さらに籾痕が認められる土器の出土から、当地域で稲作が行われたことを想起させる。

古墳時代に入ると、丘陵や山麓に大小の古墳が築造されるようになる。市街地北東部には193基の群集墳である戸塚山古墳群、北部窪田地区には東北地方でも最大級の前方後円墳である寶領塚古墳をはじめ、窪田古墳・八幡塚古墳などが点在している。比丘尼平遺跡（26）では、

県内で初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が３基検出され、近接する八幡堂遺跡（20）においても、南小泉式併行の古式土師器を伴う５世紀の方形周溝墓が５基確認されている。置賜地方は８世紀代も古墳の造成が行われた地域であり、横穴式石室を伴った古墳が多く分布している。県内最南端に位置する牛森古墳（23）は、凝灰岩と川原石の円礫でＴ字型に石室を構築した横穴式石室墳である。

奈良・平安時代の遺跡は、平野部の主要な河川に沿って広範囲に分布する様相が窺える。置賜地方は「日本書紀」持統天皇３年（689年）に「陸奥国優咋曇郡」との記述が史料的に初見である。和銅５年（712年）には、陸奥国の記述の中に「置賜郡」の名が見られ、陸奥国から分割して「出羽国置賜郡」になったと解釈されている。一方、この８世紀には置賜盆地に終末期古墳にあたる群集墳が数多く築造される。群集墳は一つの地縁的な村落集団の共同墓地であり、その支群の中の１基の古墳は有力家族の墳墓である。その中には律令制の官位・官職を与えられる者もいて、当該期の在地状況をよく示していると思われる。具注暦の漆紙文書や布目瓦が出土し、置賜郡衙跡と推定される大浦遺跡群、木簡・墨書土器や円面硯の出土から古代置賜六郷の一つ「広瀬郷」との見解もある笹原遺跡などが、当該期の代表として挙げられる。木和田地区に位置する竹井境ａ・ｂ遺跡（28・29）は、竪穴住居跡30棟、掘立柱建物跡５棟が検出された奈良時代の集落跡である。住居跡の中には径12m前後を測る大規模なものが１棟存在し、集落首領者の家屋と推測されている。倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡など、集落構成の一端を窺うことができる遺跡である。

中世に至ると、鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元年（1238年）、米沢に居城を構えたと伝えられるが確証はない。その後、大江氏は長井氏を称して八代約200年におよぶ支配を続けたが、天授６年（1380年）に伊達宗遠の侵攻によって滅び、置賜は伊達領となった。十五代伊達晴宗が当主になって米沢に入部するまでは高畠が置賜支配の中心であり、米沢を本拠地とした伊達の治世は輝宗・政宗と続き、天正19年（1591年）に豊臣秀吉により政宗が岩出山へ移封となるまでの210年間にわたった。

米沢市に存在する中世城館跡は、県内で最も多い200箇所以上とされ、木和田館跡（30）は12世紀前半と推定される県内最古の平城である。付近には金谷館跡（19）、我妻館跡（21）、原田館跡（22）などの平城が分布しており、当該地が交通の要衝であったと共に、地域支配の要であったと推察されよう。稲荷山館跡の西方に位置する鷺城跡（６）は、東西700m、南北850mと置賜地方最大規模の山城であり、この尾根上には万世館山城（８）、早坂山館跡（７）の山城が街道沿いに分布しているが、これら城館跡の築城者や築城時期は不明なものがほとんどである。中世城館は平安末の在地土豪による方形館、鎌倉期から南北朝期にかけての大江氏の城館、そして室町～戦国期における伊達氏による城館・山城の順に変遷する。他にも比丘尼平廃寺（25）、八幡原土壇群（14）、沼田土壇（27）といった中世の寺院跡や土壇の存在が知られ、南東方の山岳地には宗教遺跡である水窪行場遺跡が分布する。

なお第１図では、本文中で触れた遺跡、及び山ノ下遺跡と稲荷山館跡の所属時期に関連した主な遺跡について番号を付した。

参考文献

山形県　1985『土地分類基本調査　米沢・関　国土調査』
山形県教育委員会　1995『山形県中世城館遺跡調査報告書　第１集（置賜地域）』
米沢市　1997『米沢市史　原始・古代・中世編』
米沢市教育委員会　1998『米沢遺跡地図』米沢市埋蔵文化財調査報告書第60集

第１図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「米沢東部」を使用）

No.	遺跡名	種　別	時　代	No.	遺跡名	種　別	時　代
1	山ノ下遺跡	集落跡	縄文・平安・中世	16	水神前遺跡	集落跡	縄文
2	稲荷山館跡	城館跡	中世	17	柿の木遺跡	集落跡	縄文・古墳
3	堤屋敷遺跡	集落跡	中世	18	二夕俣ａ遺跡	集落跡	縄文
4	下屋敷遺跡	集落跡	縄文・中世	19	金谷館跡	城館跡	中世
5	早坂山ｂ遺跡	集落跡・城館跡	縄文・中世	20	八幡堂遺跡	集落跡・墓跡	縄文・古墳
6	鷺城跡	城館跡	中世	21	我妻館跡	城館跡	中世・近世
7	早坂山館跡	城館跡	中世	22	原田館跡	城館跡	中世
8	万世館山城跡	城館跡	中世	23	牛森古墳	古墳	古墳
9	町在家館跡	集落跡・城館跡	縄文・中世	24	清水北ｃ遺跡	集落跡・墓跡	縄文・弥生
10	法将寺遺跡	集落跡	縄文	25	比丘尼平廃寺跡	寺院跡	中世
11	梓山ａ遺跡	集落跡	縄文・平安	26	比丘尼平遺跡	集落跡	縄文・中世
12	梓山ｄ遺跡	集落跡	縄文	27	沼田土壇	土壇	中世
13	杢代遺跡	集落跡	縄文	28	竹井境ａ遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
14	八幡原土壇群	集落跡・土壇	縄文・中世	29	竹井境ｂ遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
15	大清水遺跡	集落跡	縄文	30	木和田館跡	城館跡	中世

Ⅲ　山ノ下遺跡

1　遺跡の概要

平成17年度に発掘調査した堤屋敷遺跡の東に隣接する遺跡で、その範囲は東西約60m・南北約80mの広がりを有する。早坂山の北側山麓に位置し、現在の地目は果樹園・畑地及び宅地となっている。標高は283m～289m前後を測り、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地する。調査区域の耕作地は、以前より縄文土器や石器剥片が散布することで知られていたが、遺跡としての登録は15年度及び17年度に実施した試掘調査の結果によってなされた。試掘調査では３本のトレンチから遺構や遺物の存在が確認されたが、希薄な状況であったことから縄文時代のキャンプサイト、もしくは小規模な集落跡と考えられた。

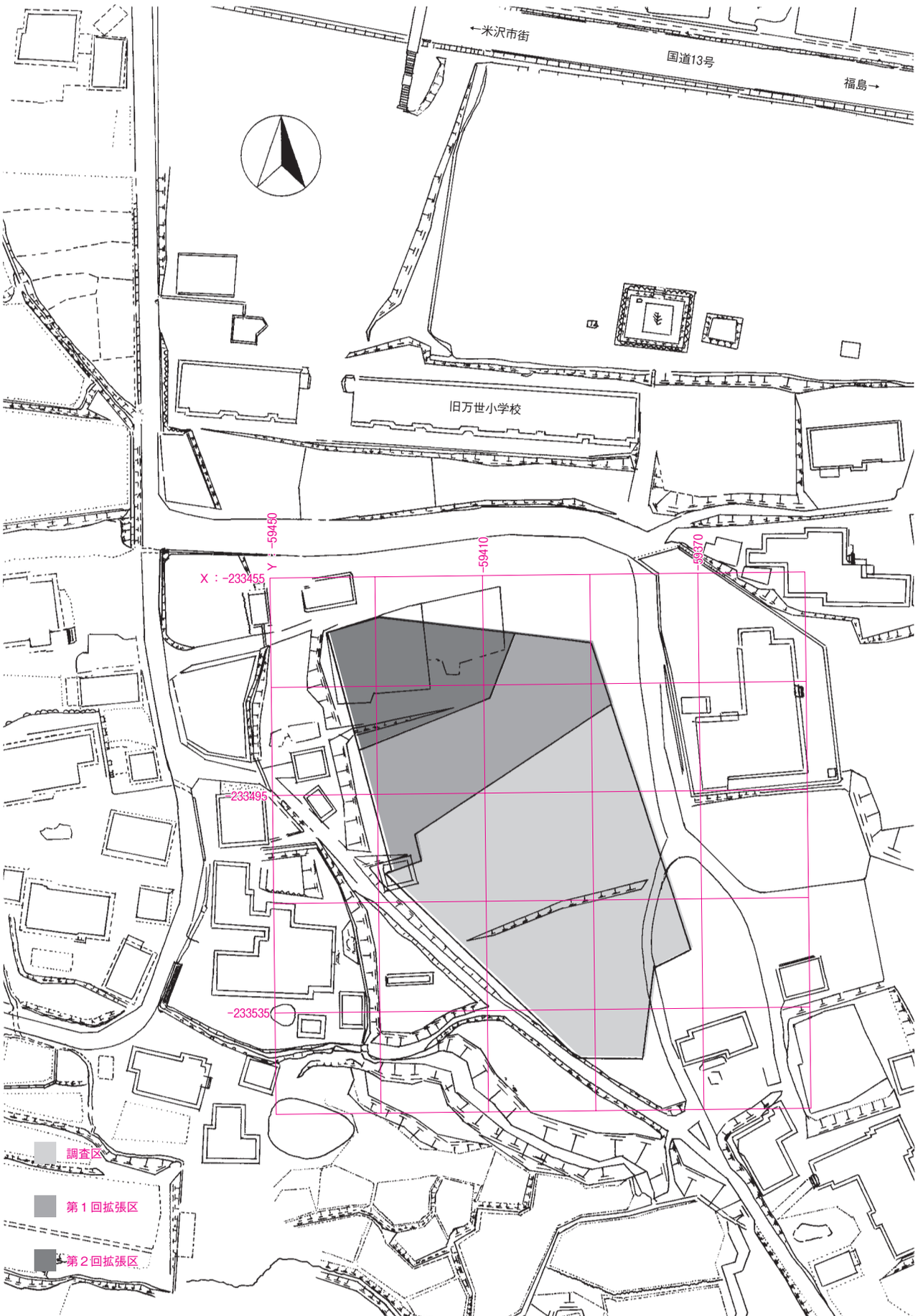
遺跡は西隣する堤屋敷遺跡から見て一段高い台地上にあり、南及び東側は山裾のため北部へ開けた丘陵地に立地する。調査区は事業予定地の山麓側へ設定したが、前記したとおり北側へ二度の拡張を行っている。標高の高い南側は薄い表土直下が地山であることから、幾分削平を受けて平坦化されたと思われるが、旧来はより傾斜の大きい地形であったと想定される。北側は地山直上に20～30㎝の黒色土が認められ、この層位から遺構が掘り込まれたと考えられる。遺物包含層として認知でき、少ないながら土器や石器が散布する状況であった。

検出された主な遺構（付図）は、縄文時代の陥穴と土器埋設遺構が各３基、平安時代～中世の所産と目される掘立柱建物跡２棟と区画溝や溝状遺構が10数条、縄文時代の遺物を包含する土坑・ピット約20基などである。区画施設と考えられる大型の溝跡（ＳＤ１～６）は、調査区中央部を東西方向に配置される。３基の陥穴は山麓に近い南端部で検出し、ほぼ等高線に沿う東西方向に分布する。遺構の集中域は北西部に認められ、堆積土中に遺物を含む土坑をはじめ、並行する溝状遺構群などが分布し、重複するものも多い。この区域は台地の縁辺部にあたり、地形的要因に起因した分布とも考えられる。調査区西辺部中央で検出した落ち込み（ＳＸ160）は沢状の鞍部を呈し、ＳＤ６溝跡とも相まって、旧来の地形でこれを境として南北に区画する要因となったものと見なされる。なお、ＳＤ６以北に検出されたドーナツ形の遺構は、近代の畑耕作に係る掘り込みと目され、等間隔で碁盤目状に整然と並ぶ在り方が看取された。また、南東部検出のＳＫ159及び北東部に位置するＳＫ224（ＳＫ214・215と重複）は、倒木痕跡である。

出土した遺物は整理箱７箱分量で、内容は縄文時代の土器・石器が主体を占め、他に９世紀代の須恵器や土師器、中世に属する土器や近世陶磁器などがある。埋設土器を除けば大方が小破片で、復元して器形が窺えるものはほとんどない。これらは遺構の分布同様にその大半が調査区北西域から出土しており、遺構に伴うものが多い。遺構別ではＳＫ245やＳＤ255等でまとまった出土量が得られ、特にＳＸ160からは平安期の土器が一括して出土している。包含層扱いで取り上げた遺物は少ないながら、その分布は遺構の在り方と軌を一にするもので、量・密度とも北西部に偏る傾向が窺われた。

参考文献

山形県教育委員会　2007『分布調査報告書（33）』山形県埋蔵文化財調査報告書第207集



第２図　山ノ下遺跡調査概要図（S＝1：1,000）

2　検出遺構

掘立柱建物跡（第３図）

柱穴の配置状況から、掘立柱建物跡として認識可能な２例をＳＢ81・83として扱った。これらはＳＤ１～５溝跡以南に位置し、主軸方向を同じにする２棟である。

ＳＢ81は調査区南西部の16・17－21・22グリッドに位置する。北西角の柱穴は確認できなかったが、検出した桁行が三間、梁行は東・西で異なる変則的な二間で構成される。南辺桁行長7.2m・東辺梁行長で5.0mを測り、床面積36㎡の規模である。桁行柱間距離は南・北辺とも2.4mの等間隔であるが、梁行二間は東・西辺が対応せず柱間も異なる不規則な柱配列となる。各柱穴の掘り方規模は一定しておらず、径40～50㎝の円形を呈するものが多い。南東角のＥＢ11は規模が大きく、検出面の高さも影響してか段階的な掘り方がなされる。柱穴底面の標高も一様ではなくて、最深と最浅では約50㎝の高低差が生じる。

ＳＢ83は調査区南半部のほぼ中央に位置し、ＳＤ１～５とＳＢ81の間で検出された。桁行長9.3m・梁行長5.0mの規模を測る東西棟の建物跡であり、面積は45㎡を超える。柱列は南辺桁行が四間なのに対して北辺は二間で構成され、梁行は一間のみである。柱穴は２基並んで検出されるものが多く、それぞれに規模的な大小を有していることから、支柱を備えていた構造とも推測できる。柱間は南辺四間で2.4mないし1.8m、北辺二間では4.9mと4.4mの距離を測る。柱穴掘り方は径30～50㎝の円形または楕円形を呈しており、深さは平面規模以上に差異が認められるようで、底面のレベルにはＳＢ81と同じく約50㎝の標高差が生じる。ＥＢ34･129等の土層断面では、柱の存在を示す柱痕跡が観察された。

ＳＢ81・83いずれの柱穴からも出土遺物がないため時期を判断することはできないが、主軸方向が同一となる点や柱穴覆土の近似性などから、２棟は同時代に存在した可能性が高い。後述するＳＤ１～５とほぼ平行して構築されること等から察して、中世に属する建物跡と捉えられる。

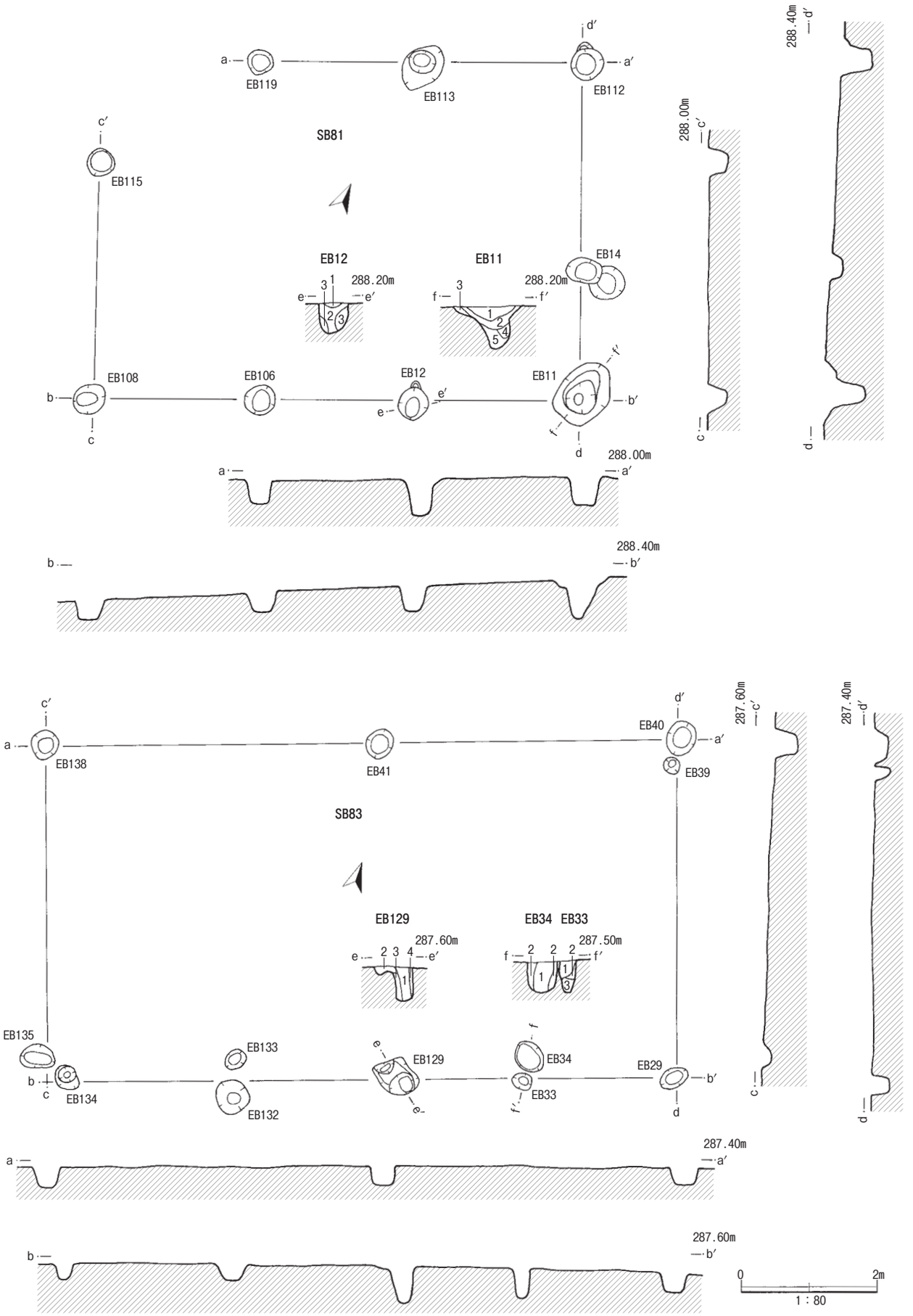
溝跡・溝状遺構（第４～７図）

調査区からは区画溝と考えられるＳＤ１～５･ＳＤ６･ＳＤ66等と、北西部において並行または直交して配置される畝状の溝跡群が検出された。

ＳＤ１～５として登録した東西方向の溝跡は、南半域の12～20－17・18グリッドに位置する。各溝跡は長さ約７～９m・幅0.8～1.6mの規模を測り、検出し得た５条は１m前後の間隔を有し、山麓側へ向かって緩い弧状をなすような配置を示す。連続する掘り方ではないため、個別に遺構番号を付したが、総じて一つの施設と捉えることができる。溝跡の深さは検出面から約40～60㎝を要し、底面がほぼ均一なレベルになるよう構築される。壁面は急傾に掘り込まれて底面に至るが、中央に位置するＳＤ３ではテラス状の平場を築く掘り方がなされる。他遺構との重複関係はＳＤ３がＳＫ43・44と、ＳＤ４でＳＫ37との切り合いが認められ、いずれもこれらの土坑を切っている。遺物は各溝跡の覆土から土器片に混じり石器フレイク数点が出土しており、実測可能な遺物を第16図に掲載した。これらから溝跡の年代は15世紀頃の中世と目され、屋敷の周囲に巡らした区画溝として機能したものと考えられる。

調査区中央で検出したＳＤ６は、ＳＤ１～５の北側約10mに位置し、これと並行する東西方向の溝跡である。検出長約43m・幅2.0～2.7m、検出面から40㎝程の深さを測り、ほぼ直線的に掘り込まれる。底面のレベルは東から西へ向かって低くなり、約70㎝の標高差が認められる。南辺は掘り込みの浅いＳＤ157と重複し、土層断面からこれを切って構築した新旧関係が窺えるが、14－15グリッドに設定した深掘りトレンチ以西では、撹乱の影響もありＳＤ157の掘り方が判然としなかった。他には北辺において縄文時代の土坑と見なされるＳＫ90を切り、ドーナツ形の掘り込みを呈するＳＫ94に切られている。前記したように、西端部は沢状の鞍部を呈するＳＸ160へと繋がっており、この地区を南北に分断する機能を備えている。出土した遺物は周辺からの紛れ込みと思われる縄文土器や石器剥片であり、溝跡の年代を考定できるまでの資料は得られなかった。ＳＸ160出土遺物と以南で検出された建物跡や区画溝等の存在から、中世に属すものと考えられる。

調査区北西部の10～13－11～13グリッド内において、南北及び東西に向きを取る溝状遺構群が検出された。溝状遺構群は東方に位置する南北方向のＳＤ81と、西方のＳＤ165の２条によって挟まれた東西約12mの範囲内に


SB81
EB119
EB113
EB112
EB115
EB12
EB11
EB14
288.20m
288.00m
288.40m
EB108
EB106
SB83
EB40
EB41
EB39
EB138
EB129
EB34 EB33
287.60m
287.50m
287.40m
EB135
EB133
EB134
EB132
EB29
EB33
0
2m
1：80

第３図　ＳＢ81･83

第３図　EB11

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂混じり。炭化物を含む。10YR4/4シルトの小ブロックを20％含む
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/4シルトを斑点状に５％含む
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂混じり。炭化物を含む。10YR4/4シルトの中ブロックを30％含む
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	ほぼ純層
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3砂の小ブロックを10％含む

EB12

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂礫混じり
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR2/1シルト、10YR4/3シルトの小ブロックを30％含む
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	砂混じり。10YR2/1シルトの中ブロックを20％含む

EB33

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを５％含む
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR1.7/1シルトの小ブロックを30％含む
3	10YR2/1	黒色	シルト	

EB34

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	炭化物を含む。10YR4/3シルトの小ブロックを20％含む
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR1.7/1シルトの小ブロックを20％含む

EB129

1	10YR2/1	黒色	シルト	炭化物を含む。10YR4/3シルトの小ブロックを40％含む
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	炭化物を含む。10YR4/3シルトの中ブロックを20％含む
3	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR2/1シルトの小ブロックを10％含む
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	（地山）

第４図　SK37（a-a′）

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	硬くしまる。砂礫混じり
2	10YR2/1	黒色	シルト	硬くしまる。砂礫混じり
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR1.7/1シルトの小ブロックを10％含む
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	硬くしまる。砂礫混じり
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	ほぼ純層
6	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを30％含む

SK43（c-c′）

1	10YR2/1	黒色	シルト	炭化物に富む。10YR3/3シルトの小ブロックを10％含む
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR3/3シルトの小ブロックを30％含む
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	５～20㎜大の礫混入
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR3/3シルトの小ブロックを20％含む
5	10YR3/2	黒褐色	シルト	５～20㎜大の礫混入
6	10YR3/2	黒褐色	シルト	砂混じり
7	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	10YR2/2シルトの小ブロックを20％含む

SK44（d-d′）

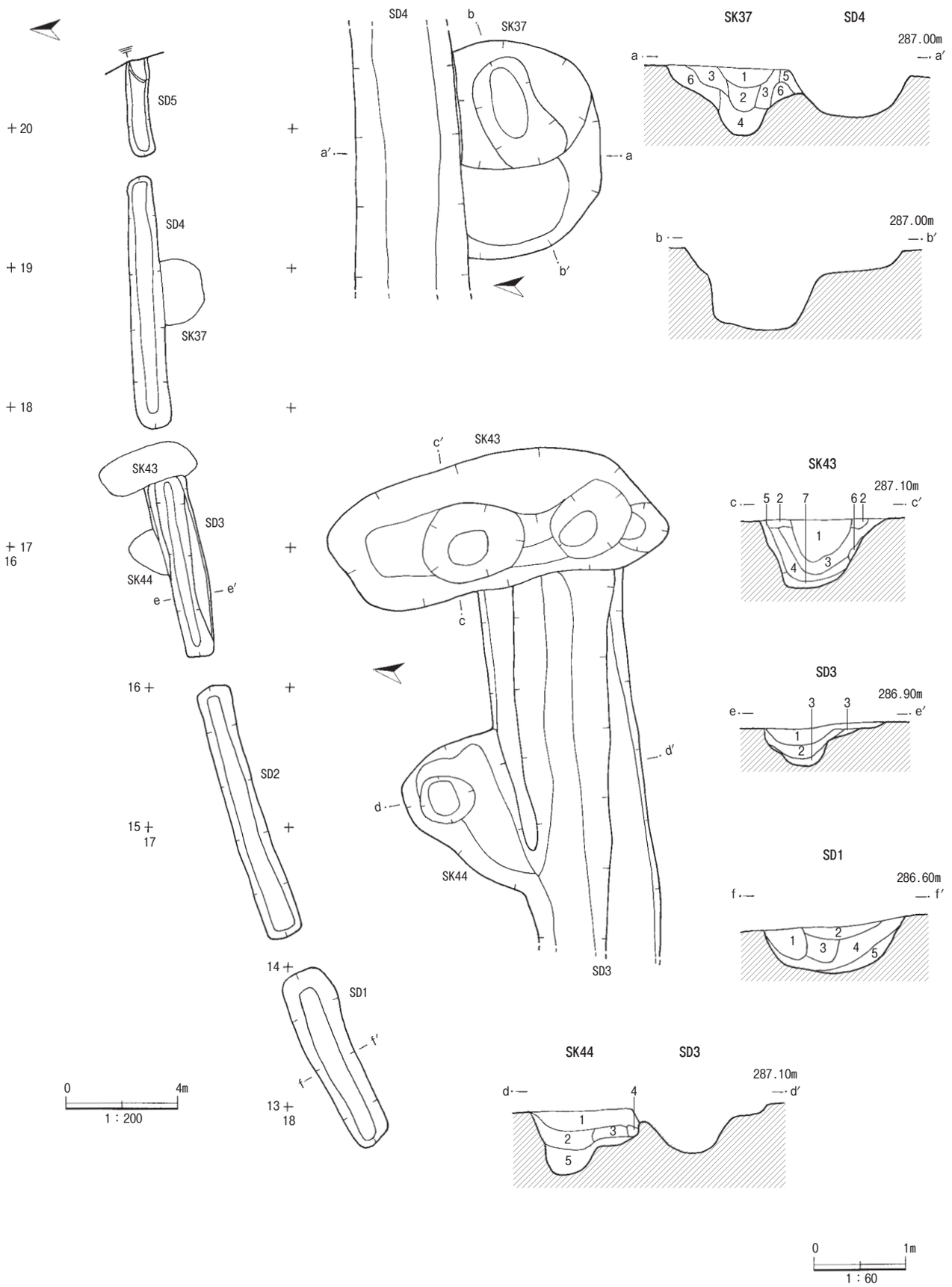
1	10YR1.7/1	黒色	シルト	10YR2/2シルトの小ブロックを10％含む
2	10YR2/1	黒色	シルト	10YR2/2シルトの小ブロックを10％含む
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂礫混じり
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの中ブロックを10％含む
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルト、10YR1.7/1シルトの小ブロックを10％含む

SD3（e-e′）

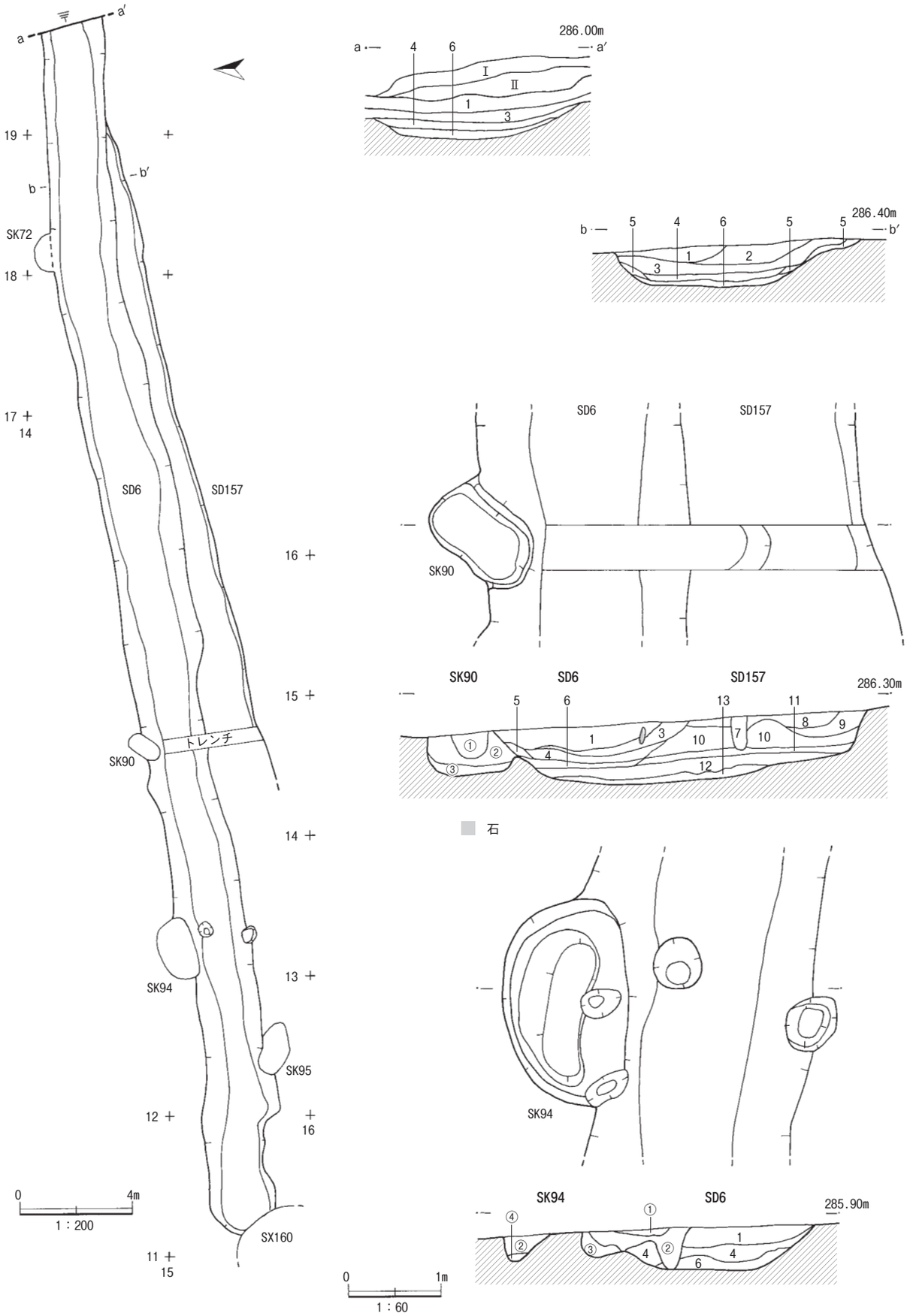
1	10YR2/1	黒色	シルト	
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの中ブロックを10％含む
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	

SD1（f-f′）

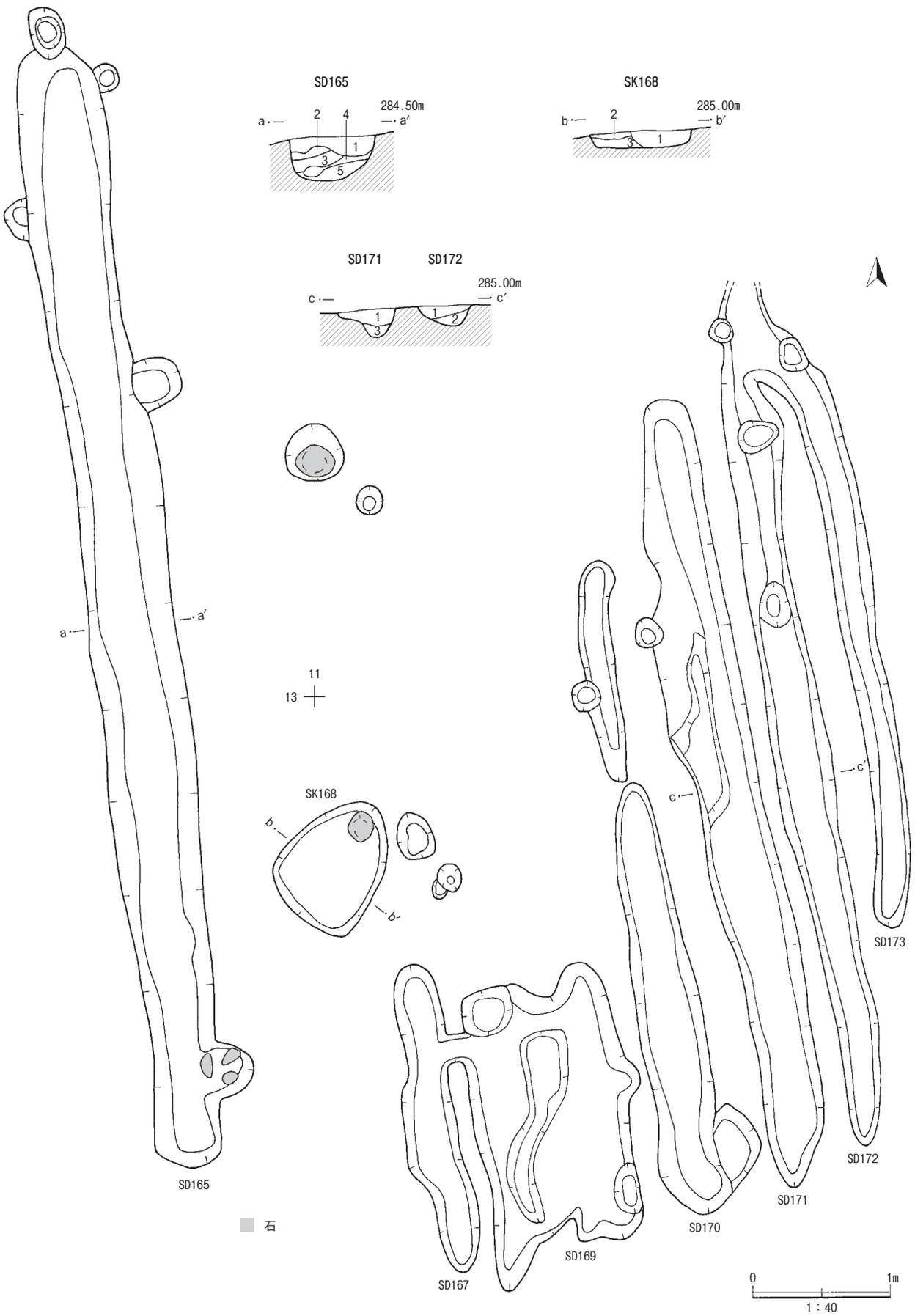
1	10YR2/1	黒色	シルト	
2	10YR4/4	褐色	シルト	
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR2/1シルトの大ブロックを20％含む
4	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの中ブロックを10％含む
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	10YR2/2シルトの大ブロックを10％含む



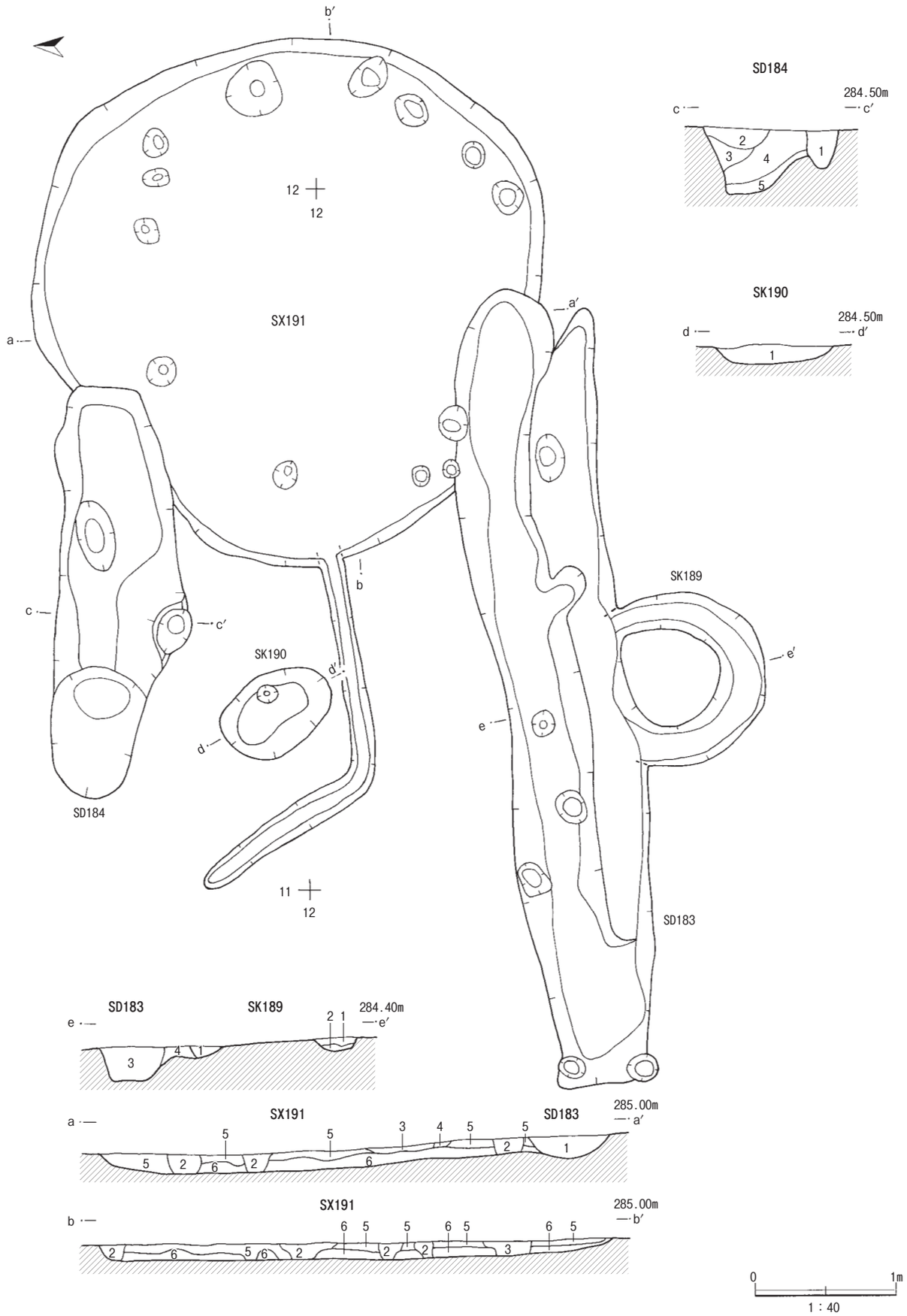
第４図　ＳＤ１～５、ＳＫ37･43･44



第５図　ＳＤ６･157、ＳＫ90･94



第６図　北西部検出溝状遺構群



第７図　ＳＤ183･184、ＳＫ189･190、ＳＸ191

第５図　SD6・157

Ⅰ	10YR3/4	褐色	シルト	
Ⅱ	10YR2/3	黒褐色	シルト	
1	10YR2/1	黒色	シルト	
2	10YR2/3	黒褐色	シルト	
3	10YR3/3	暗褐色	シルト	
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	
5	10YR2/3	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを５％含む
6	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの中ブロックを20％含む
	（以上SD６の覆土）			
7	10YR2/2	黒褐色	シルト	（ピットの覆土）
8	10YR3/2	黒褐色	細砂～砂	５～20㎜大の礫混入
9	10YR3/3	暗褐色	シルト	50㎜大の礫混入
	（以上SD157の覆土）			
10	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂礫層	
11	10YR3/2	黒褐色	シルト	
12	10YR3/2	黒褐色	シルト	硬くしまる。10YR3/2シルトの中ブロックを10％含む
13	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	10YR3/2シルトの大ブロックを40％含む

SK90

①	10YR1.7/1	黒色	シルト	10YR2/2シルトの中ブロックを10％含む
②	10YR2/2	黒褐色	シルト	５㎜大の礫混入
③	N2/1	黒色	シルト	炭化物層

SK94

①	N2/1	黒色	シルト	炭化物層
②	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを５％含む
③	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの大ブロックを40％含む
④	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	細砂混入。10YR2/2シルトの小ブロックを５％含む

第６図　SD165（a-a′）

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	7.5YR4/4砂の小ブロックを３％含む
2	7.5YR4/4	褐色	砂	10YR2/2シルトの小ブロックを10％含む
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂混じり
4	7.5YR4/4	褐色	砂～粗砂	10YR2/2シルトの小ブロックを10％含む
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを20％含む

SK168（b-b′）

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂礫混じり
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR3/3シルトの小ブロックを５％含む
3	10YR3/3	暗褐色	シルト	砂質土

SD171・172（c-c′）

1	10YR3/2	黒褐色	シルト	
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを20％含む
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	砂質土。10YR3/2シルトの小ブロックを10％含む

SK177

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	炭化物を含む。10YR3/2シルトの小ブロックを20％含む
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	（地山）

第７図　SD183、SX191（a-a′・b-b′）

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	
	（SD183の覆土）			
2	10YR2/1	黒色	シルト	（遺構埋積後に掘り込まれたピットの覆土）
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	（同上）10YR2/1シルトの小ブロックを30％含む
4	５YR5/6	明赤褐色	シルト	焼土
5	10YR3/2	黒褐色	シルト	炭化物を含む。砂礫混じり
6	10YR3/3	暗褐色	シルト	
	（以上SX191の覆土）			

SD184、SP264（c-c′）

1	10YR2/1	黒色	シルト	
	（SP264の覆土）			
2	10YR2/1	黒色	シルト	炭化物を含む。礫混じり
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	
5	10YR3/3	暗褐色	シルト	7.5YR4/4砂の小ブロックを５％含む
	（以上SD184の覆土）			

SK190（d-d′）

1	10YR2/1	黒色	シルト	10YR3/3シルトの小ブロックを５％含む

SD183、SK189（e-e′）

1	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを10％含む
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	（地山）
	（以上SK189の覆土）			
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	
4	10YR3/2	黒褐色	シルト	
	（以上SD183の覆土）			

集中している。北側はこれらに直交する東西方向のＳＤ182・184等により区画されようが、南側には同種の遺構が存在しない。11－12・13グリッドでは南北向きの溝状遺構が特に密集しており、一部重複して分布している。東西向きの溝状遺構はエリアの北半に分布し、幅が広いうえ掘り込みも深いのが特徴である。遺物はこれら東西向きのＳＤ183・184・255から縄文土器片などが出土しているが、先のＳＤ６と同じく周辺からの流れ込みと予見され、遺構の構築時期とは合致しないものと理解される。エリア北端のＳＤ184とＳＤ255は１ｍ程の間を置いて並行して配され、平面形や深さがほぼ同規模であることや出土遺物の内容から、共存したものと察せられる。なお、覆土は対称的な堆積状況を示し、ＳＤ184は南側より、ＳＤ255は北側から埋まっていった様相が窺われた。

陥　穴（第８図）

陥穴として登録した３基（ＳＫ７・21・118）は調査区南端部において、ほぼ等高線に沿った東西方向の配置で検出された。縄文時代の所産と認識されるが、いずれからも出土遺物がないため､時期については特定できない。

調査区南東部壁際の20－18グリッドで検出されたＳＫ７は、長軸約1.7ｍ・短軸約1.3ｍの規模で、平面プランは楕円形を呈する。擂鉢状の形態を示し、深さ約80cmを測って狭い底面に達する。周壁は南東部を除けば緩やかな掘り方がなされ、底面近くで弱い段を形成する。平坦な底面は長さ60cm強・幅20cm強の長楕円形を呈し、掘り方に付随して幾分南東側に偏る。周壁及び底面にピット等の掘り込みは確認されない。覆土は３層に分けたが、底部付近の下層部は充分に観察できなかったため、さらに分層される可能性も残る。また､土層断面中央部でピット状の掘り込みが見られることから、プラン内に検出時で判別できなかったピットなどの別遺構の重複があったと推定される。

ＳＫ21は南端部のほぼ中央、17－20グリッドで検出された､隅丸方形を呈する陥穴である。規模は長軸2.15ｍ･短軸約1.6ｍ、検出面からの深さ75cm程を測る。西辺部でＳＫ22土坑と重複し、これによって切られる新旧関係が生じる。周壁は全周において均一的な掘り方がなされるが、底面は中心より南側に偏って設定される。船底状の断面形を呈し、底面も上端プランに即して隅丸方形を呈するが、南西隅部は円形様に構築される。土層断面では堆積途中で中央部が再度掘り込まれた様相が看取され、上層部の覆土には炭化物の混入が認められた。

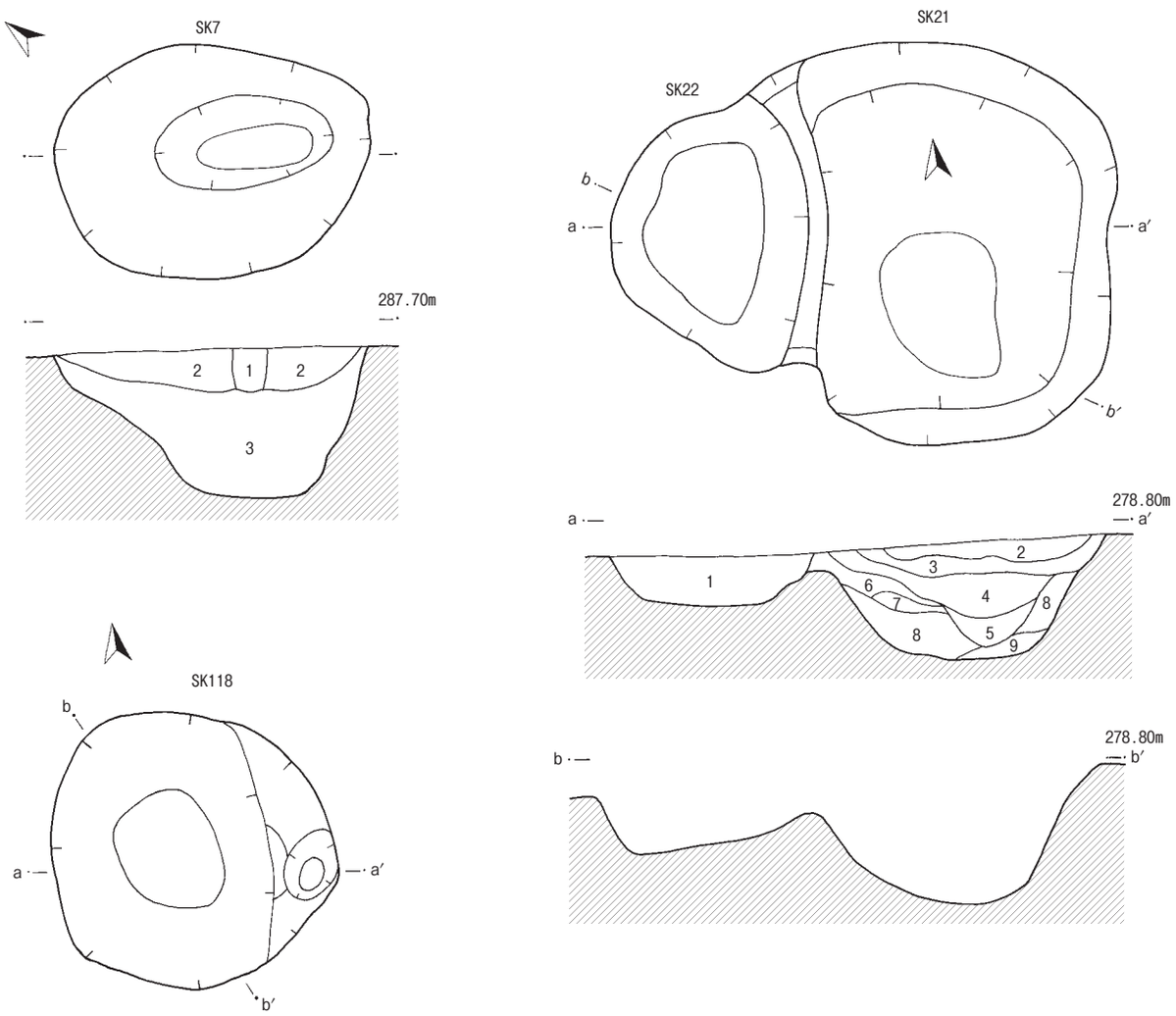
調査区南西部壁際15－21グリッドに位置するＳＫ118は、径1.5ｍ規模の円形を呈し、東側に浅いテラス状の段を形成する掘り方がなされる。底面までの深さ約70cmで、擂鉢状の形態に掘り込まれる。東側のテラス上から長径40cmを測る楕円形ピットが検出されたが、本遺構の埋没後に掘り込まれたものと理解される。前記の２基同様、周壁及び底面に逆茂木穴等の痕跡は確認されない。覆土は自然堆積による４層位を認め、周辺部から埋没していった様相が窺われた。

以上の３基は前述したとおりほぼ等高線に沿った配置で、東西方向に一直線上で並ぶ。距離はＳＫ７～ＳＫ21間で17ｍ、ＳＫ21～ＳＫ118間で10ｍを測る。これら３基の陥穴は規模や平面形において差異があり、出土遺物もないため同時期に機能していたか否かは不明と言わざるを得ないが、配列から察して獣道に沿って構築したものと解され、同時期の所産と推測される。

土坑・ピット

検出遺構の大半は土坑またはピットとして登録し、形状が円や方形にならない不定形のものはＳＸに分類して扱った。精査した土坑・ピットのうち、平面規模を基にした事例で第９～14図に示した。ここではＳＸ登録の１基を含め、地区ごとに代表的な事例を取り上げ、その概要を記す。

ＳＸ191（第７図）は前述した溝状遺構群の集中区域で検出され、エリア北側の中央に位置する。検出時の面精査において焼土が確認された点と、その周囲で炭化物を含む幾分黒ずんだ円形様の土色変化が見られたことから、当初は竪穴住居跡の可能性が考えられた。平面規模は径約3.7ｍを測り、西側の一部をＳＤ183・184によって切られる。約３cm単位で掘り下げを繰り返したが、住居跡の床面と認識される層には至らず、10～15cmの深さで周囲と差のない土質に達した。遺構内周に沿って数基のピットが存在するものの、遺構確認面で捉えられる例が多かったことなどから、全体を浅い落ち込みと判断した。遺物は縄文土器数点が出土しており、細片のため図示できるものはなかったが、概ね縄文時代中期の所産と考えられる。



SK7
1 10YR2/3　黒褐色　シルト　10YR3/3シルトの中ブロックを20％含む
2 10YR2/1　黒色　シルト
3 10YR2/2　黒褐色　シルト　10YR3/3シルトの大ブロックを５％含む

SK21・22
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫と炭化物を含む
（SK22の覆土）
2 10YR1.7/1　黒色　シルト　炭化物を含む
3 10YR2/2　黒褐色　シルト　炭化物を含む
4 10YR2/2　黒褐色　シルト　炭化物に富む。2.5Y4/3砂の小ブロックを３％含む
5 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂礫と炭化物を含む
6 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂混じり。10YR2/2シルトの小ブロックを５％含む
7 10YR3/4　暗褐色　砂～粗砂
8 10YR3/3　暗褐色　シルト　粗砂混じり
9 10YR4/4　褐色　粗砂　10YR2/1シルトの小ブロックを１％含む
（以上SK21の覆土）

SK118
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　10YR4/3シルトの小ブロックを10％含む（ピットの覆土）
2 10YR3/2　黒褐色　シルト　５㎜大の礫を多く含む
3 10YR2/1　黒色　シルト　砂礫混じり
4 10YR3/2　黒褐色　シルト　10YR2/1シルトの小ブロックを５％含む
5 10YR3/2　黒褐色　シルト　10YR4/3シルト、10YR2/1シルトの小ブロックを10％含む

第８図　ＳＫ７･21･22･118

ＳＫ15（第９図）は南端部の17－22グリッドで検出された、調査区では数少ない長方形を呈する土坑である。ＳＢ81内の南西部に位置し、建物跡の主軸に平行した配置となっていることから、建物跡に付随した施設とも推定される。長軸約1.3m・短軸約0.9mの規模で、確認面からの深さは30㎝程を測る。中世の遺構に特有な黒味の強い堆積土に覆われ、出土遺物はないが建物跡と同年代の構築と見なされる。

ＳＫ37（第４図）は18・19－17グリッドにおいて、北側をＳＤ４溝跡に切られて検出された。平面プランは、径2.3m程の円形を呈すものと思われる。掘り方は西半部に平場を築いて、東半部をさらに深く掘り込む段掘りがなされる。最深部までの深さは75㎝を要し、底面は長軸80㎝程を測る東西方向に長い楕円形状を呈する。形態的には陥穴の可能性も考慮される。覆土の中位層から土堝の口縁部辺が出土したが、土層断面におけるＦ１・２層の在り方から、中央部が再度掘り込まれた状況が察知できた。遺物はこれに伴うものと判断され、土坑の時期と合致するものではないため、縄文時代の構築物と捉えておきたい。

ＳＫ59（第９図）は中央部の15－16グリッド、ＳＤ１～５とＳＤ６溝跡に間で検出された土坑である。平面形は径1.1m程の略円形を呈し、周壁・底面ともに丸みを帯びた形態の掘り方がなされる。検出面からの深さは中央部で約50㎝を測り、形状が椀形を呈する掘り込みである。覆土には砂礫が多く混入しており、他の遺構に比べて硬くしまった土質を呈する。坑内からの出土遺物はなく時期の特定は難しいが、堆積土などから縄文時代の遺構と推測される。

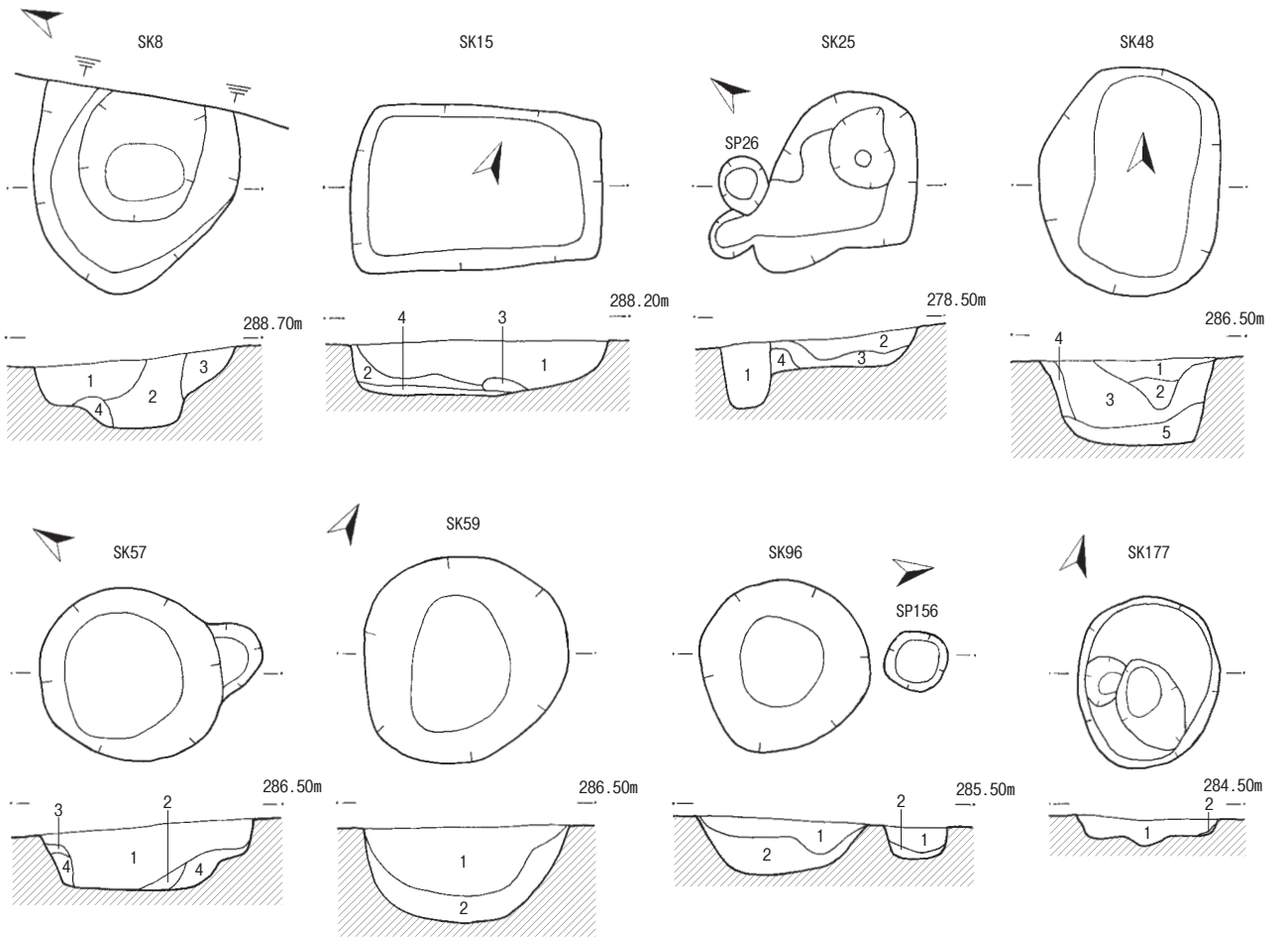
ＳＫ90（第５図）はＳＤ６溝跡の北辺と重複し、これに切られる新旧関係が認められる。残存上端と底形から判断される平面形は隅丸長方形で、長軸約1.2mの規模を有する。深さは検出面から45㎝を測り、壁面をほぼ垂直に掘り込んで平坦な底面に至る。３層に分かれる覆土の底面直上には、厚さ10㎝内外で炭化物層が堆積している。出土遺物がなく時期不明ながら、形態や覆土の様相からＳＫ15と類似する状況が察せられ、これと同時期の所産と認識できる。

ＳＫ186・187（第11図）は12・13－13グリッドで検出された、重複関係にある土坑である。ＳＫ187は長軸約1.8m・短軸約1.4mの楕円形を呈し、これによって切られるＳＫ186は径1.3m規模の略円形プランである。ＳＫ187では底面に段を形成しており、北半と南半の深さが幾分異なっている。断面観察により段差部分に見られる堆積層の状況から、２基の重複の可能性も指摘できる。深さはＳＫ186で約30㎝、一段低いＳＫ187北半部で約40㎝、さらにＳＫ187の南半部で約50㎝を測る。遺物はＳＫ186から縄文土器２片と、ＳＫ187から二次加工のある石器剥片１点を認めたが、所属時期については不明である。

ＳＫ214・215（第12図）は北東部の17－９・10グリッドで、ＳＤ66溝跡等と重複して検出された。検出時ではＳＫ224を含めた土坑３基の重複と捉えて精査したが、掘り下げるに従って各々が結合し、最終的には一つの大きな落ち込みとなった。北半部は検出面に地山塊が露出する倒木痕跡（ＳＫ224）であり、南半域の西側がＳＫ214、東側がＳＫ215に相当する。全体の規模は東西約2.7m・南北約3.1m、深さ60㎝前後で歪な五角形を呈する。ＳＫ214・215の新旧関係は明確にできなかったが、２基の埋積後に植生した木が倒木したことは把握された。遺物は粗砂を多く含んだ土器片がＳＫ215より数点出土したに止まる。縄文土器と思われるが、摩滅が著しく所属時期は判然としない。

ＳＫ245（第10図）は10・11－14グリッドに位置する土坑である。径1.2m程の円形様を呈し、確認面からの深さ約20㎝を測る。壁面は南側でやや緩やかな傾斜となって底面に至る。覆土は炭化物を含んだ黒褐色土が基調で、埋積途中に一括廃棄されたと思われる縄文時代の遺物を包含している。遺物は南半に多く分布する傾向が見られ、底面密着のものはなく、やや浮いた状態で出土している。復元して器形の一部が窺い知れるものは４個体を数えたが、いずれも地文のみもしくは無文の粗製土器である。本坑の東側約２mに配置されるＳＫ247（第11図）からも当該期の遺物が出土しており、共に縄文時代中期中葉の土坑と考えられる。

ＳＫ256（第13図）は北西部の11－10・11グリッドで確認した。平面形は南北方向に長い隅丸方形であるが、北東と南西隅部が半円状に張り出す不整形を呈する。規模は南北約1.6m、東西約１mの大きさである。北半に底面を有する掘り方がなされ、最深部までは50㎝程を測



SK8
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
2 10YR3/3　暗褐色　シルト
10YR4/3砂と５㎜大の小礫混入
3 10YR2/2　黒褐色　シルト　(10YR4/3砂との撹乱層)
4 10YR4/3　にぶい黄褐色　細砂～砂

SK15
1 10YR1.7/1　黒色　シルト
砂礫混じり。10YR2/3シルトの小ブロックを10%含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
3 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色　粗砂
4 7.5YR1.7/1　黒色　シルト　ほぼ純層

SK48
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
2 10YR2/3　黒褐色　シルト　砂礫混じり
3 10YR3/3　暗褐色　シルト
砂礫混じり。10YR2/2シルトの小ブロックを10%含む
4 10YR3/3　暗褐色　シルト
10YR4/3砂の小ブロックを20%含む
5 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂混じり

SK25、SP26
1 10YR2/1　黒色　シルト　やわらかい。植物根を多く含む。
(SP26の覆土)
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
3 10YR3/3　暗褐色　シルト
炭化物を含む。10YR2/2シルトの小ブロックを10%含む
4 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　(地山)
(以上SK25の覆土)

SK57
1 10YR2/1　黒色　シルト　５～20㎜大の礫混入
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR2/1シルトの小ブロックを５%含む
3 10YR3/3　暗褐色　シルト
10YR2/1シルトの小ブロックを５%含む
4 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂混じり

SK59
1 10YR2/1　黒色　シルト
硬くしまる。砂混じり。10YR3/3シルトの小ブロックを５%含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
砂礫混じり。10YR3/3シルトの小ブロックを10%含む

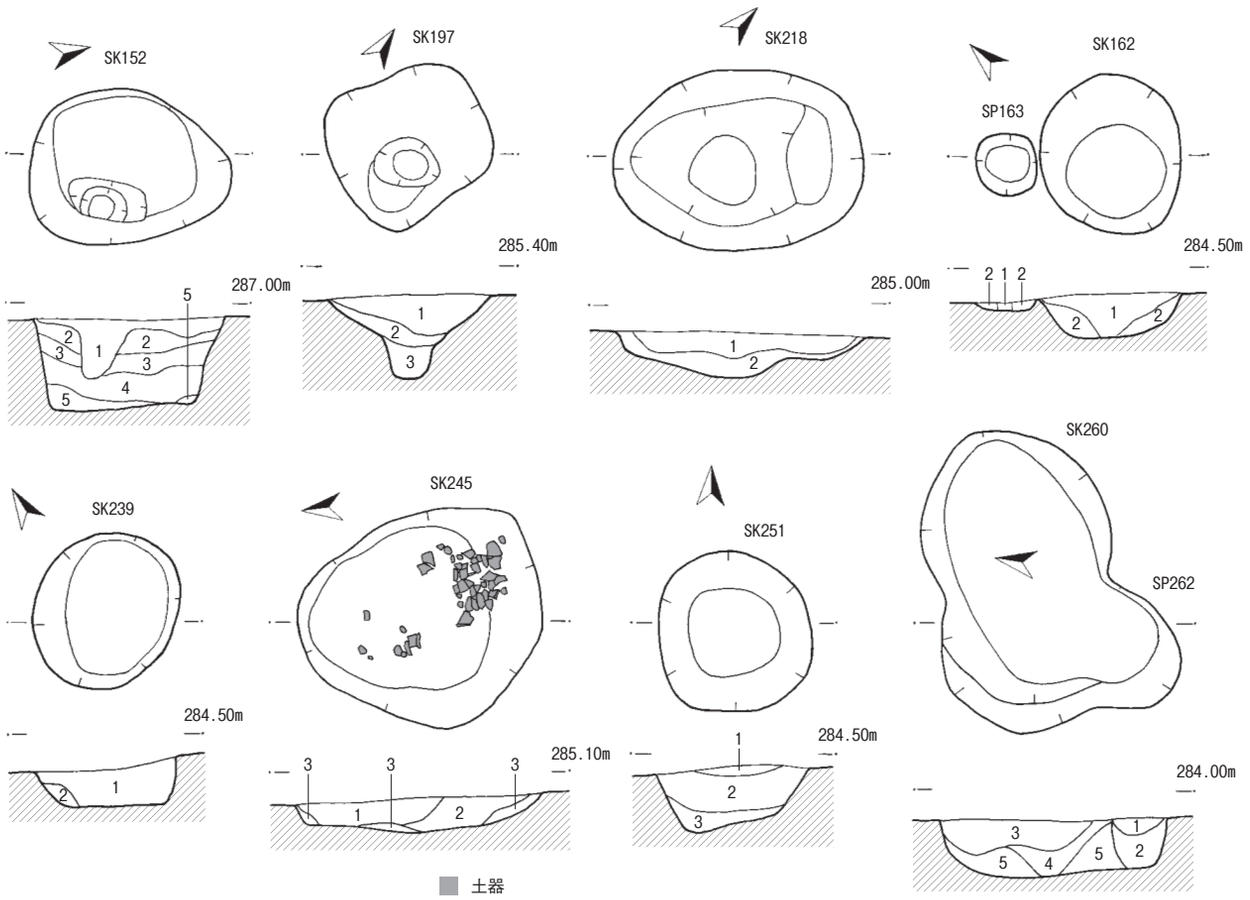
SK96
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
2 10YR3/4　暗褐色　砂
礫混じり。10YR2/2シルトの小ブロックを10%含む

SP156
1 10YR1.7/1　黒色　シルト　(10YR4/3シルトとの撹乱層)
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　(地山)

SK177
1 10YR1.7/1　黒色　シルト
炭化物を含む。10YR3/2シルトの小ブロックを20%含む
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　(地山)

0　1m
1：40

第９図　ＳＫ８･15･25･48･57･59･96･177、ＳＰ26･156



SK152
1 10YR2/1　黒色　シルト
　砂混じり。10YR3/2シルトの小ブロックを20%含む
2 10YR3/2　黒褐色　シルト
　10YR2/1シルトの小ブロックを10%含む
3 10YR3/3　暗褐色　シルト　砂礫混じり
4 10YR3/1　黒褐色　シルト
　10YR4/3シルトの小ブロックを10%含む
5 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
　10YR3/1シルトの小ブロックを10%含む

SK197
1 7.5YR1.7/1　黒色　シルト
2 7.5YR4/6　褐色　砂礫
3 5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト

SK218
1 10YR2/1　黒色　シルト
　10YR3/2シルトの小ブロックを20%含む
2 10YR3/2　黒褐色　シルト　礫混じり

SK162・SP163
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
2 10YR3/2　黒褐色　シルト
　砂質土。10YR4/4シルトの小ブロックを10%含む

SK239
1 10YR3/2　黒褐色　シルト
　10YR3/4シルトの小ブロックを10%含む
2 10YR3/3　暗褐色　シルト　砂礫混じり

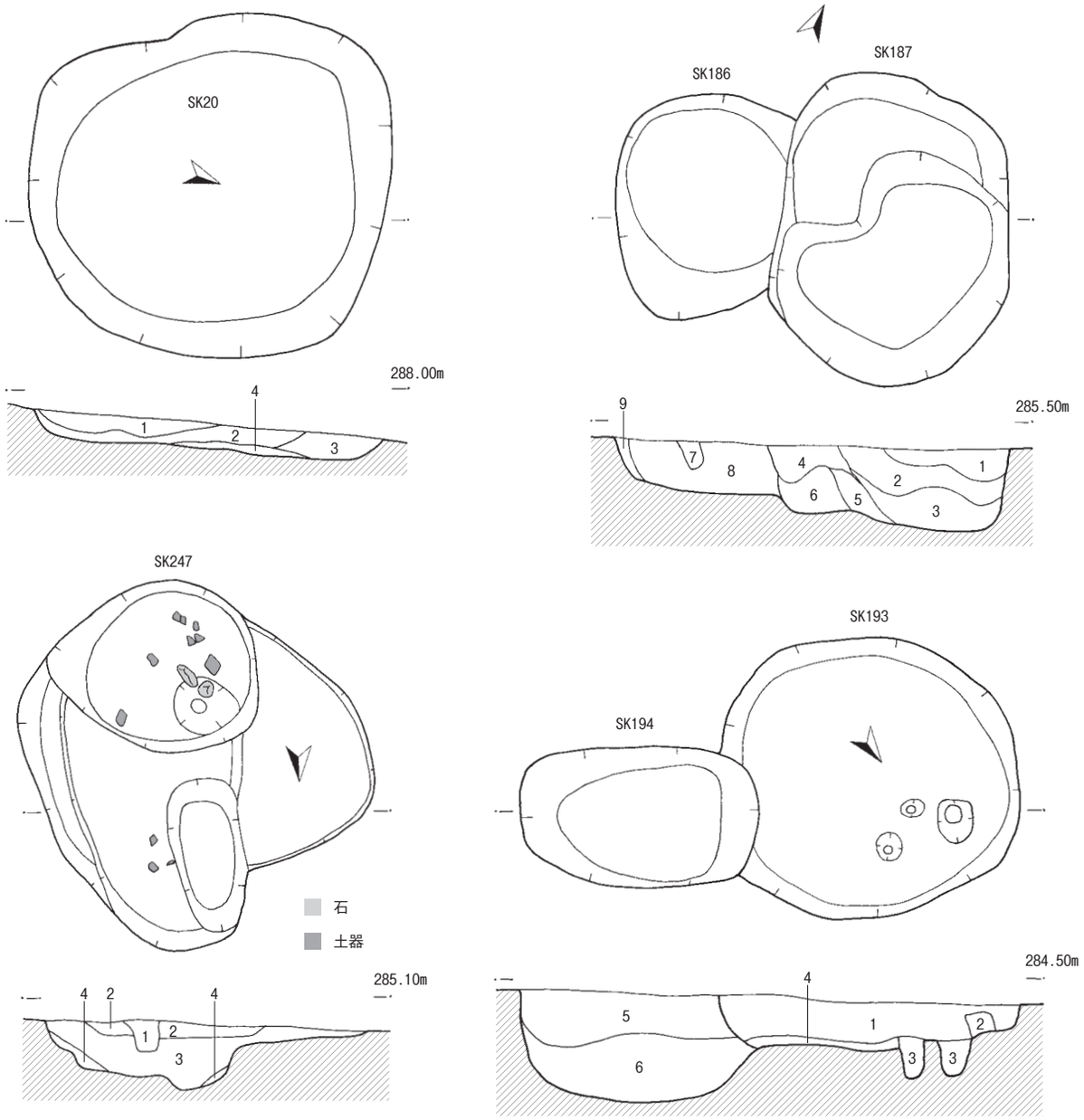
SK245
1 10YR2/2　黒褐色　シルト
　炭化物を含む。10YR2/1シルトの小ブロックを10%含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト　炭化物を含む
3 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂混じり

SK251
1 10YR2/1　黒色　シルト　炭化物を多く含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト　5㎜大の礫混入
3 10YR4/3　にぶい黄褐色　砂～粗砂　（地山）

SK260、SP262
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
2 10YR3/1　黒褐色　シルト
（以上SP262の覆土）
3 10YR2/1　黒色　シルト　砂礫混じり
4 10YR2/1　黒色　シルト
　10YR3/3砂の小ブロックを10%含む
5 10YR3/1　黒褐色　細砂
　10YR4/4砂の小ブロックを20%含む
（以上SK260の覆土）

0　1m
1：40

第10図　ＳＫ152・162・197・218・239・245・251・260、ＳＰ163・262



SK20
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　10YR4/3砂の中ブロックを10％含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト　2.5Y3/3粗砂の中ブロックを10％含む
3 10YR3/3　暗褐色　シルト　砂礫混じり
4 10YR3/4　暗褐色　シルト　（地山）

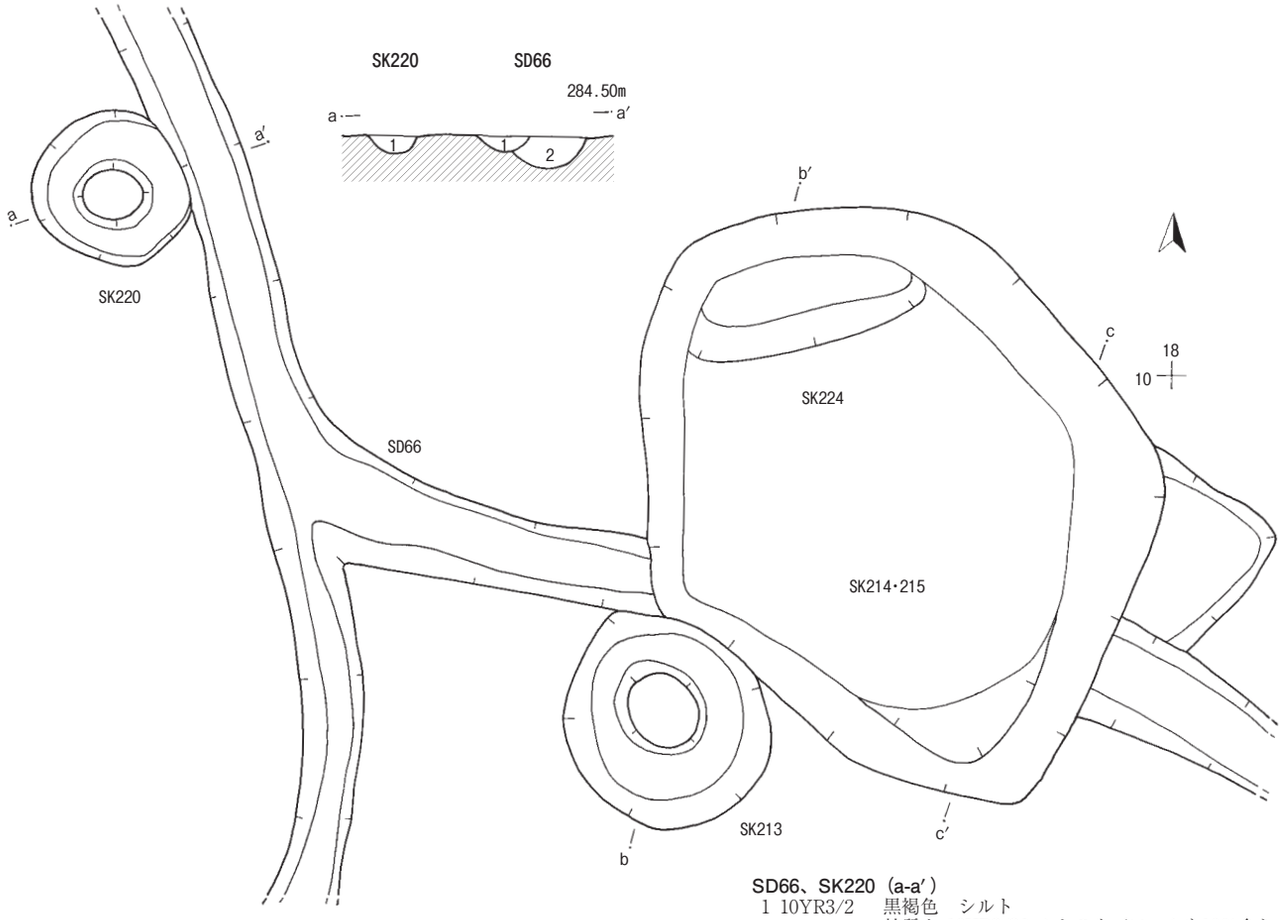
SK186・187
1 10YR2/2　黒褐色　シルト
2 10YR2/2　黒褐色　シルト　10YR4/4シルトの中ブロックを20％含む
3 10YR2/2　黒褐色　シルト　10YR4/2細砂を帯状で20％含む
4 10YR2/2　黒褐色　シルト　砂混じり
5 10YR2/2　黒褐色　シルト　7.5YR4/4砂の小ブロックを20％含む
6 7.5YR4/4　褐色　砂～粗砂
（以上SK187の覆土）
7 10YR2/2　黒褐色　シルト
8 10YR2/1　黒色　シルト　炭化物を含む。礫混じり
9 10YR4/4　褐色　シルト　（地山）
（以上SK186の覆土）

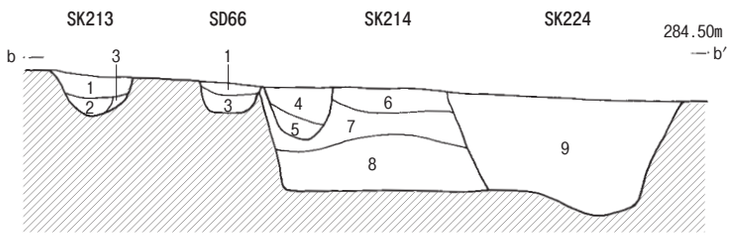
SK193・194
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　礫混じり。植物根を多く含む。
2 10YR3/4　暗褐色　細砂　塊状
3 10YR2/1　黒色　シルト　硬くしまる。
4 10YR4/4　褐色　砂～粗砂（地山）
（以上SK193の覆土）
5 10YR2/2　黒褐色　シルト
6 10YR2/2　黒褐色　シルト
（以上SK194の覆土）

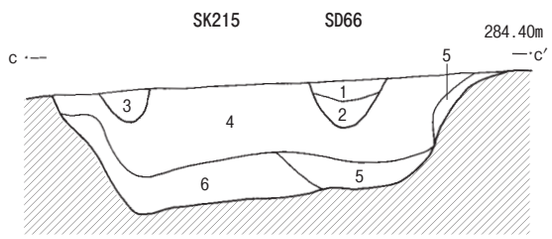
SK247
1 10YR2/1　黒色　シルト　（ピットの覆土）
2 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
3 10YR3/3　暗褐色　シルト　炭化物を含む。砂礫混じり
4 10YR3/4　暗褐色　シルト　５～20㎜大の礫混入

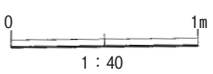
0　1m
1：40

第11図　ＳＫ20・186・187・193・194・247







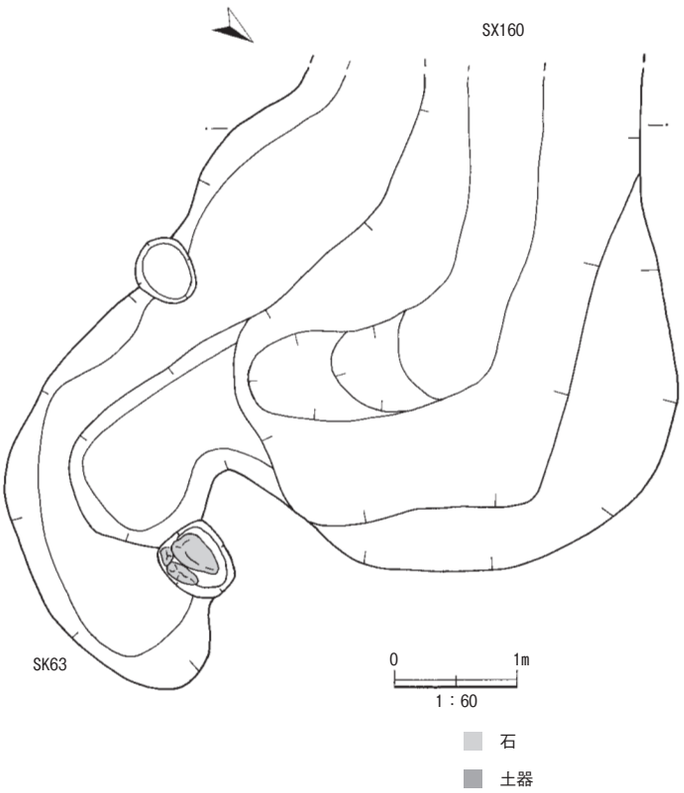


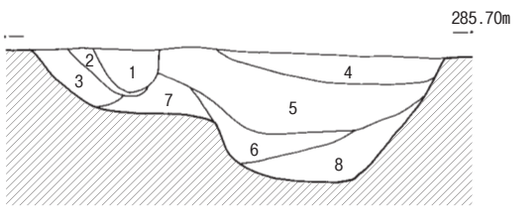
SD66、SK220（a-a′）
1 10YR3/2　黒褐色　シルト
粘質土。10YR2/2シルトの小ブロックを10％含む
（SK220の覆土）
2 10YR2/1　黒色　シルト
10YR3/3シルトの小ブロックを10％含む
（SD66の覆土）

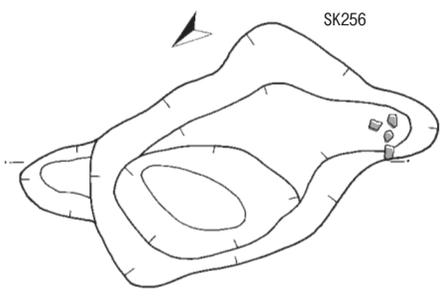
SD66、SK213・214・224（b-b′）
1 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR2/1シルトの小ブロックを10％含む
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR3/2シルトの小ブロックを20％含む
3 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂混じり
（以上SK213の覆土）
4 10YR2/1　黒色　シルト　ほぼ純層
5 10YR2/1　黒色　シルト
10YR3/2シルトの小ブロックを10％含む
（以上SD66の覆土）
6 10YR2/1　黒色　シルト
10YR3/2シルトの小ブロックを20％含む
7 10YR3/2　黒褐色　シルト
10YR2/1シルトの小ブロックを10％含む
8 10YR2/1　黒色　シルト　砂混じり
（以上SK214の覆土）
9 倒木痕跡　（地山との撹乱層）
（SK224の覆土）

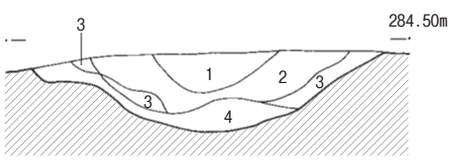
SD66、SK215（c-c′）
1 10YR2/1　黒色　シルト　ほぼ純層
2 10YR2/1　黒色　シルト
10YR3/2シルトの小ブロックを10％含む
（以上SD66の覆土）
3 10YR1.7/1　黒色　シルト　（ピットの覆土）
4 10YR1.7/1　黒色　シルト
10YR3/2シルトの小ブロックを５％含む
5 10YR1.7/1　黒色　シルト　ほぼ純層
6 10YR3/2　黒褐色　シルト
礫混じり。10YR1.7/1シルトの小ブロックを20％含む
（以上SK215の覆土）

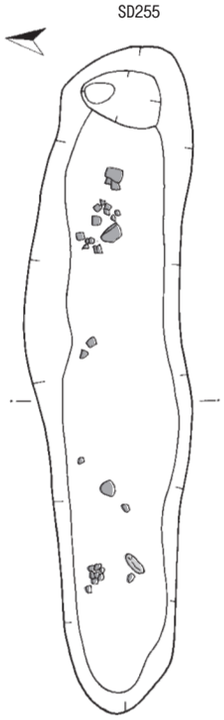
第12図　ＳＫ213～215・220・224、ＳＤ66

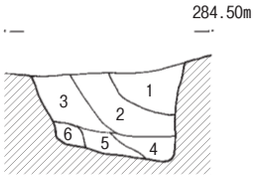












SX160

1		抜根による撹乱		
2	10YR3/1	黒褐色	シルト	
3	10YR2/1	黒色	シルト	10YR4/3シルトの大ブロックを30％含む
4	10YR3/3	暗褐色	シルト	
5	10YR3/2	黒褐色	シルト	
6	10YR3/1	黒褐色	シルト	10YR4/3シルトの小ブロックを10％含む
7	10YR2/2	黒褐色	シルト	
8	10YR2/2	黒褐色	シルト	砂礫混じり。10YR3/3シルトの小ブロックを10％含む

SK256

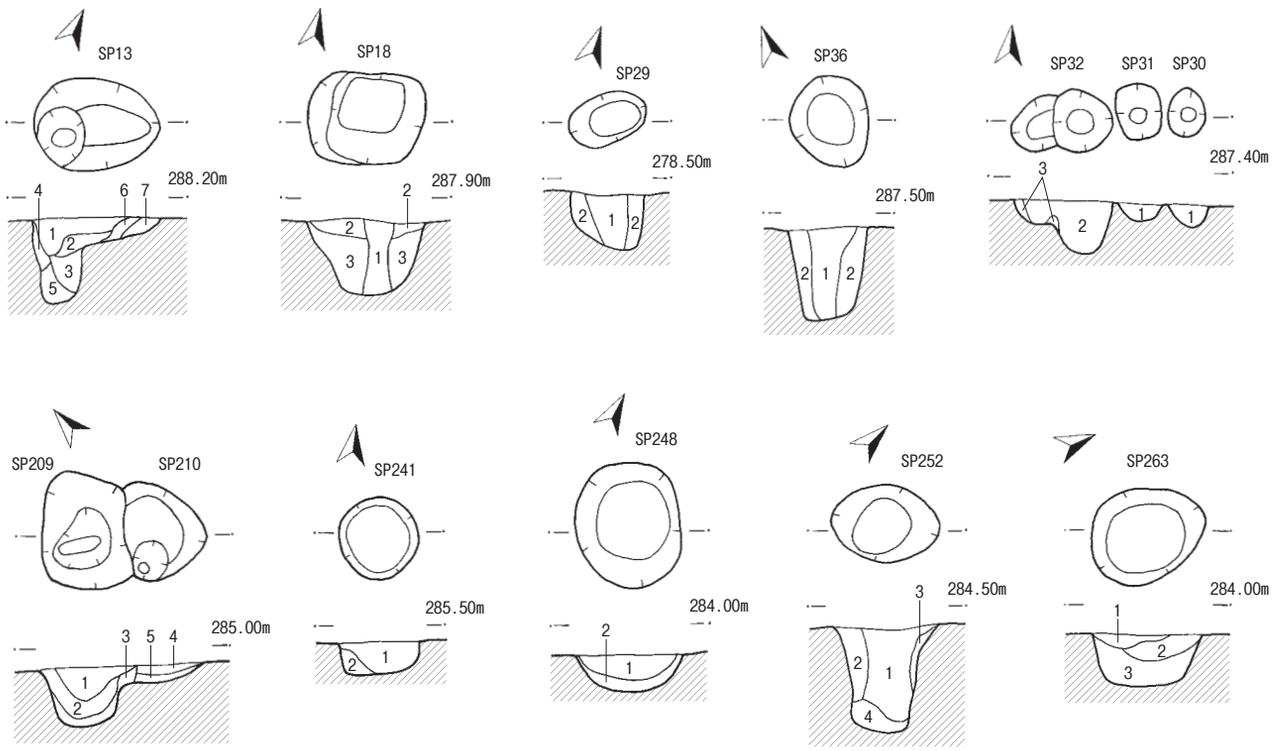
1	10YR2/1	黒色	シルト	５～10㎜大の礫混入
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	５～10㎜大の礫混入
3	10YR3/1	黒褐色	シルト	10YR4/4砂の小ブロックを10％含む
4	10YR4/4	褐色	砂～粗砂	10YR3/1シルトの小ブロックを30％含む

SD255

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	ほぼ炭化した有機物を含む
2	10YR2/1	黒色	シルト	ほぼ炭化した有機物を含む
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	ほぼ炭化した有機物を含む
4	10YR3/2	黒褐色	シルト	砂混じり
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	10YR2/2シルトの小ブロックを５％含む
6	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR4/3砂の小ブロックを30％含む

0　1m
1：40

第13図　ＳＸ160、ＳＤ255、ＳＫ256



SP13
1 10YR3/3　暗褐色　シルト
10YR2/2シルトと10YR4/4シルトの小ブロックを10%含む
2 10YR2/3　黒褐色　シルト
10YR4/4シルトの小ブロックを５%含む
3 10YR3/2　黒褐色　シルト
10YR4/4シルトの小ブロックを10%含む
4 10YR2/2　黒褐色　シルト
5 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR3/2シルトと10YR4/4シルトの中ブロックを30%含む
6 10YR4/4　褐色　シルト
7 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
10YR3/3シルトの中ブロックを30%含む

SP18
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　やわらかい。植物根を多く含む。
2 10YR3/2　黒褐色　シルト　砂礫混じり
3 10YR3/2　黒褐色　シルト
粗砂混じり。10YR4/3シルトを粒状で30%含む

SP29
1 10YR1.7/1　黒色　シルト
10YR4/3シルトを霜降り状で30%含む
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
10YR1.7/1シルトを霜降り状で10%含む

SP30～32
1 10YR2/2　黒褐色　シルト　ほぼ純層
（SP30・31の覆土）
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR4/3シルトの中ブロックを10%含む
3 10YR2/3　黒褐色　シルト
10YR4/3シルトの中ブロックを20%含む
（以上SP32の覆土）

SP36
1 10YR2/1　黒色　シルト
10YR4/3シルトの中ブロックを10%含む
2 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
10YR2/1シルトの小ブロックを20%含む

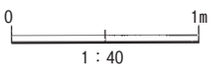
SP209・210
1 10YR2/1　黒色　シルト　炭化物を含む。礫混じり
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
3 10YR2/3　黒褐色　シルト
10YR2/2シルトの小ブロックを10%含む
（以上SP209の覆土）
4 10YR2/1　黒色　シルト
10YR3/3シルトの小ブロックを５%含む
5 10YR3/3　暗褐色　シルト　砂混じり
（以上SP210の覆土）

SP241
1 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR3/3シルトの小ブロックを５%含む
2 10YR3/3　暗褐色　シルト
3 10YR4/4　褐色　砂～粗砂　（地山）

SP248
1 10YR3/2　黒褐色　シルト　礫、植物根を含む
2 10YR4/2　灰黄褐色　シルト　10～20㎜大の礫混入

SP252
1 10YR2/1　黒色　シルト
2 10YR2/2　黒褐色　シルト
10YR3/3シルトの小ブロックを５%含む
3 10YR3/3　暗褐色　シルト
4 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　砂礫混じり

SP263
1 10YR2/2　黒褐色　シルト
2 10YR3/2　黒褐色　シルト
3 10YR3/1　黒褐色　シルト　砂礫混じり



第14図　ＳＰ13・18・29・30～32・36・209・210・241・243・252・263

る。完掘形態から土坑やピット何基かの重複とも見なされるが、土層断面ベルトにおける切り合い関係は認められない。遺物は南西隅の張り出し部から、縄文土器片が数点出土した。

ＳＫ260･ＳＰ262（第10図）は重複関係にある遺構で、北辺部の13－８グリッドに位置する。東西方向の楕円形を呈するＳＫ260の南西部にＳＰ262が重なっており、後者の方が新しい。長軸1.6m程の規模で、２基とも底面までの深さは約30cmを要する。断面観察から、ピットは土坑が埋まった後に掘り込まれたものと判断される。遺物は双方から縄文土器深鉢の胴部片が出土したが、いずれも粗製土器で実測図示できるものではなかった。

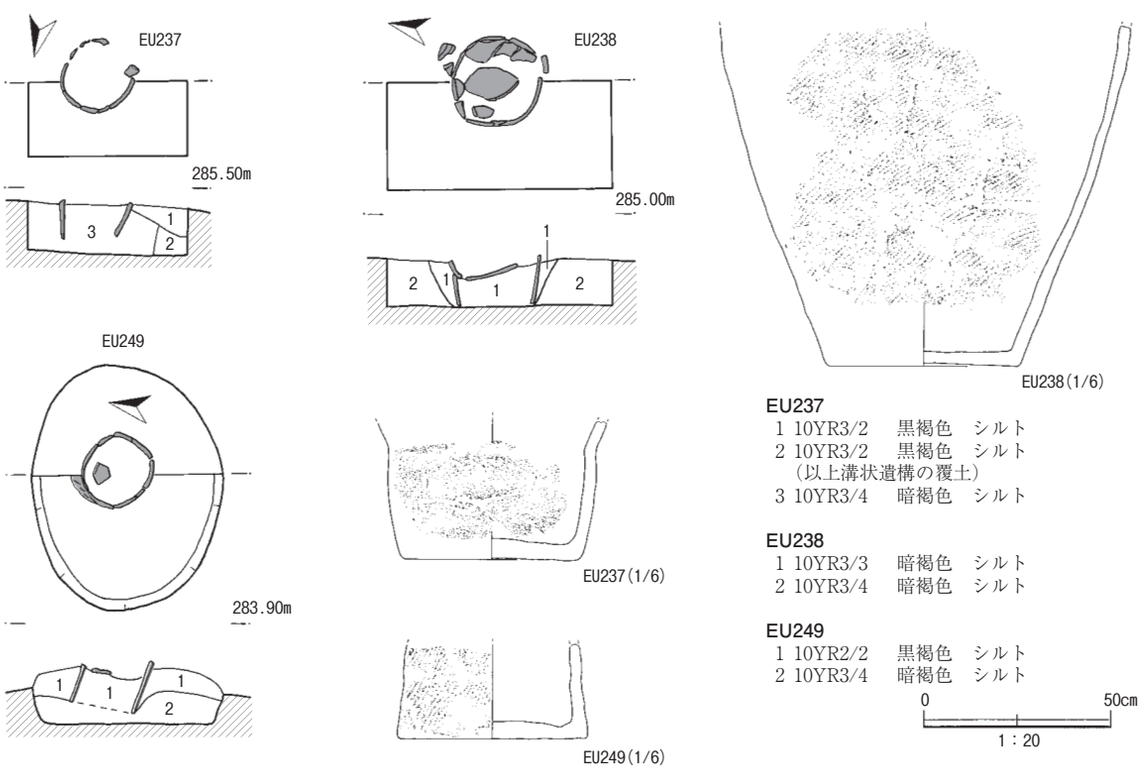
土器埋設遺構（第15図）

３基の土器埋設遺構（ＥＵ237・238・249）は、いずれも調査区北西域から検出された。その分布に規則性はなく各々が単独的に配され、他遺構との重複は認められない。

ＥＵ237はＳＤ６より北側へ約８m、13－13グリッドにおいて確認された。土坑状の掘り方を有せず、上部は不明ながら地山の部分は埋設する深鉢の形状に合わせて地面を掘り窪めたものと考えられる。深鉢は口縁を上にした正位の状態で据えられ、上半を欠いた胴部下半～底部までのものを埋設している。深鉢の器形は底部の大きい筒形を呈し、文様は地文のみの粗製土器である。

ＥＵ238はＥＵ237の北西約10mに位置し、調査区北西域でも最も遺構が密集する地区で検出された。確認時には掘り方のプランが明確でなかったが、半截後の断面観察により地山と識別できる掘り込み線が認められ、埋設土器より幾分大きい掘り方を有していたと思われる。埋設された深鉢の姿勢は正位で、口辺を欠損した下半部が据え置かれる。埋設後に土器上部が崩壊したらしく、深鉢内部に破片が山積していた。深鉢は外面に縄文のみが施される粗製品で、３基の中では最も大形である。

ＥＵ249は調査区北壁際の12－７グリッドで、楕円形を呈する土坑状の掘り込みを伴って確認された。地山上における掘り方規模は長軸65cm・短軸約50cmを測り、深さ10cm弱の皿状の掘り込みである。埋設土器はプラン検出面より10cm上で存在が確認できており、地山をほとんど掘り込んでいない状況が窺われた。埋設された深鉢は下半部を正位で据え置くが、底部に対して胴部が南側へ傾いており、地震などによる地盤のズレが影響したとも考えられる。深鉢の器形はＥＵ237同様、底径の大きい筒形土器である。



第15図　ＥＵ237･238･249

3　出土遺物

整理用コンテナ７箱分量の遺物が出土し、主だったものを第16～20図に示した。出土土器に完形品はなく、大半が小破片で、復元して器形が窺えるものは一部に限られた。遺物は土器と石器に大別した上で、土器に関しては遺構単位で抽出し、包含層出土の主要なものもまとめて掲載している。以下では、図版番号に従って遺物個々の概要を述べていく。

土器・陶磁器

土器の種類には縄文土器、平安時代の土師器･須恵器、中世の土師質土器などがある。数的には縄文土器が圧倒しており、古代・中世の土器類は特定の遺構から集中的に出土したものである。

１～４は、ＳＤ１～６溝跡内から出土した内耳土堝の口辺部及び底辺部である。小片のため器形が定かではないが、体部が外傾しながら立ち上がり、内耳が貼り付けられる頸部付近で屈曲して開く形態と推定される。胎土には砂粒が多く混入し、４点とも体部外面に煤の付着は認められない。５はＳＤ６出土の縄文土器深鉢胴部片で、結節縄文を縦位回転した地文が施される。６の口縁部資料は口唇に小刻みなスリットを有し、外面はミガキ調整を行った後に斜行の撚糸圧痕を施文している。７はＳＤ２北側の土坑から出土した肥前系と目される湯飲碗で、染付けにより外面に矢羽根文、内面には圏線を施す。８～14はＳＸ160より一括的に出土した平安時代の土器で、土師器坏（８～10）、須恵器甕（11・12）、赤焼土器甕（13・14）の各器種がある。９・10は有台坏の底部片で、底部切離後に不整な菊花状のナデ痕が観察できるが、調整は粗雑である。９は黒色処理を受けないものの、内外面ともミガキにより器面調整されている。10も同様と判断されるが、二次焼成を受けて器面の剥落が著しいため定かでない。11は丸底大甕の底辺部と認識され、下半にはタタキが施されずに横方向のケズリ痕を明瞭に残している。

15以下は、すべて調査区北西部検出の遺構や包含層から出土した遺物である。19～25はＳＫ245出土の一括資料で、器形が復元できた深鉢は斜行縄文の地文のみか無文の粗製土器である。20～22の破片資料では、文様要素として撚糸圧痕文が主体的に施される。20は地文の上から細い隆線を貼り付けて文様帯を区画し、隆線沿いやこれに垂下する縦位に撚糸圧痕を施文している。21は蕨手状の隆線貼付文下に円形の抉りを横位に並べて文様構成され、区画内に撚糸圧痕が付文される。22は２本の隆帯間に粘土紐を波状に貼り付け、粘土紐の上下及び隆帯沿いに圧痕が認められる。26～28はＳＫ247出土土器である。26・27はいずれも頸部に隆帯を廻らせた深鉢で、器形は26が円筒形､27は口辺が外傾して開く形態を呈する。隆帯には刻目や沈線が入り、26の胴部には隆帯下より等間隔で垂下する撚糸圧痕文が見られ、縦縞状に付文される。28は口縁に二瘤状の突起を有する深鉢片で、口縁に沿って２本の沈線が引かれる。29・30はＳＫ251から出土した在地系と思われる擂鉢片で、口辺には内外面に薄く鉄釉が掛けられる。卸目は29で一単位８条を数えるのに対し、30では隙間なく密に施される。31は口辺部に引かれた沈線の下に、串状工具で半円文を描いて文様帯を構成している。胴部には12㎜程の短い原体を縦位回転させたＲＬ縄文を一定間隔に付して、施文帯と無文帯とが交互に現れる縞状の意匠となる。32は口辺部外面に付された２本の隆帯のほかに、内面の口縁直下にも幅広で扁平な隆帯を廻らす。文様は撚糸圧痕によって施文され、隆帯間のほか口縁直下に長さ約10㎜の圧痕文がスリット状に配列される。33は交差する深い沈線と撚糸圧痕とにより、甲羅状の凹凸を描出している。34～42はＳＤ255からの出土土器である。34は浅鉢型土器の口辺部片で、研磨された器面に撚糸圧痕文が丁寧に押捺された精製土器である。口縁に捻りを有した突起を付す35は、粘土紐貼り付けによる隆線上に竹管状工具で円形の刺突文を充填し、主に隆線に沿って撚糸圧痕が施文される。36は口辺が弱く外傾する小形の深鉢で、文様はすべて半截竹管状工具によってなされる。口縁に刻目状の刺突文、その直下に横位沈線文を２段に引いて頸部に至り、胴部にはＬＲ斜縄文の上から縦位の区画文や半円または円文が施されるようだ。37は粘土紐を短く千切って装飾的に貼り付けた口縁突起を有する。38は棒状工具による２本一対の沈線文を施すようだが、器面の摩滅によりはっきりしない。39・40は同一個体の破片であり、地文の上から縦位回転させた結節縄文が施される。41・42は深鉢の下半部資料で、胴部に見られる文様は地文のＬＲ斜縄文のみである。43・44の口辺部片も同一個体と認識される。山

形突起が付く波状口縁を呈すと思われ、地文の施文後に口縁形態に沿った平行沈線文を施している。45は幅広な面を有する口唇にスリットが入り、直下には口縁平行の撚糸圧痕文が施される。

46～48の３個体は埋設土器で、いずれも口辺や上半を欠く深鉢型土器の下半部である。復元された器形は46が底部から内傾して立ち上がるもの、47は頸部から口辺が外傾するタイプ、48が外反して直線的に立ち上がる形態を呈している。47・48の胴部には、横位回転による結節縄文が施文される。

49以下は包含層扱いで取り上げたもので、このうち49～52はＳＤ255付近から出土した土器片である。49は口縁下に貼り付けられた隆帯の介在によって、折り返したような口縁部を作出している。頸部に２本の平行沈線を引いて胴部と区画し、口縁には突起が付加される。50も口縁下に三角形様の隆帯の貼り付けがなされる。51は区画線下にＵ字状の沈線が描かれ、施文は半截竹管によるものと思われる。53は口縁部に粘土紐を棒状に貼り付け、口縁を４単位に区画している。54は口縁部文様帯が２本一対の山形沈線文によって装飾される。55の口縁部片は隆帯上に小刻みな刺突を施し、短い縦位の撚糸圧痕文が認められる。56は台形状の幅広な隆帯上に、長さ６㎜程の微細な原体により撚糸圧痕を充填している。57・58の口縁直下に配列される楕円状の凹部も、撚糸圧痕による文様である。59は半截竹管沈線文＋爪形連続刺突文により文様が構成される。

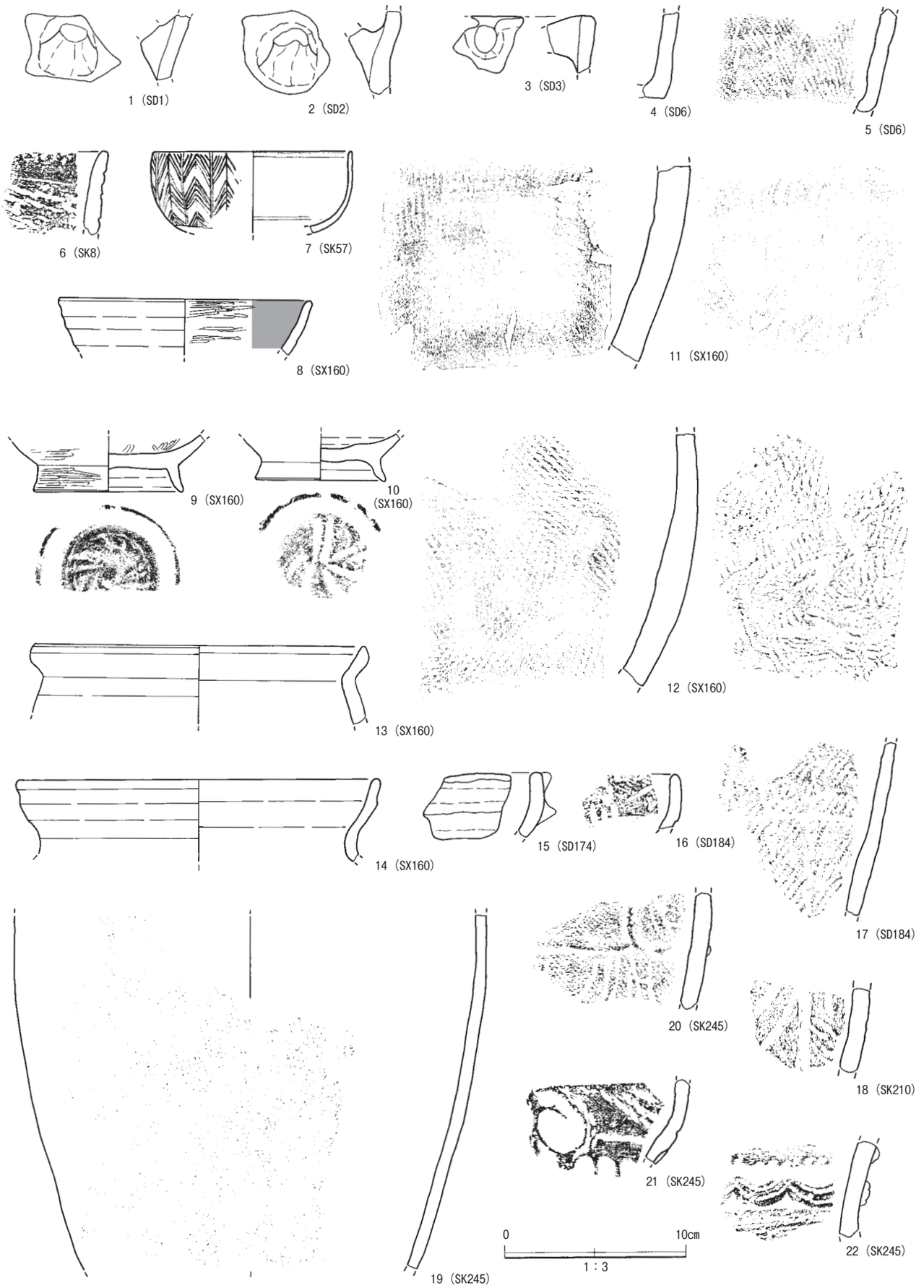
これら土器類の年代は、縄文時代・平安時代・中世及び近世に大別されよう。溝跡出土の内耳土堝は口辺内側に３単位の取手を有するもので、県内では米沢市を中心とした置賜盆地の中近世の遺跡から普遍的に出土する器種である。取手や口縁部の形状により年代推定が可能とされるが、出土資料は値する要件を満たしていないため、15～16世紀の範疇で捉えておきたい。近世陶磁器で７の湯飲碗は18世紀後半、29・30の擂鉢片は18～19世紀の所産と考えられる。ＳＸ160一括出土の土器群には年代指標となる須恵器の食膳器が含まれないが、９･10の形態等から９世紀前半の遺物と推測できる。主体を占める縄文土器群は大木６式～７ｂ式に属するものが大半ながら、胎土に繊維の混入が認められる６は前期初頭の上川名Ⅱ式に、粘土紐を小波状に貼り付ける37は大木４式に併行するものであろう。また、43・44は多条沈線文が施される特徴から、後期前葉の所産と考えられる。太い沈線文を基本とする18や鋸歯状の沈線文を口縁部文様帯に施す54、口縁部に棒状の区画貼付文を付す53、半截竹管による連続爪形文を施す59等は、大木６式併行の土器群と認識できる。

石　器

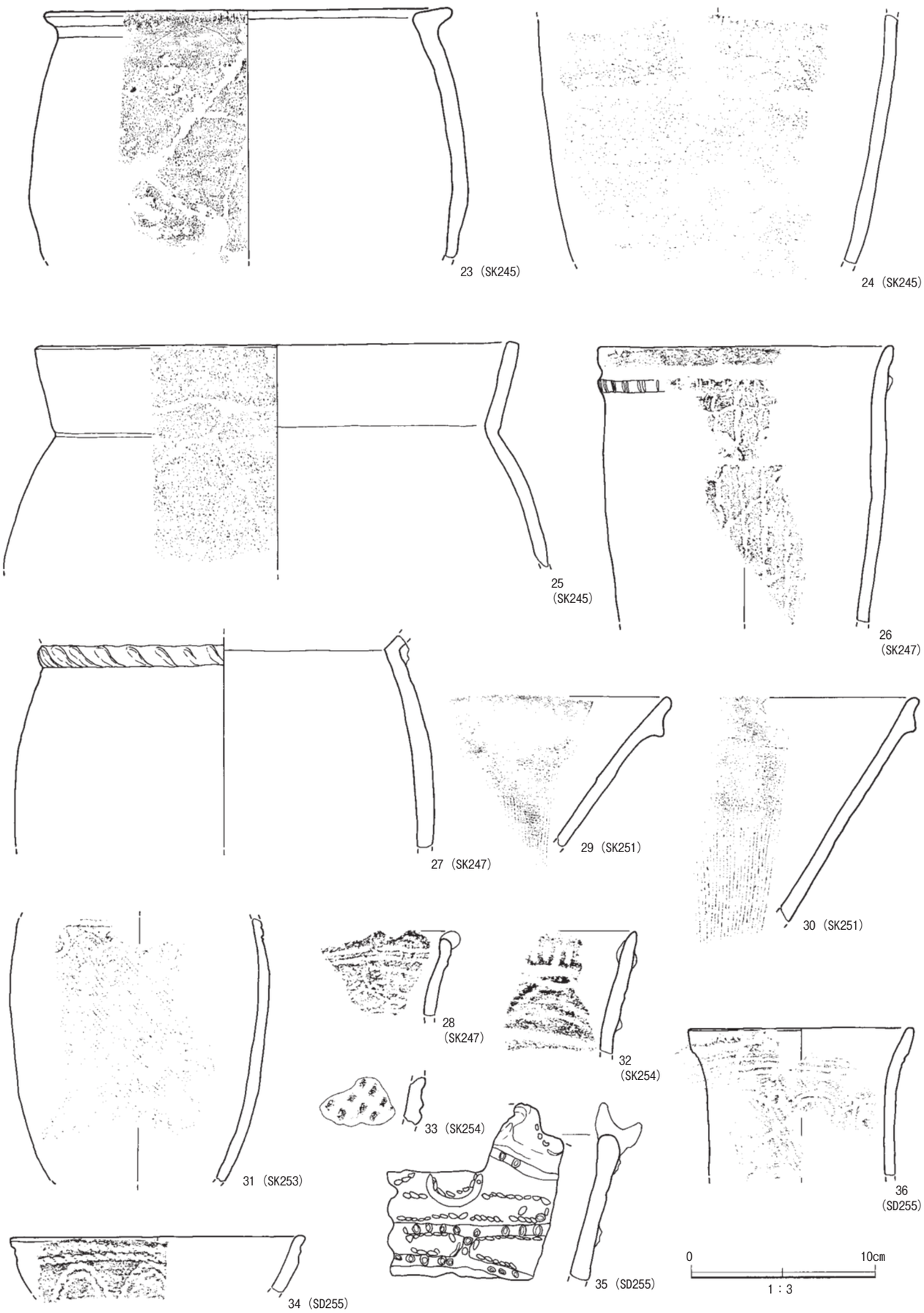
石器の種類は打製石器と礫石器に大別される。共に出土数が少なく、図化したのは打製石器６点（第19図）と礫石器が５点（第20図）である。

１の石鏃は脚部を深く抉り出すことで基部を作出する凹基鏃に分類され、左脚が欠損する。２の石錐は摘みを有する形態であり、素材の側面に両面加工で錐部を作出している。錐部先端には軽微な磨耗が認められる。３は縦長剥片を素材とした石槍である。素材は剥離開始部に見られるコーンなどから、平坦打面よりハードハンマーの直接打撃で剥離したと思われる。４・５の削器は横長剥片を素材としたものである。４は素材末端部の背面側に、押圧剥離によって刃部が作出される。５は弯曲する素材末端部に微小な剥離痕が見られ、この部分が刃部と認識できる。６の三脚石器は裏面側に二次加工を施すことによって、形態を整形している。これら打製石器の石材は、すべて珪質頁岩である。

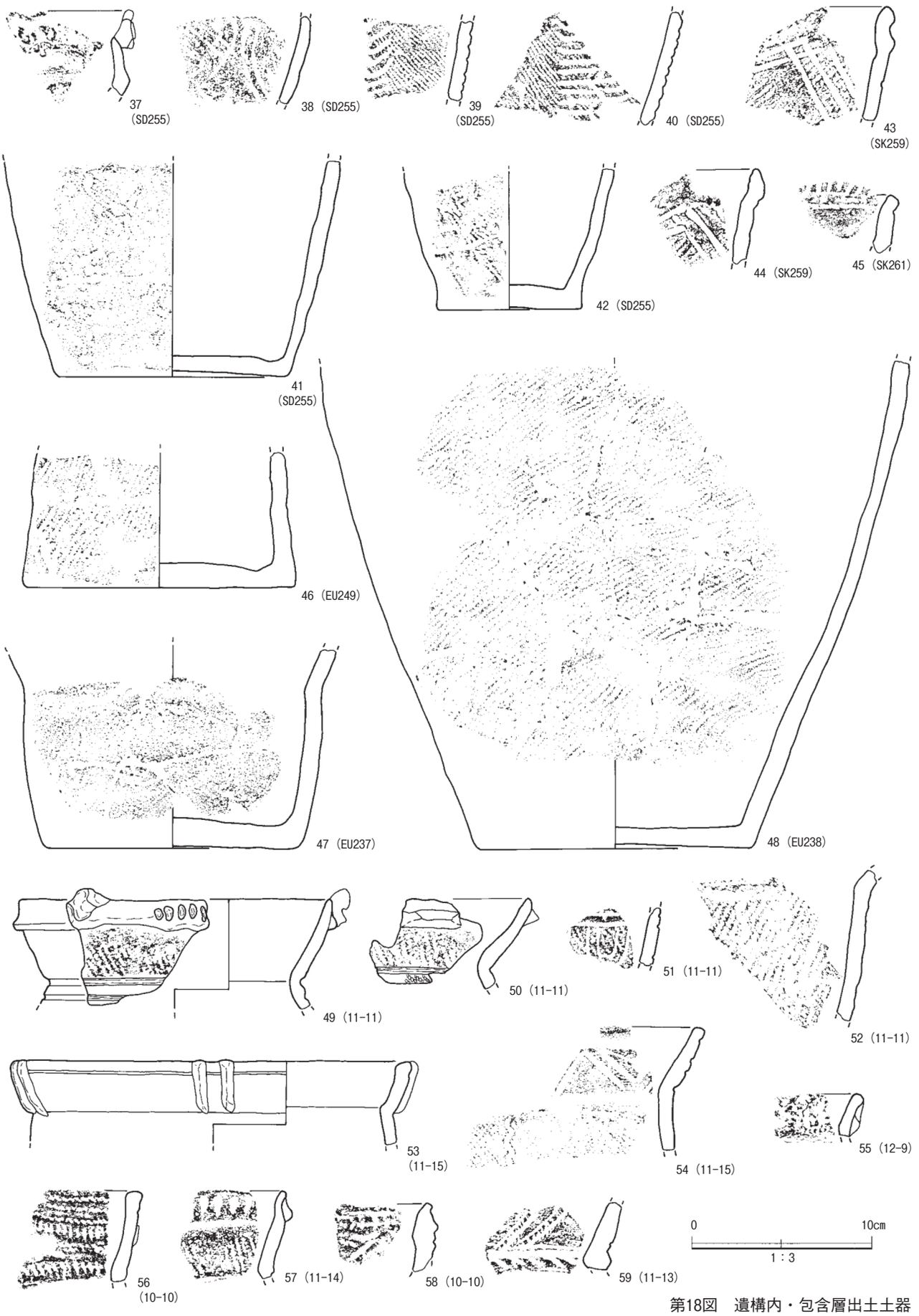
礫石器では凹石（７・８）、磨石（９･10）、砥石（11）が出土している。三角形様の棒状礫を素材とした７は、扁平両面に凹部を有する。両面とも複数の凹みが存在し、使用回数の多さから凹部が連結してできた大きな凹みも認められる。隅丸方形を呈する８は、幅広となる二側面に磨面を併せ持つ。磨石は楕円形礫の一面と、長軸先端を含む側面の一部が磨面として使用されたもので、10の一側面には敲打痕が認められる。ＳＫ247出土の砥石は縦断面が三角形を呈し、表裏及び一側面の計三面が砥ぎ面として使用されている。



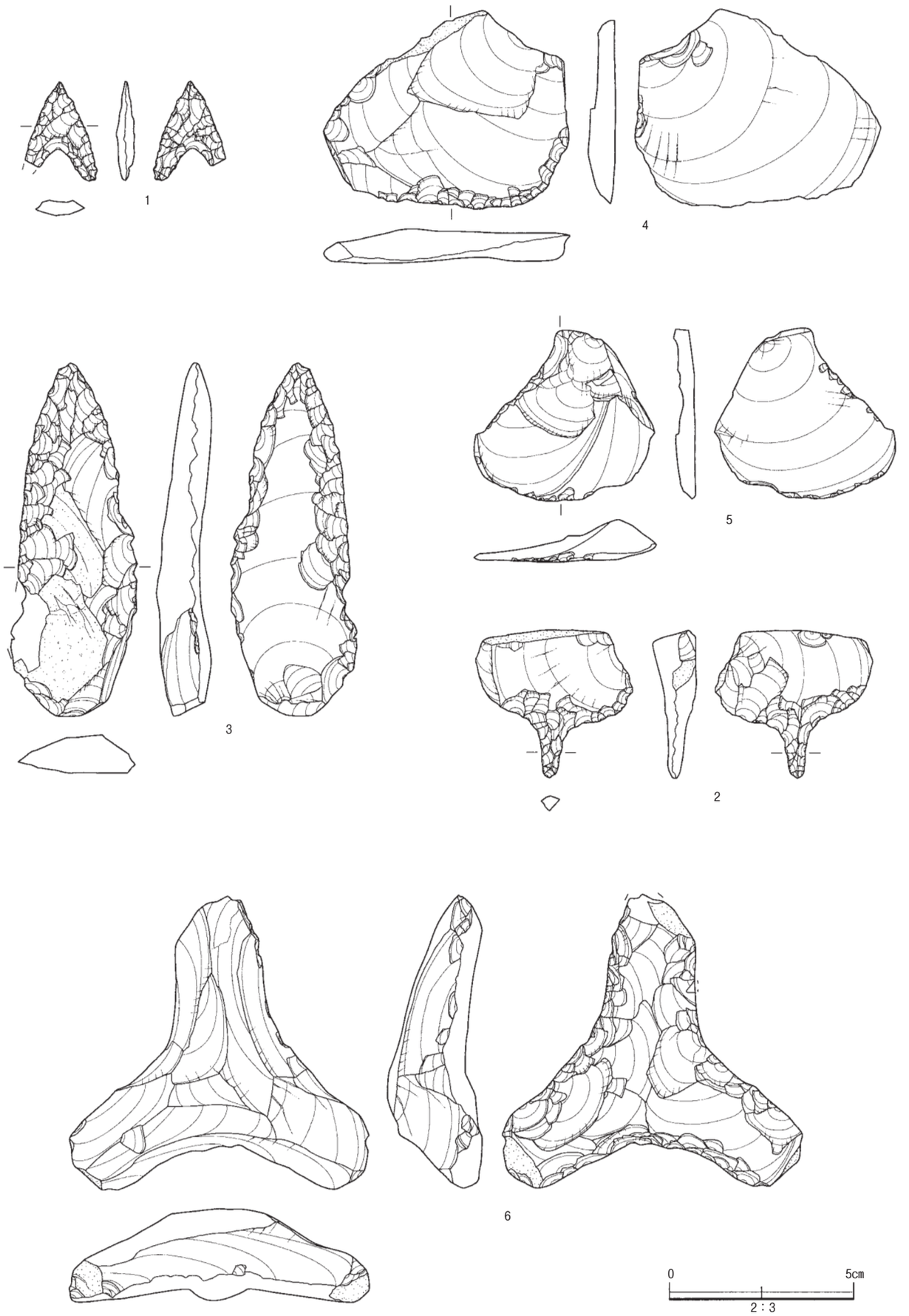
第16図　遺構内出土遺物（１）



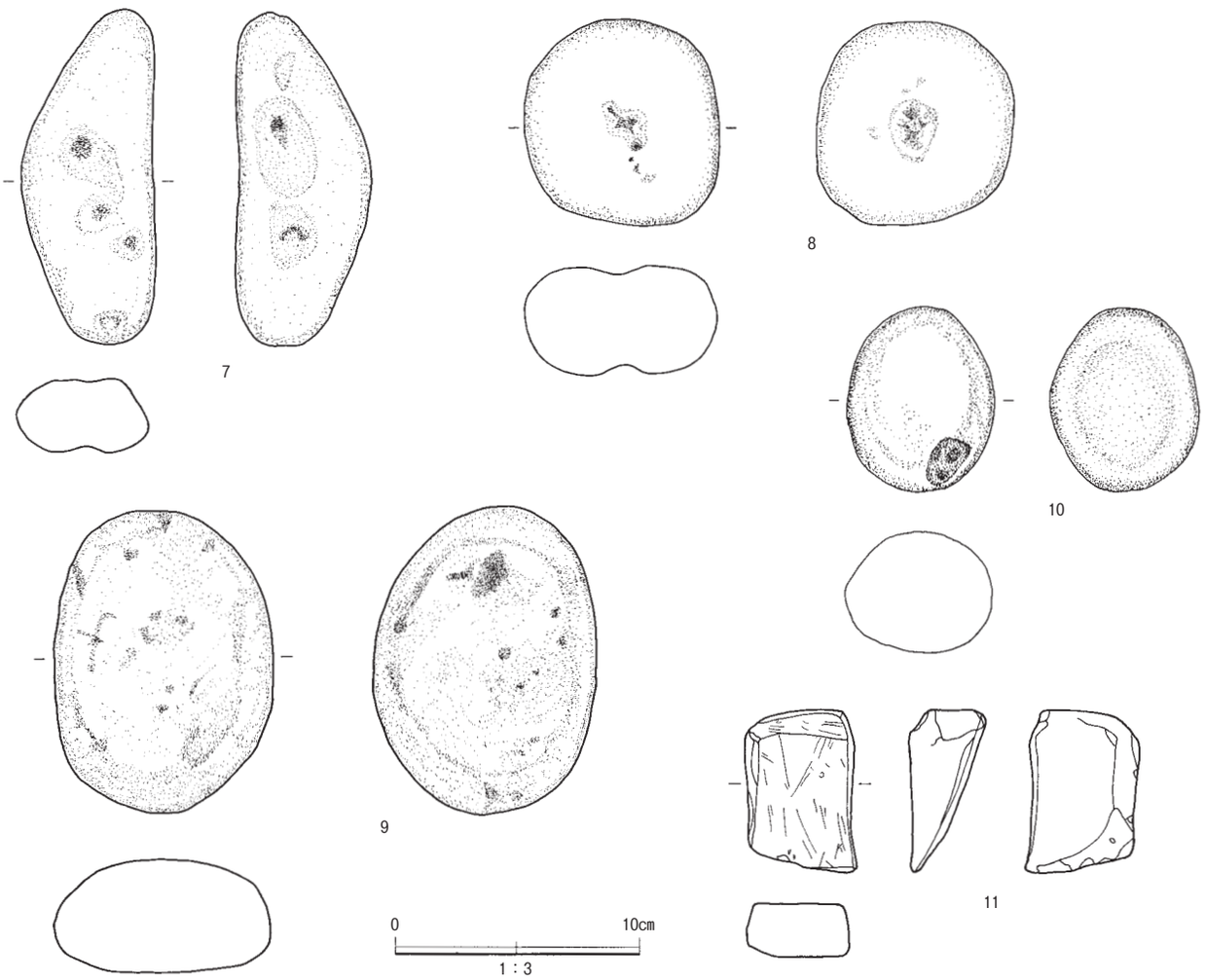
第17図　遺構内出土遺物（２）



第18図　遺構内・包含層出土土器



第19図　打製石器



第20図　礫石器

表３　打製石器属性表

遺物番号	器種	出土地点	石材	刃部形態	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
1	凹基鏃	13-14Ⅱ	珪質頁岩	－	27.1	19.7	5.2	1.5	左脚欠
2	石錐	10-15Ⅱ	珪質頁岩	－	40.2	42.7	12.0	13.2	
3	石槍	10-11Ⅱ	珪質頁岩	－	95.9	34.4	15.0	43.6	
4	削器	17-10Ⅱ	珪質頁岩	直線	54.0	66.7	9.4	29.3	
5	削器	10-10Ⅱ	珪質頁岩	外弯	46.6	49.2	11.5	13.3	
6	三脚石器	表面採取	珪質頁岩	－	79.8	81.6	25.6	82.1	

表４　礫石器属性表

遺物番号	器種	出土地点	石材	素材形態	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	備考
7	凹石	SD255	安山岩	棒状形	137	54	30	253	
8	凹石	SP241	安山岩	円形	82	79	44	443	
9	磨石	13-10Ⅱ	安山岩	楕円形	124	89	41	810	
10	磨石	SK157	安山岩	楕円形	76	60	49	299	端部に敲打痕
11	砥石	SK247	緑色凝灰岩	短冊形	67	42	22	94	

Ⅳ　稲荷山館跡

1　遺跡の概要

館跡の現況は、方形区画と考えられる南西部に土塁と堀跡が現存しており、一辺が約70m規模のＬ字形を呈する片直角形態と推測される。明治44年に堀跡南西隅から外側約30m付近で、地権者が畑地耕作中に箕一杯ぐらいの埋納銭を発見したと伝えられている。また、国道付設工事の際には、建物の礎石と考えられる礫石が出土したことが知られている。平成８年には国道沿いに整備される貯水槽の設置に伴い、米沢市教育委員会が約70㎡を対象に発掘調査を実施し、主郭に築いた溝跡や柱穴等が検出された。本館跡は伝承によれば長井氏の家臣、熊坂利衛門の築城とされ、伊達氏の置賜侵入の際に最後まで戦ったが敗れ、廃城になったとの言い伝えがある（山形県教育委員会1995）。周辺一帯には10余りの館跡や山城が点在していることから、第Ⅱ章でも触れたとおり古来より交通の要衝であったことが窺われる。

現在の館跡は国道によって南・北側に分断され、盛り土工法により建設された国道の影響で南と北では約５ｍの標高差が生じている。17年度の第１次調査は、館跡の南辺土塁から南へ約70m離れた山麓を対象とした。郭外ではあるが館跡に関連する施設等が存在した可能性も考えられたことと、西進する高速道法線内の地下状況を確認する目的で発掘調査を実施した。その結果、当該期の遺構は確認されず、出土した遺物も付近からの紛れ込みと思われる縄文土器・石器や近世磁器など、数片の資料を得たのみであった。

今回の調査範囲は高速道建設に伴う工事用道路を対象とした約200㎡であり、Ｌ字形に残存する堀跡と土塁内部の館跡郭内を主体とした130㎡程について精査を行った。調査区は現存する土塁に対し直交しており、土塁の断ち割りは調査区西辺に沿って実施できた。郭内より10基の柱穴が検出されたが、建物を構成するような配置で分布するものはない。現況の地目は杉林となっており、遺構検出面までは表土下60～80㎝であったが、粘土層の地山に達する樹根も多く、後世の植栽により破壊された柱穴等も多いと思われる。遺物は土塁（ＳＦ１）の構築土と堀跡（ＳＤ２）の覆土内及びＳＰ３柱穴から、土堝や擂鉢の破片が出土したが、数が少なく器形を窺えるものも認められない。

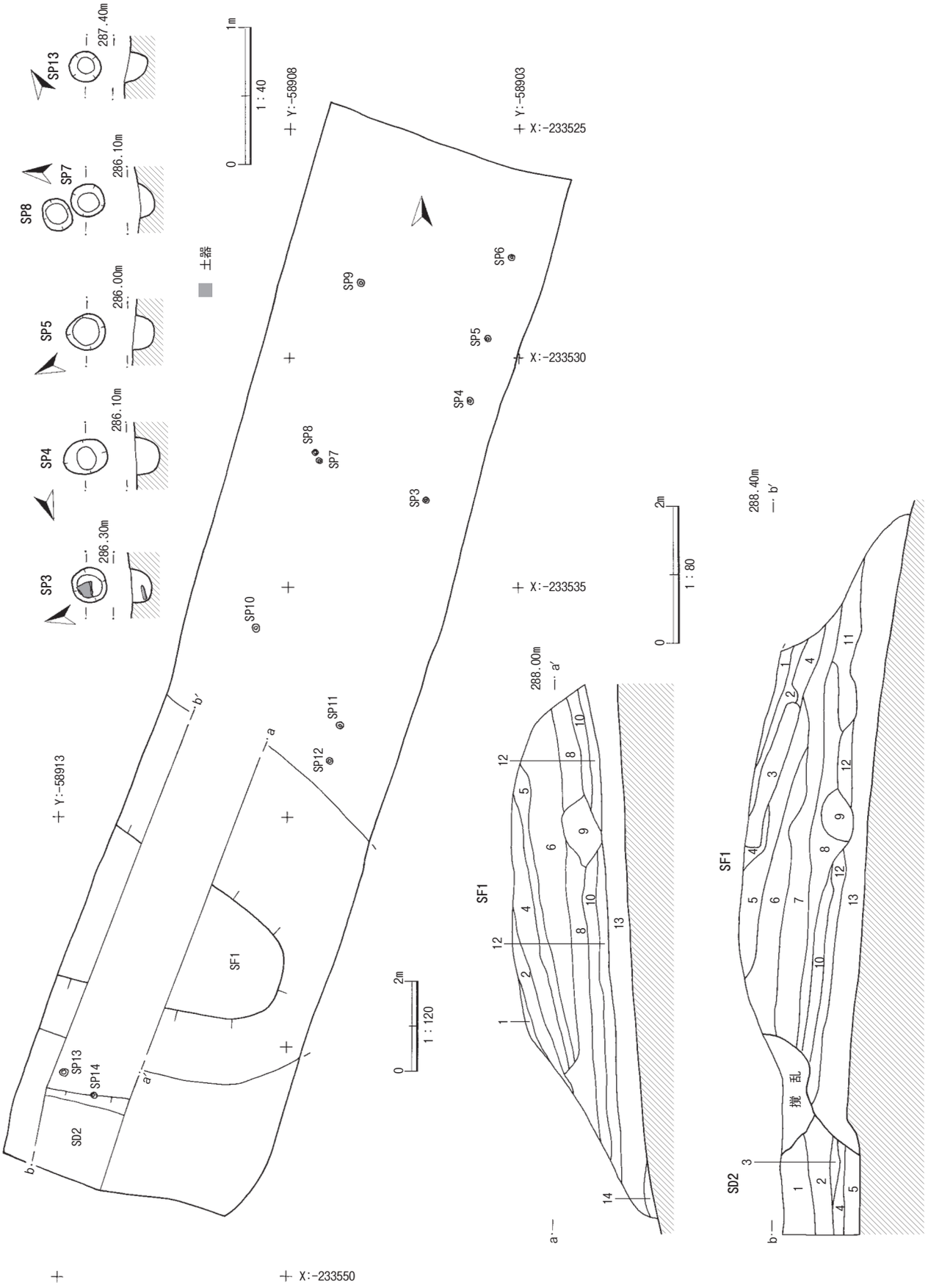
2　検出遺構

検出された遺構は土塁と堀跡のほか12基（ＳＰ３～14）の柱穴であり、このうちの２基（ＳＰ13・14）は土塁の掘り下げ後に確認できたもので、土塁構築以前の所産と考えられる。

土塁（ＳＦ１）はＬ字形に残存する南辺の端部が調査区域に属し、外周を巡る堀跡と伴に遺存状態は良好である。現況で測り得る土塁の規模は、南辺の長さ約25m、基底部の幅7.6m、上部幅2.8m、主郭から見た高さ1.4mで、堀跡との比高差は約1.9ｍを測る。断面観察によると概ね水平に盛土された12層位（２～13層）に分層され、堆積の状況から上層（２～６層）と下層（７～13層）との大別二分割と見なされた。下層部は初段階として地山上に層厚40㎝前後の黒色土（13層）を盛り上げ、以後は版築を経ながら約15～20㎝ごとに盛土が行われている。９層位は地山を基調とした撹乱層で、塊となって部分的に堆積する。上層部はこれまで水平に積み上げられた状況から、主郭側に傾斜する構築法へと変わる。したがって、内郭側の頂部が最終的に盛土されて完成したものと理解される。盛土は全体的に黒色または黒褐色土を基本とし、上・下層ともに地山の砂や粘土を混入する層位が認められる。西壁土層断面に見る堀跡からの立ち上がりは、45度の急傾斜を呈する。遺物はほとんどが上層から出土しており、土堝片24点と擂鉢片２点を数えた。

堀跡（ＳＤ２）は調査区の制約上、土塁側1.5m程を掘り下げたに止まったが、現況では下端幅約3.5ｍを測る。地山の掘り込みは浅く、土塁端部との段差は約20㎝を測るに過ぎない。堀底全体の様相は明らかでないが、調査範囲の底面は平坦で、黄褐色の粘土層に覆われる。覆土は水平に堆積した黒褐色土が基調で、上層は灰色を帯び、砂の混在が顕著である。堀跡からの出土遺物はない。

第21図　稲荷山館跡調査概要図（S＝1：1,000）



第22図　遺構配置図、ＳＦ１・ＳＤ２断面図、ＳＰ３～５・７・13

第22図　SF1

1	10YR3/1	黒褐色	シルト	現表土層。植物根を多く含む
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	10YR4/3シルト、10YR2/1シルトをブロック状で20％含む
3	10YR3/2	黒褐色	シルト	（10YR5/3砂との撹乱層）
4	10YR2/1	黒色	シルト	10YR3/1シルト、10YR4/4シルトを斑状で20％含む
5	10YR2/1	黒色	シルト	10YR4/3シルト～粘土、10YR3/1シルトを塊状で20％含む
6	10YR2/2	黒褐色	シルト	
7	10YR2/1	黒色	シルト	
8	10YR2/3	黒褐色	シルト	砂礫を多量に混入
9	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂～粗砂	10YR2/3シルトをブロック状で30％含む
10	10YR2/1	黒色	シルト	
11	10YR5/2	灰黄褐色	粗砂	10YR2/1シルトを帯状で20％含む
12	10YR2/1	黒色	シルト	10YR5/2砂をブロック状で５％含む
13	10YR2/1	黒色	シルト	
14	10YR2/2	黒褐色	シルト	（地山との漸移層）

SD2

1	10YR3/1	黒褐色	シルト	砂を多量に混入
2	10YR3/1	黒褐色	シルト	10YR5/2砂をブロック状で20％含む
3	10YR3/1	黒褐色	シルト	10YR5/2砂を斑点状で５％含む
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	
5	10YR2/1	黒色	シルト	10YR4/2粗砂をブロック状で20％含む

SP3

1	10YR2/1	黒色	シルト	砂礫混じり

SP4

1	10YR2/1	黒色	シルト	小礫混じり

SP5

1	10YR2/1	黒色	シルト	炭化物を含む。植物根を多く含む

SP7

1	10YR2/1	黒色	シルト	砂混じり

SP13

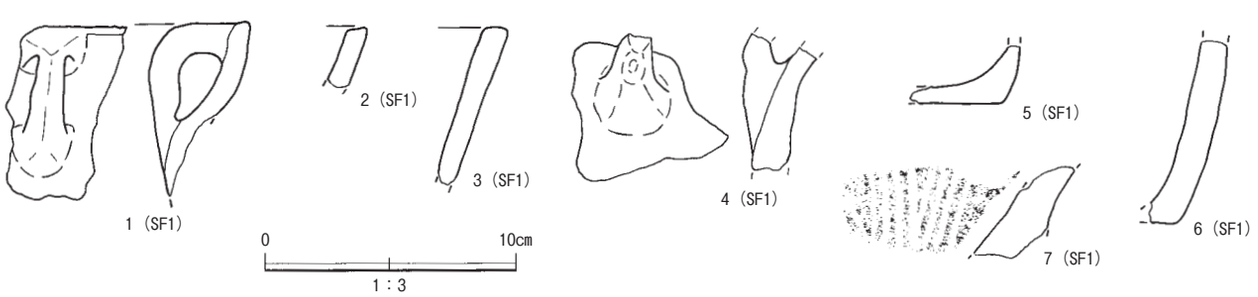
1	10YR2/1	黒色	シルト	植物根を含む。砂混じり

柱穴（ＳＰ３～14）はいずれも径約25㎝規模の円形プランで、検出面からの深さは10～15㎝を測る。このうち、ＳＰ３～６の４基は南北方向でほぼ直線的な配置となるが、柱間距離が不揃いなことから、建物を構成するものではないと考えられる。いずれの覆土にも砂礫が混じる黒色土が堆積し、ＳＰ３からは唯一遺物が出土している。

３　出土遺物

出土した遺物はほとんどが内耳土堝で、実測図化したのはその口縁部もしくは底部の破片資料である（第23図）。器形は平底の底部から体部が外傾しながら立ち上がり、内耳が貼り付けられる頸部付近で屈曲して開く形態と推定される。体部外面に煤が付着するものが多く、胎土には砂粒の混入が認められる。大半が赤褐色を呈する土師質のものであるが、灰色をなす瓦質の破片も１点出土している。

口縁部資料（１～３）からは口唇に平坦な面を有することが解り、内傾する１・２（同一個体）と水平になる３の二例が存在する。１に貼り付けられた取手は頂部に口唇から続く平坦な面を有し、縦断面で見た形状が三角形様を呈する。内耳土堝の取手は近接した２箇所と、これに対面した１箇所の計３箇所に付加され、二等辺三角形状の配置となる。取手の内側には吊り下げによる痕跡が認められず、外面同様に煤が付着していることから、カマド等に載せて使用したものと推測される。４は取手下部が残存する頸部片で、１～３に比べて器壁がかなり厚い。外面は被熱により赤変しているが、煤の付着は認められない。５・６は底辺部資料で、前者が１・２もしくは３と、後者は４と同一個体である可能性が高い。７は内面に４条１単位の粗い卸目が施される瓦質の擂鉢片で、胎土・焼成とも４・６に近似している。平成８年の市教委による調査で、同様の破片が13点出土している。



第23図　出土土器

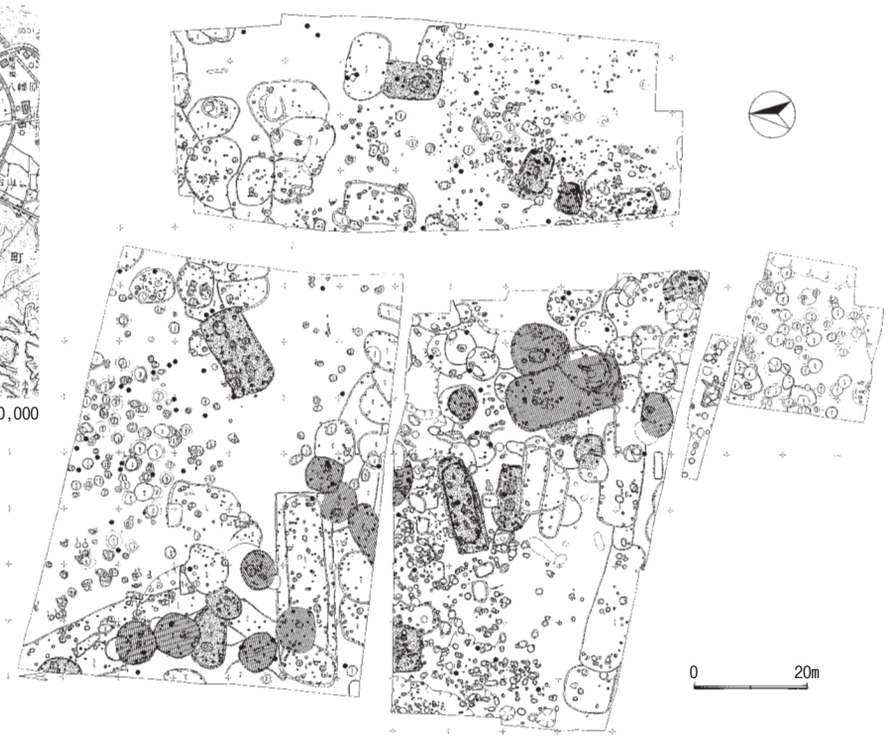
Ⅴ　総　　括

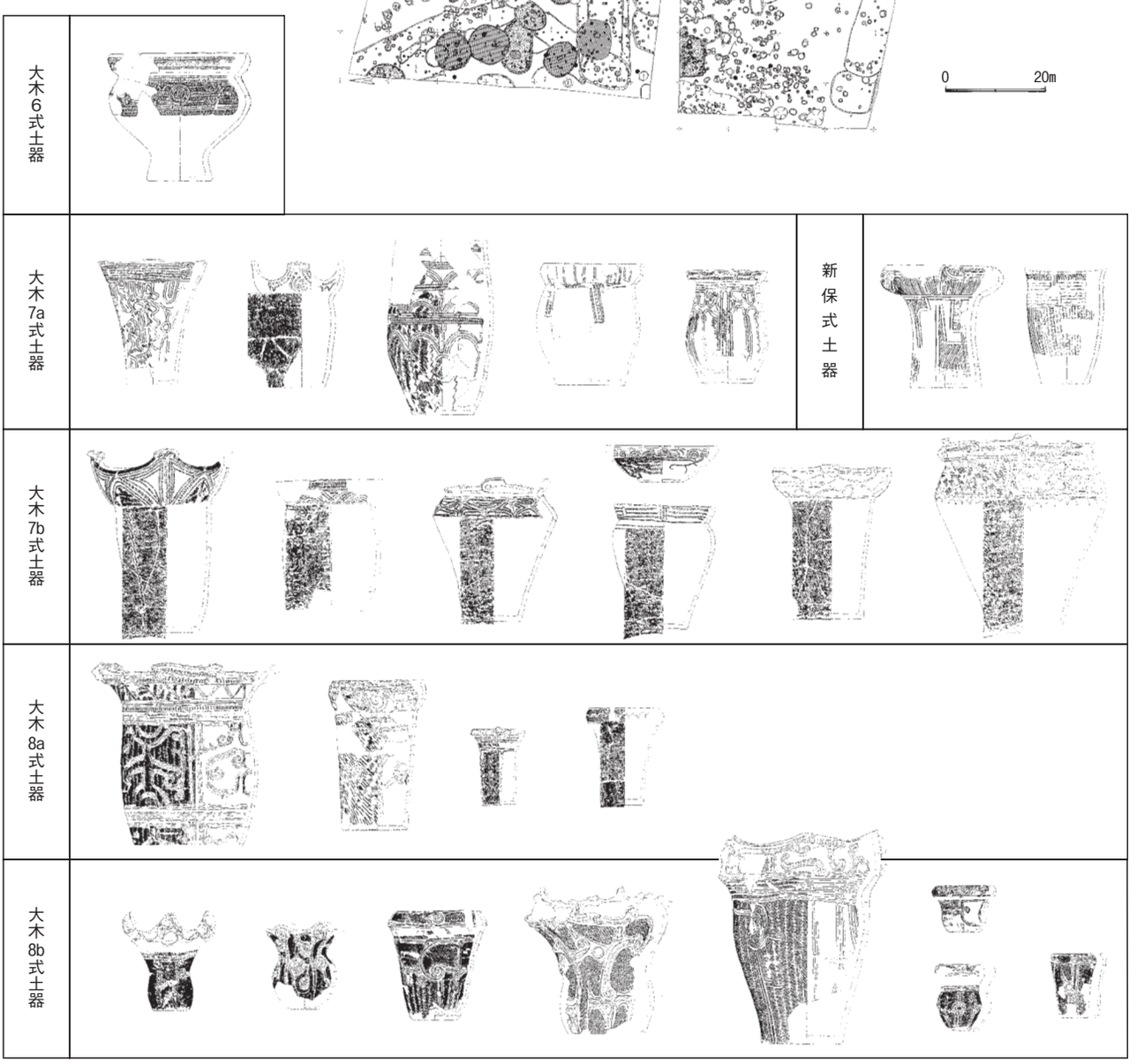
1　山ノ下遺跡

山ノ下遺跡は米沢市万世町桑山に所在し、平成15年度及び17年度の試掘調査により、縄文時代の集落跡として登録された遺跡である。堤屋敷遺跡東側の台地上に立地し、その範囲は東西約60m・南北約80mの広がりを有する。今回の調査は東北中央自動車道建設に伴う緊急発掘調査で、遺跡に係る3,000㎡を対象として実施した。

検出された遺構は、縄文時代の陥穴と土器埋設遺構、平安時代～中世の所産と目される掘立柱建物跡と区画溝や溝状遺構、縄文時代の遺物を包含する土坑・ピットなど、計400基余を数えた。出土した遺物は整理箱７箱に相当し、内容は縄文時代の土器・石器が主体を占め、他に９世紀代の須恵器や土師器、中世に属する土器や近世陶磁器などがある。これら遺構・遺物の所在から、遺跡の年代は縄文時代と平安時代～中世とに２大別されることが判明した。

縄文時代では単発的な存在ながら、調査区南端の土坑内（ＳＫ８）から前期初頭に位置付けられる土器片（第16図６）が出土している。ＳＫ７・21・118の陥穴はこれと近接した場所に配置され、当該期に後続する前期末葉から中期前葉の遺構群が北西部で検出される在り方から、出土遺物がないもののこの時期に機能していたと考えてもそれ程の矛盾はない。調査区北西域は台地縁辺部にあたり、中期前葉の遺物を含む土坑や土器埋設遺構などが散在しているが、住居跡は確認できないことから遺跡の中心域はより北側にあるものと推察される。出土土器は大木６式～７ｂ式に併行する内容のものと捉えられ、撚糸圧痕文を主文様とする大木７ｂ式土器が主体を占める。当該期に所属する遺跡は近隣の八幡原地区でも確認されているが、吾妻町に所在する台ノ上遺跡（第24図）は該期の拠点的集落跡とすることができよう。台ノ上遺跡は本遺跡の西方約3.3㎞に位置し、最上川によって形成された自然堤防上に立地する。前期末葉（大木６式）から中期中葉（大木８ｂ式）にかかる大規模集落跡で、その範囲は東西約250m・南北約750mに及ぶと推測され、米沢市教育委員会によってこれまでに都合14次に亘る試掘を含めた発掘調査が行われている。調査の結果、竪穴住居跡71棟をはじめ、墓壙65基や埋設土器90基などの遺構が検出された。各時期には核となる大型の竪穴住居が存在し、通常規模の住居は土坑や墓壙群を取り囲むような配置での構築が確認されている。土器・石器・土偶等の出土遺物は総数約26万点を数え、復元された完形土器は320点にも及ぶ。前期末葉の遺構は不明確であり、集落の形成は中期初頭（大木７ａ式）に開始され、中葉（大木８ｂ式）に終焉を迎える。したがって本遺跡は、台ノ上遺跡の前半段階と時期を同じくするものである。東北地方南半の中期初頭段階は、在地の大木７ａ式の型式内容が把握し難いほど周辺諸地域からの影響を受けた時期とされ、併行関係にある関東の五領ヶ台式や北陸の新保式、それに東北北半の円筒上層ａ式といった「異系統」土器の流入が顕著である。ただし、これら異系統の土器は該期のどの遺跡でも出土するものではないため、異系統の土器が持ち込まれた遺跡は、その領域での中核を担った拠点集落と認識される。台ノ上遺跡では、北陸地方の新保式土器が伴出していることから考えても、中心的集落であったことが窺われる。本遺跡は領域内に形成された衛星的な小規模集落と推定され、「台ノ上文化圏」に派生した部族集落として位置付けておきたい。中期前葉以降、本遺跡の集落は廃絶したようであり、次段階の展開はＳＫ259出土土器から知られるように後期前葉であるが、調査区においては前期初頭の在り方と同じく、単発的にしか存在しない。一方、出土した石器も土器の割合からすれば大半が中期前葉に属するものであろうが、遺構内から土器と共伴したごく一部の資料を除けば、その所属時期を決定するだけの根拠はない。出土点数は僅少であるが、遺跡における生産活動の一端は窺うことができると思われる。打製石器は狩りに係わる器種がほとんどであり、陥穴の存在からも背後の山地を領域とした狩猟活動が想起される。同時に凹石等の出土からは、植生豊かな山地を控えて植物質食料の採集・加工が行われていたことも指摘できよう。





第24図　台ノ上遺跡遺構配置図（部分）、主要土器分類図

次代は９世紀を主とした平安時代の遺物が、沢状の鞍部を呈するＳＸ160内から出土している。台地西縁での検出であり、自然地形と目されるため出土遺物は周辺からの流れ込みによる堆積と判断されるが、調査区内からは当該期の遺物の出土が他になく、遺構の存在も明らかではない。遺物が低地へ流れ込んだとすれば、南方の山麓部に該期の集落が存在した可能性が高い。

その後の展開は、区画施設と考えられるＳＤ１～６内から出土した内耳土堝により、15・16世紀頃の中世であることが解った。これら溝跡の南側には、同時期の所産と見なされる東西棟の掘立柱立建物跡（ＳＢ81・83）が位置し、溝跡は居宅を囲う堀としての機能を備えていたと思われる。遺跡は背後に聳える早坂山の北側山麓に当たるが、山頂には南北朝期の築城とされる早坂山館跡が所在し、さらに館の西方直下には戦国時代の山城である鷺城跡が存在する。したがって、当該期にこの地がこれら城館に関連する施設の一部と仮定すれば、建物跡は根小屋として構築されたものと推測できよう。また、全容が不明ながら区画施設を有することから、中世社会の荘園制度に確立した「在家」と考えることもできる。階層分化の進行とともに有力な在家農民は分家して「脇在家」となるが、荘園制度が衰退した以降はそれらの一部を「屋敷」と呼称するようになる。隣接する堤屋敷遺跡の地名もこれに由来していることが想定され、遺構群は「堤屋敷」の一部に該当した可能性も考慮できるところである。

２　稲荷山館跡

館跡の主体はすでに現国道によって南北に分断されているが、西辺約70m・南辺約30mを測る片直角（Ｌ字状）形態の土塁と堀跡が残存している。17年度の第１次調査では、館跡の南辺土塁から南へ約70m離れた山麓を対象とした。郭外ではあるが、館跡に関連する施設等が存在した可能性も考えられたことから調査を実施した。その結果、当該期の遺構は確認されず、出土した遺物も付近からの紛れ込みと思われる縄文土器など、数片の資料を得たのみであった。今回の調査範囲は、現国道から高速道建設用地に至る工事用道路部分約200㎡を対象にした。調査区は南辺土塁に直交する南北方向の長方形で、残存する土塁・堀跡の端部から主郭域にかけて設定した。郭内からは10基の柱穴が検出されたが、建物を構成できるものではなかった。土塁は盛土の堆積状況から、概ね二段階の構築工程が考えられた。水平に版築された下層部に対し、上層部の堆積層は斜位方向になることから、上層は郭内より盛り上げられたものと推察される。

稲荷山館跡は山麓の自然地形を利用し、尾根に面した空間を土塁と堀でＬ字状に区画して構築されたと考えられる。山城に対する平城に分類され、平城としては初期に該当する。平城は米沢城のような三ノ丸を含む総曲輪を構成したものから、半町四方の屋敷までと規模的に多様である。平城の場合は、現在の市街地や水田地帯に所在していることもあって、後世の開発で破壊を受け消滅した事例も少なくない。したがって、明確に城館全体の痕跡を遺すものはごく限られよう。

本館跡は『山形県中世城館遺跡調査報告書』（山形県教育委員会1995）によれば、「稲荷山型」と称され、分類基準になっている。これは山麓を利用した山寄式の形態を有するもので、山を背景としてＬ字状に土塁と堀で区画することを特徴としている。この形態の事例は本館跡のほか、米沢市の森合館跡や馬ノ越道館跡が代表として挙げられ、川西町玉庭地区と南陽市宮内地区に類似した小規模な館跡が残存しているようだ。これらは、出土遺物等により14世紀代の構築と目されている。中世城館は平安末の在地土豪による方形館、鎌倉期から南北朝期にかけての大江氏の城館、そして室町～戦国期における伊達氏による城館・山城の順に変遷する。城館跡は築城者すら明確にできないものが大半のなか、前章で触れたとおり本館跡は長井氏の家臣熊坂利衛門の築城とされ、伊達氏の置賜侵入の際に最後まで戦ったが敗れ、廃城になったと言い伝えられている。

山城や城館は、他国に接する峠や主要街道沿いに数多く構築されることは周知の事実である。本館跡は、米沢城址を起点に片子→梓山→綱木→刈安→川越石→赤浜→明神峠を経て板谷へ通じる「明神峠道」沿いに分布し、街道警備の要所となったことであろう。街道沿いには中世以前の遺跡が数多く確認されている状況も考慮すれば、街道としては最も古くから機能していたものと推測される。

引用文献

山形県教育委員会　1995『山形県中世城館遺跡調査報告書　第１集（置賜地域）』
米沢市教育委員会　1996『遺跡詳細分布調査報告書第10集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第54集
阿部明彦　2003「最上川中・下流域に見られる縄文中期の異系統土器」『最上川文化研究Ⅰ』東北芸術工科大学東北文化財研究センター報告
菊地政信　2006『台ノ上遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第88集　米沢市教育委員会
渋谷孝雄・須賀井新人　2006『梓山ａ遺跡・梓山ｄ遺跡・町在家館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集　財団法人山形県埋蔵文化財センター
須賀井新人・山木　巧　2006『稲荷山館跡・堤屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第156集　財団法人山形県埋蔵文化財センター

写真図版

遺跡近景（東から）

拡張前調査区遺構検出状況（北から）

拡張前調査区遺構検出状況（南から）

調査区南西部遺構検出状況（北東から）

調査区南東部遺構検出状況（北西から）

ＳＤ６検出状況（東から）

第１回拡張範囲遺構検出状況（西から）

ＳＤ１～５完掘状況（東から）

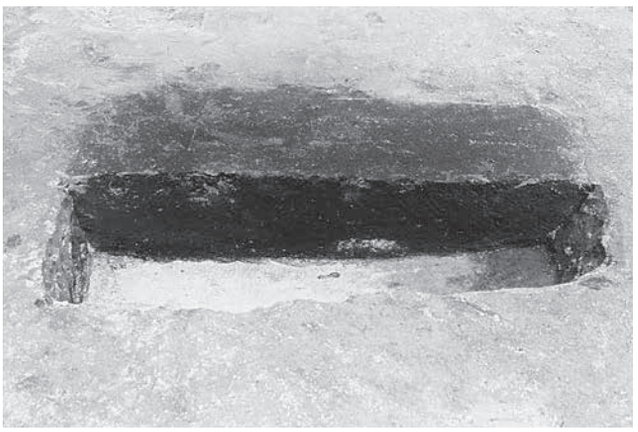
ＳＤ６底面検出状況（東から）

ＳＤ１土層断面（南西から）

ＳＤ６土層断面（西から）

ＳＤ３土層断面（西から）

ＳＤ６・ＳＫ90土層断面（南西から）



ＳＫ15土層断面（南から）

ＳＰ13土層断面（南から）

ＳＰ30～32土層断面（南から）

ＳＫ48土層断面（南から）

ＳＫ59土層断面（南から）

ＳＫ213・214土層断面（南東から）

ＳＤ66・ＳＫ220土層断面（南から）

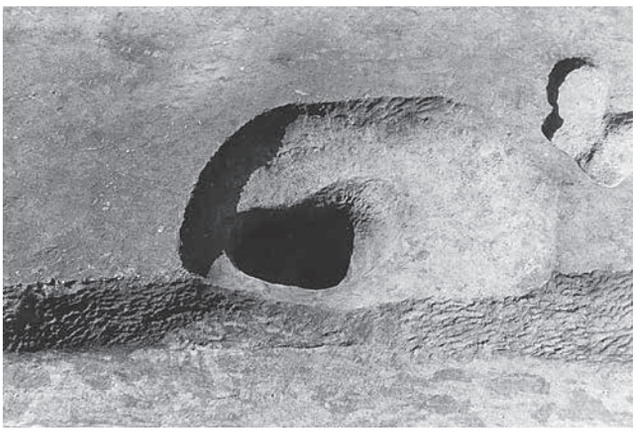
ＳＫ251土層断面（南から）

ＳＤ165土層断面（南から）

ＳＤ171・172土層断面（南から）

ＳＤ183土層断面（西から）

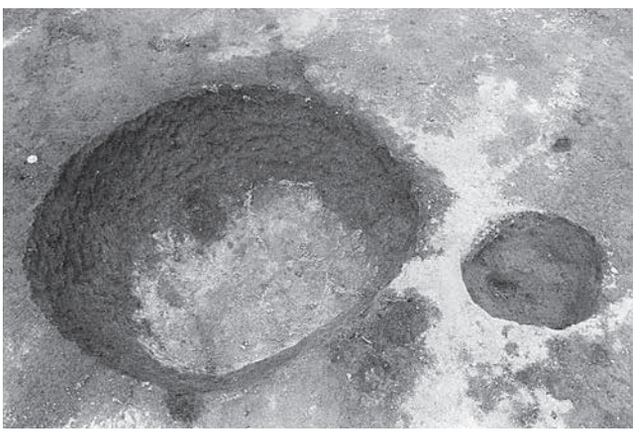
ＳＤ184土層断面（西から）



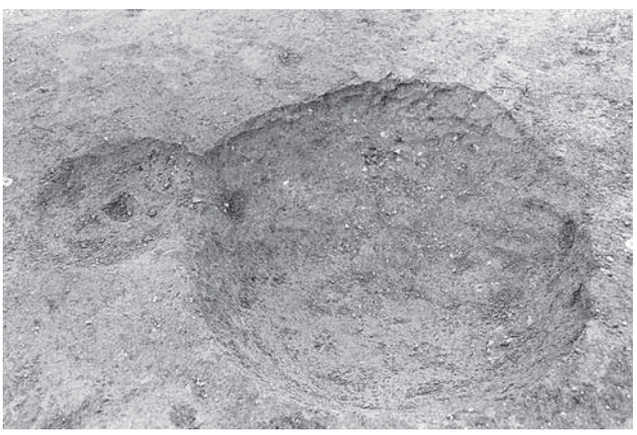
ＳＫ37完掘状況（北から）

ＳＫ43完掘状況（北から）

ＳＫ44完掘状況（北西から）



ＳＫ96・ＳＰ156完掘状況（東から）

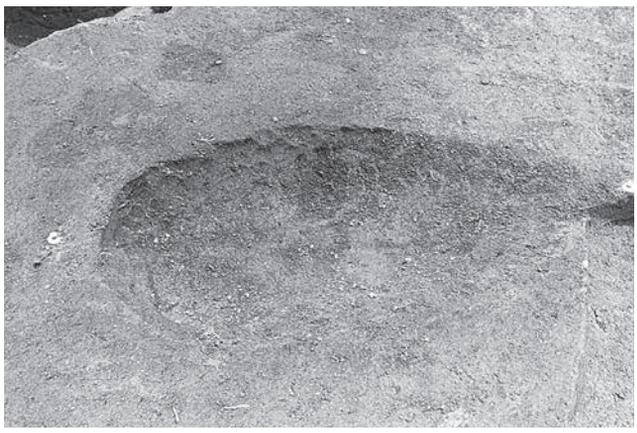


ＳＫ162・ＳＰ163完掘状況（西から）

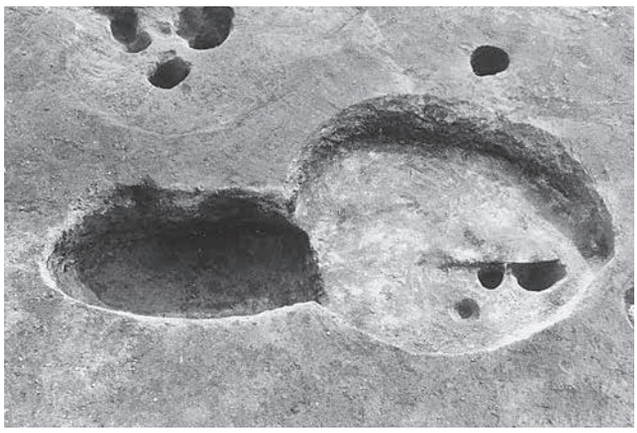
ＳＫ168完掘状況（南から）

ＳＫ177完掘状況（南から）

ＳＫ186・187完掘状況（南から）



ＳＫ190完掘状況（南西から）



ＳＫ193・194完掘状況（北東から）

ＳＫ197完掘状況（南から）

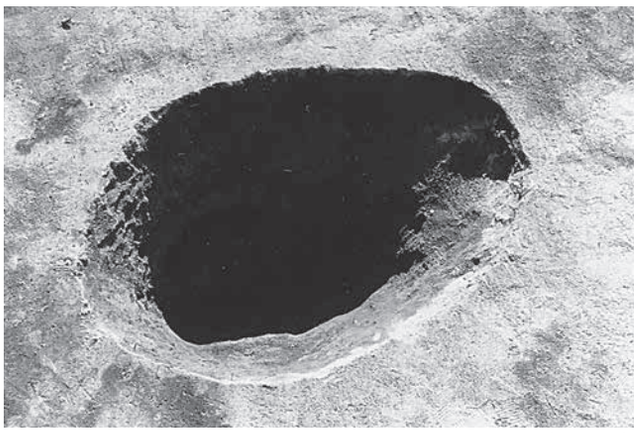
ＳＰ209・210完掘状況（南西から）

ＳＫ218完掘状況（南東から）

ＳＫ239完掘状況（南西から）

ＳＫ245遺物出土状況（西から）

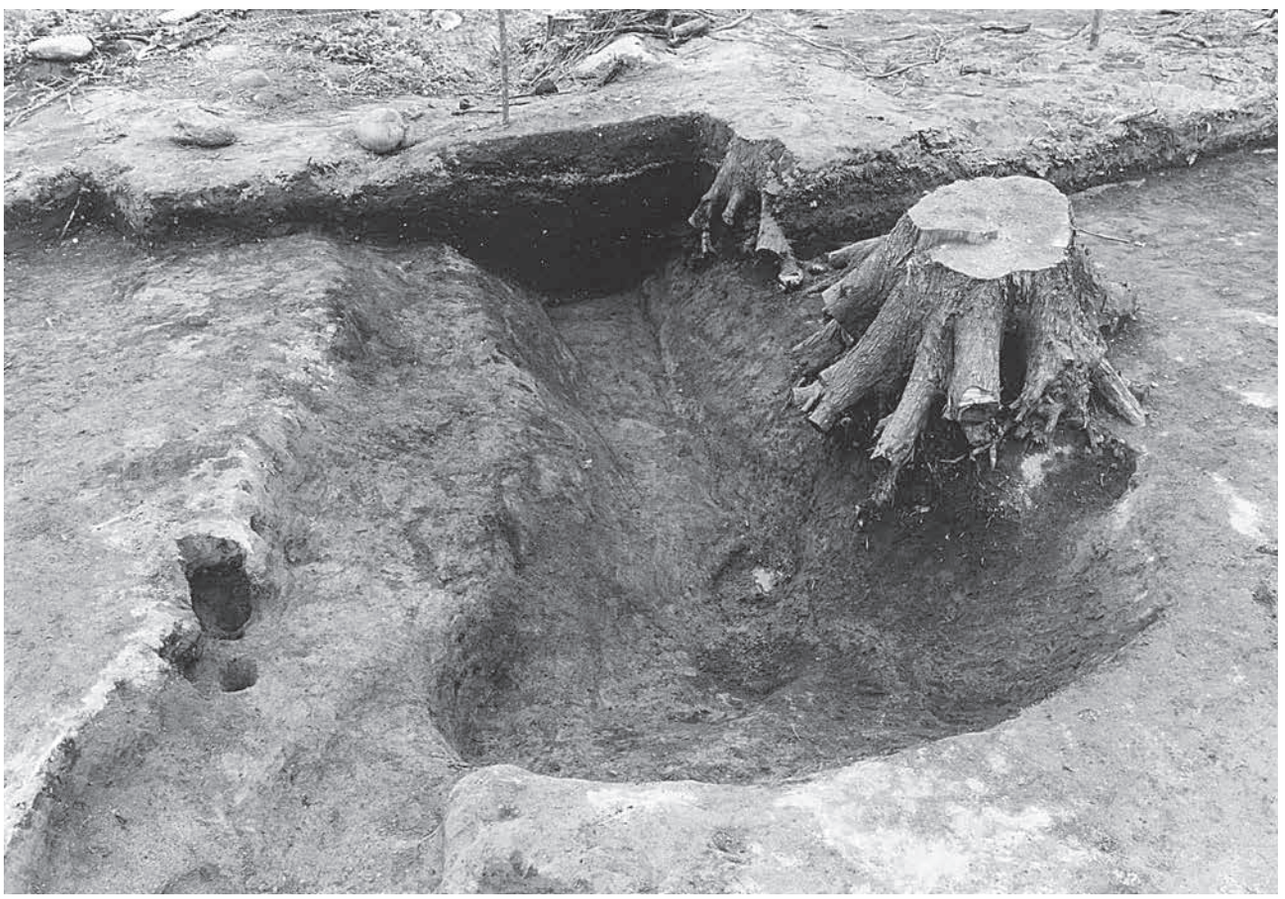
ＳＤ255遺物出土状況（南から）



ＳＫ７完掘状況（東から）

ＳＫ20～22完掘状況（北東から）

ＳＫ118完掘状況（南西から）



ＳＸ160掘り下げ状況（東から）

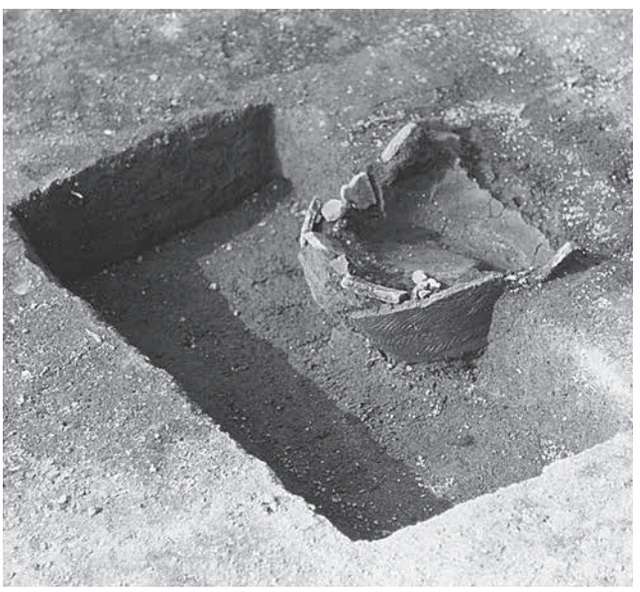
ＳＸ191掘り下げ状況（西から）

調査区北西部完掘状況（上空西から）

ＥＵ237検出状況（南から）

ＥＵ237掘り下げ状況（北から）

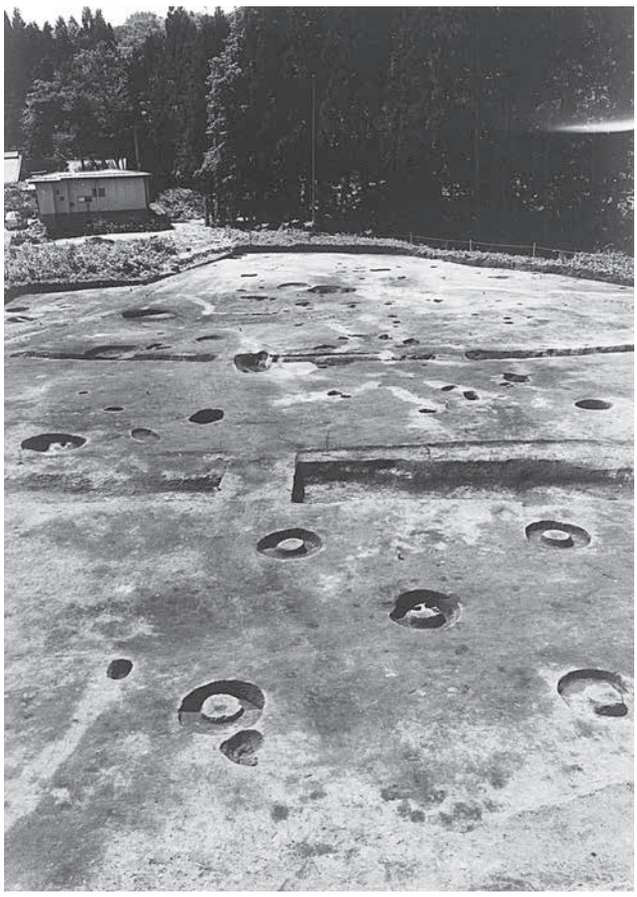
ＥＵ238検出状況（西から）



ＥＵ238掘り下げ状況（南西から）

ＥＵ249検出状況（西から）

ＥＵ249掘り下げ状況（西から）



南半部完掘状況（北から）

北東部完掘状況（東から）

北西部遺構集中域完掘状況（南西から）

北西部第２回拡張範囲完掘状況（西から）

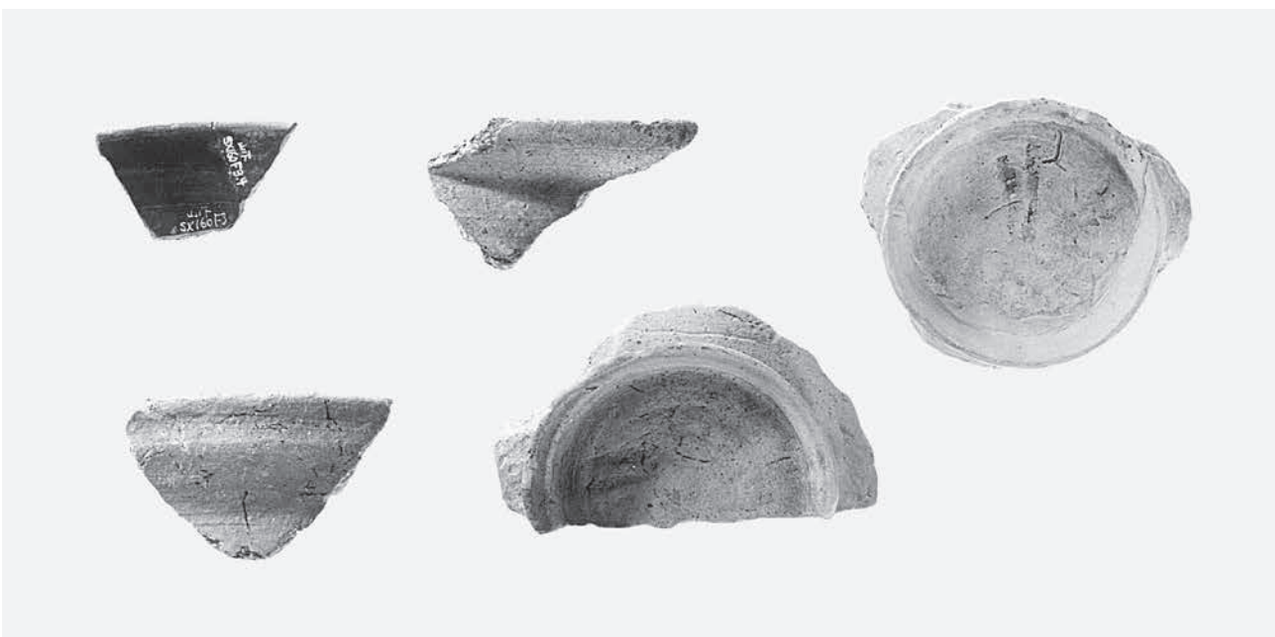
表土除去・西整理

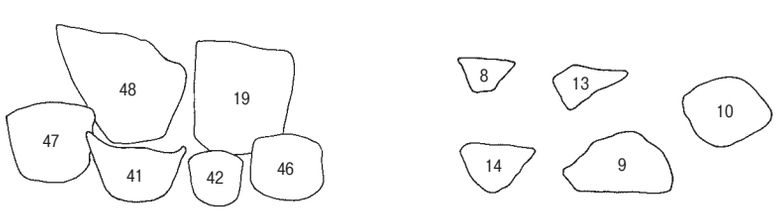
遺構掘り下げ

写真撮影

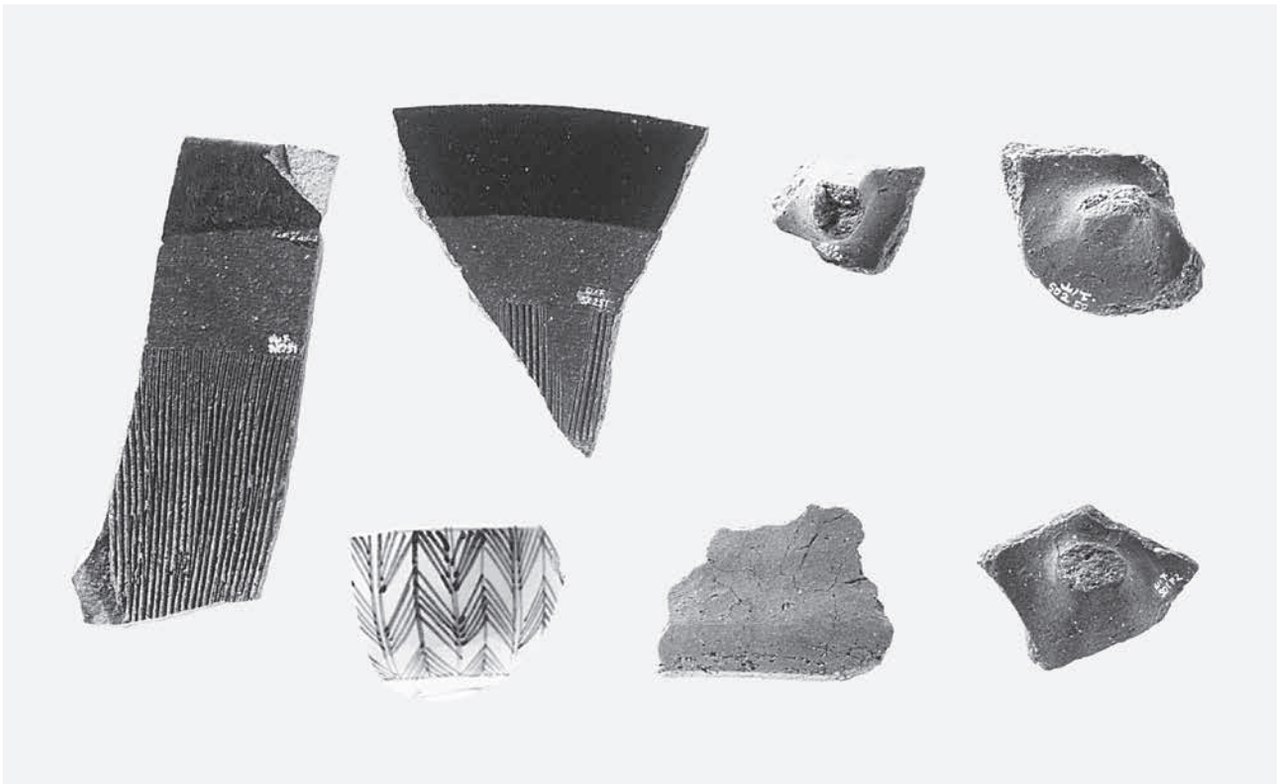
平面図作成

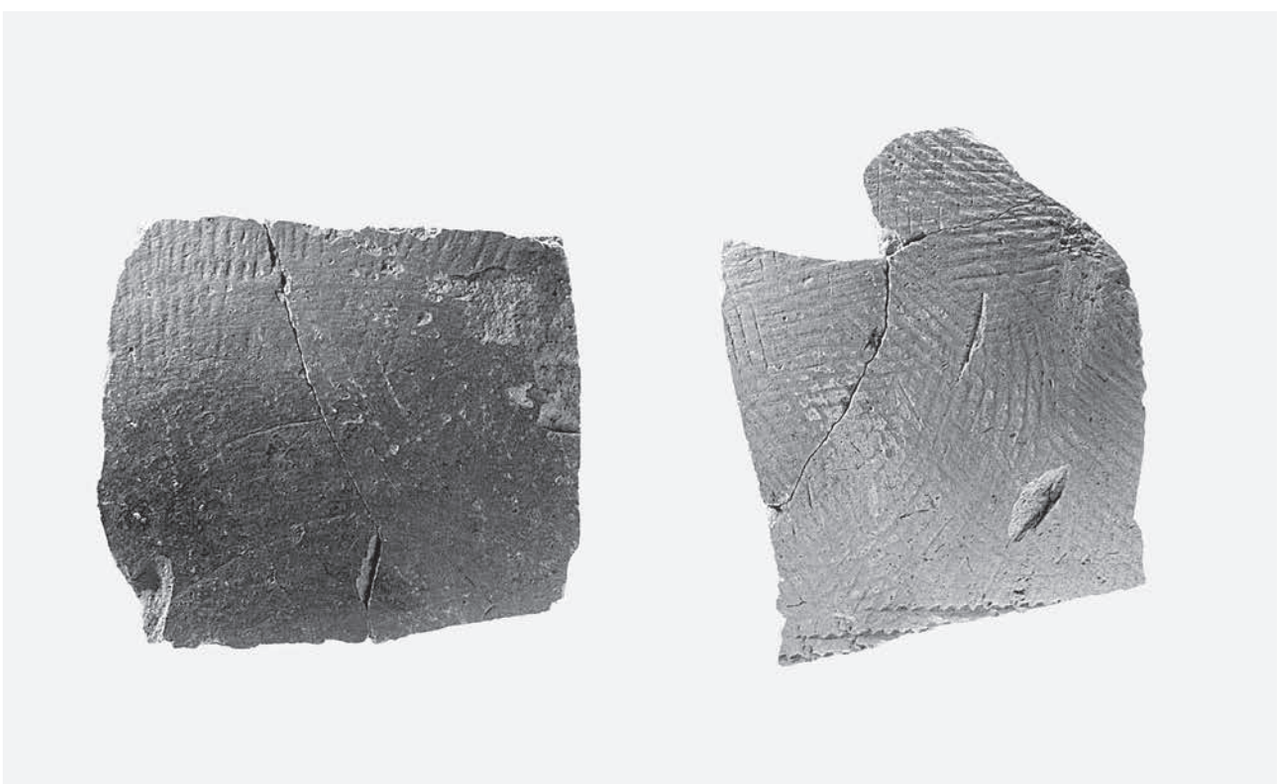
埋設土器取り上げ

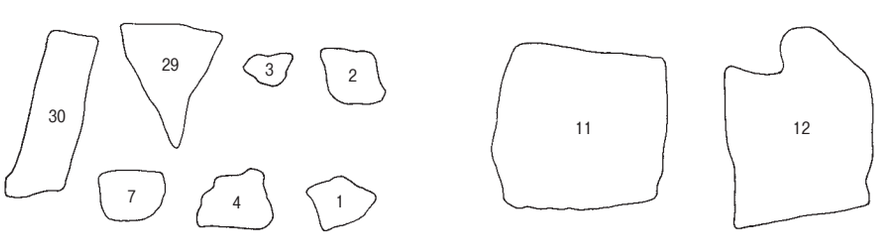




復元土器、土師器

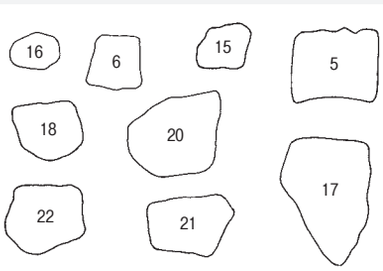






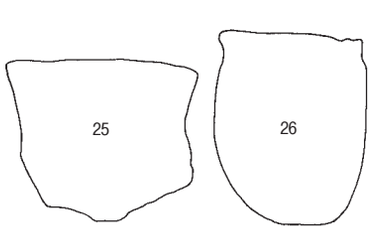
土堝・近世陶磁器、須恵器

23



縄文土器（1）

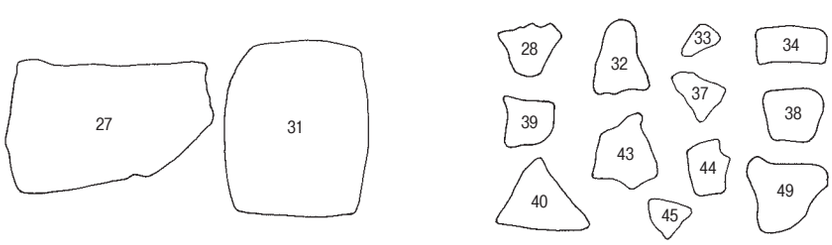
24



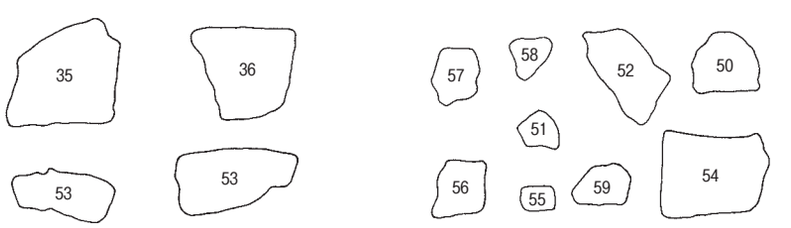
25

26

縄文土器（２）



縄文土器（３）



縄文土器（4）

19

41

42

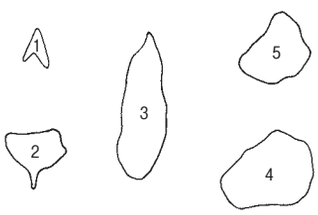
縄文土器（５）

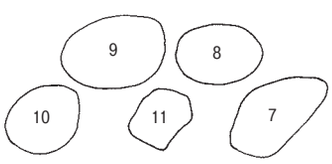
48

46

47

縄文土器（6）





6

石器

土塁・堀跡の調査前状況（南東から）

調査区表土除去（南から）

土塁掘り下げ（南東から）

面整理（南から）

土塁・堀跡の掘り下げ（南東から）

土塁・堀跡の掘り下げ（南から）

柱穴の半截（南から）

調査区全景（南から）

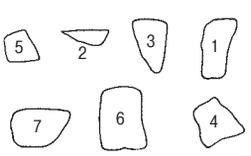
調査区全景（北から）

ＳＰ３土層断面（西から）

ＳＰ４土層断面（西から）

ＳＰ５土層断面（西から）

ＳＰ６土層断面（西から）



出土土器

報告書抄録

ふりがな	やまのしたいせき・いなりやまたてあとだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山ノ下遺跡・稲荷山館跡第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第169集
編著者名	須賀井新人　阪　英子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2008年３月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やまのしたいせき 山ノ下遺跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ばんせいちょうくわやま 万世町桑山 あざやまのした 字山ノ下	06202	平成17年度 登録	37度 53分 40秒	140度 09分 29秒	20060509 ～ 20060731	3,000	東北中央自動車道（福島県境～米沢）建設
いなりやまたてあと 稲荷山館跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ばんせいちょうずさやま 万世町梓山 あざいなりやま 字稲荷山		A-393	37度 53分 39秒	140度 09分 45秒	20060718 ～ 20060804	200	

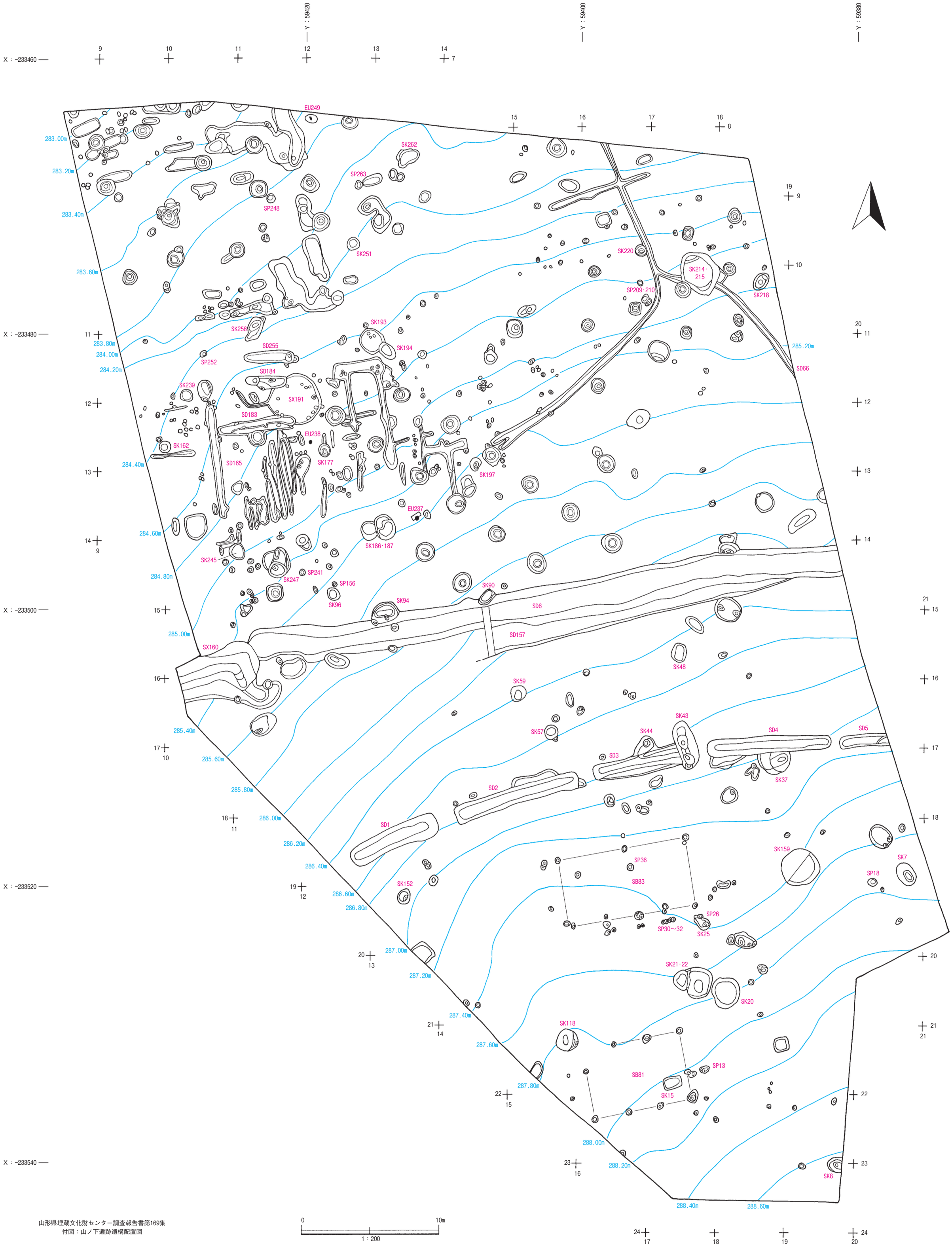
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山ノ下遺跡	集落跡	縄文時代 （前期・中期・後期）	陥穴　3 土坑 土器埋設遺構　3	縄文土器 打製石器 礫石器	大木７ｂ式期を中心とする集落跡の一部を検出するとともに、中世の溝で区画された山麓の居宅を検出した。 （文化財認定箱数：７）
		平安時代 （９世紀）		須恵器 土師器	
		中世	掘立柱建物　2 溝	内耳土堝	
稲荷山館跡	城館跡	中世 (15世紀)	土塁　1 堀　1 柱穴　12	内耳土堝 擂鉢	Ｌ字形態に残存する土塁と堀跡、及び館跡内郭の一部を調査した。 （文化財認定箱数：１）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

山ノ下遺跡・稲荷山館跡第２次発掘調査報告書

2008年３月21日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　藤庄印刷株式会社
〒990-0821　山形市北町１丁目３－１
電話　023-684-5555



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第169集
付図：山ノ下遺跡遺構配置図